

掩護を受くるを常則とした、又敵地浸入も甚だ淺かつた。

英國

(三) 英國

英軍の航空は、既に當初に於て立ち遅れて居た。然し、當時禁斷と云はれた敵飛行場攻撃を実施して制空を浮んとした着意とか、獨軍の政略攻撃に應へて敵後方の工業地帯等を襲ひ、地上作戰協力の範圍を超えて、航空獨自の攻撃用法を採つたこと等、は確かに本大戰間航空用兵思想上の白眉と云つてもよからう。

又獨の「ロンドン」襲撃に對應して、「ベルリン」襲撃のため超重爆撃機の準備を進めた。(實行に至らなかつた)如き、佛軍が各種理由を口實に之が政略攻撃の實行に反對せし思想に比すれば、英空軍は數に於て佛軍に及ばずと雖も確かに先見の明があつたと云へやう。

米國

(四) 米國

米軍は豊富な工業力で航空の大量生産に成功し、大戰間自國製飛行機一一、八〇〇機、外國製機五、二〇〇機を有するに至つた。

然し急造の空軍は實力に乏しく、米空軍は七月に一一八名、八月に二四七名、九月に僅か十日間で五一四名を夫ふ様な結果を生じて居る。航空部隊の急造は量的には工業力さへあれば成功するが、質的には何としても出来るものでないことを證明するもので、之を今次の支那事變に於ける支那空軍に見ても如實に之を裏書して居る。

政略爆撃

(五) 政略爆撃

前項に記述した通り、多少其の片鱗は見せて居るが、現時考へらるる様な、一氣時勢に戰爭經局の目的を達しやうと云ふ、雄大な考からやつたのでなくて、當時は脅威示威的色彩を當分に含む純然たる戰術的範圍を脱して居ない。

これも器材の性能が十分でなく機數も不足し航法能力も上達して居なかつたので、天候に支配されたり、夜間出勤の制限を受けたりした事實もあるが、最大の理由は一般の思想が未だそこまで確立して居なかつたからであらう。

回數は逐年増大したが、戰場の情況に鋭敏に支配されて餘力があつたら實施すると云ふ傾がなかつたでもない。

特種用法

(六) 特種用法

飛行機による宣傳間諜運搬、空中補給等は既に本戦争間、其の例が多いし、爆撃の威力が少ない時代であつたので之を補ふ爲に着陸して爆破した例も東方戦場や「バルカン」近東方面に其の例がある。

敵背後降下

特に「シナイ」半島北部の沙漠中に著陸して、「パレスチナ」の英軍に對する水道を爆破した例などは、有效であつた一例である。

之等は伊軍の「エチオピア」遠征に大規模の空中補給（一軍團十五日分補給）をやつたり、支那事變で我が航空隊が各方面で空中補給や傳單（宣傳ビラ）撒布をやつたり、今次歐洲戦で獨軍の各方面に有效なる「デテント」部隊降下をやつたりして居る例と共に、空軍の新しい生命を開拓したものと云へやう。

休戦時各國飛行機保有量

三、休戦時各國飛行機の保有量

勿論正確には判明しないが、大體左表の様である如何に大戦間な擴充したかを反省する爲めに重複を忌はず開戦時のものと對照して置く。

國別時期	第一線飛行中隊數		第一線軍用機數		飛行機月製高				
	開戦時	休戦時	開戦時	休戦時	開戦時	休戦時	倍率		
英國	一〇	一八五	一八、五	二七二	三、五〇〇	一一、九	五、一〇	四、八〇〇	四、八〇〇
佛國	二二	二五八	一一、七	一七六	四、五〇〇	二五、六	三七	二、六〇〇	七〇、〇
獨國	四一	三〇九	七、五	二二二	五、〇〇〇	二一、六	一一〇	二、二〇〇	二〇、〇
伊國	二四	六七	二、八	一八五	一、五〇〇	八、〇	一〇〇	一、〇〇〇	一〇、〇
蘇國	六	九七	一六、〇	二六二	七〇〇	二、七	三一五	八〇—八	二〇、〇

一、開戦時とは伊國は一九一五年五月参戦時、他は一九一四年八月  
二、休戦時とは蘇國は一九一七年二月、他は一九一八年十一月

第五節 第一次歐洲大戰後の趨勢

と列強の航空勢力擴充

大戰後の趨勢と航空勢力の擴充

新空軍思想の發生

一、新空軍思想の發生

今日の列強の空軍思想は、大戦間に於ける航空態型の儘に自然に進展したと見るのは誤りであつて、大戦間に發展した航空は大戦の終局と共に一と先づ終焉死滅したものと云へ

やう。そして戦争の絶対根絶に努力した結果、改めて再來すべき深刻徹底した大戦争を覺悟せねばならなくなり、且つ大戦に経験した苦杯を再び手にしたくないと云ふ反省から新しく生み出されたものと見てよいと思ふ。

即ち大戦末期の發展は陸、海軍の作戦に最大限に協力するのを使命として居り、現時の思想は直接空軍で、戦争終局の目的を達成することに邁進して來たもので新國防機構の核心的要素を以て自ら任じて來たものである。

この思想の發生進展に對しては、伊國「ドゥーエ」將軍の戦争學説が大なる役割を果して居る。

(彼は一九二一年制空を論じ、二七年頃迄に之を理論的に完成し、其後主として新國防體型を論じて三一年に没して居る)

彼の學説及之に對する列強の賛否論などは餘りに複雑繁多であるから茲には割愛するが、彼の所論と雖も彼自らが反覆して居る通り、伊國の特殊性を基調としたものであり、之を普遍化して論難することは當を得て居ないし、同時に航空其物以外と相互に關連して居る方面を同時に検討するを必要と思ふ。

尙ほ海主作戦に於ける航空に關しては米の「アクロン」號で殉死した名提督「モフエツ

ト」少將の所論をも相當に研究するを必要と思ふ。

以下新空軍思想の發生につき其の概要を記述して見やう。

### (1) 大戦後の空軍の衰亡

大戦末期、空軍の缺點と見らるゝものは、○飛行機の性能が貧弱であつたこと殊に攻撃の主體である爆撃機の性能が十分でなかつたこと、○機種が逐次雑多不統一に増加し、機數に比較して威力が乏しく眞の空軍的大組織を採り得なかつたこと、○戦役間の必要に迫られて主義もなく擴張した結果、國防思想に於て傳統的觀念を一掃するだけの勇氣がなかつたこと。などであつた。

そして其の衰亡の跡を各國で見ると次のやうである。

英國は大戦の疲弊に依つて其の空軍は殆んど大戦間の十分の一である、五〇〇機に縮小せられ彼が大戦間獨立させた空軍省迄が海軍省の強い反對で危殆に傾した程である。

露國亦十月革命に依つて一五〇〇機は跡方もなく解消した。

伊國は戦後共産急進社會黨「カトリック」各派等の平和運動のため、殆んど二、六〇〇機が消解せんとし僅に八〇機となつた。

獨乙は周知の如く「ベルサイユ」會議の結果、一機も保有せなくなつた。

佛國だけは僅かに、大戰末期の形態を保つた。

此の様に、世を擧げて戦争防止、國際協調の反戰的思想に支配されて、一時的とは云へ空軍の發展は中止となつたと云ふより殆んど衰亡してしまつた。

(2) 新空軍の發生

以上述べた様に、世を擧げて大戰の苦杯を思い、國際關係が如何なるものかも知れ、又「ヴェルサイユ」條約の裏面に如何なる難關禍根が含まれて居るかも知れ、一方は漸くにして戰勝を得た英佛が、米國と共に世界平和の名に於て世界制覇を夢見て居ることも悟らず、列強悉く平和工作(?)に日も足らぬ有様となつて、數年を送つたが、大戰後年月の經過に伴ひ、日に月に列國の利害は一致せぬものがあり、殊にソ聯の大軍備擴張となり、當に國際情勢は大戰前に優る儉惡なものとなつて來て、茲に世界各國を軍備擴張に狂奔せしむるに至つたのである、そして其の結果と前述「ドゥーエ」學說の反響等に依つて、空軍勢力を重視し、且つ爾後の國際關係が空中勢力の優劣により支配せらるゝ傾向を知り、俄然各列強の空空強化、所謂新空軍思想が發生するに至つた、勿論單なる學說からでなく、其の間に於ける飛行機性能の技術的進歩によつて、十分に空軍を信賴し得るに至つたからであらう。

以下項を新にして現歐洲大戰迄に至る歐洲各國軍用航空の發達を述べ且つ之に關連した歐洲政治的動向の跡を検討し如何に兩者が不可分の間にあつて發達して來たかを述べて見やうと思ふ。

列強空軍の擴充

二、國際情勢に伴ふ列強空軍の擴充

獨逸

(一) 獨逸

歐洲大戰の結果一敗地に塗れた獨逸は、一九二〇年「ヴェルサイユ」條約に依つて軍事航空の保有を絶對的に禁止せられ、大戰間絶大な努力と巨萬の財力を以て培養育成した、三一〇中隊總機數約五、〇〇〇機に及ぶ大空軍は、全く壊滅し、一機すらも持たぬ悲運に遭遇した。

然るに、爾後獨逸は將來戰の必ず近かるべきを信じ、否な近く勝利に醉ふ英、佛に復讐を企圖し、且つ將來戰に於ては空軍の威力は絶對なるを洞察し、民間航空の名にかくれて秘かに之れが再建を決意し、民間航空に於ては、歐洲他列強を壓して、歐大陸に於ける航空路の主要部分を獲得すると共に、舊陸海軍人を以て、航空警察隊を組織し(條約による地上十萬の警察隊亦其の大部は軍人にして装甲車迄も整備して居つた)著々大空軍の建設

航空警察隊

に努力した。

其の結果、一九三二年末には概ね五〇〇乃至八〇〇機に及ぶ精銳機の整備を嚴秘裡に完了したと云ふ（英、佛の當時の推定は二〇中隊なり）

國際聯盟退

翌一九三三年十月、獨逸は國際聯盟で軍備平等權を主張して容れられないのを動機に、決然、同聯盟と軍縮會議を脱退し、空軍再建の準備を公然と進めるに至つた。

其後その急速な進展は、復讐を怖れて居る英と佛を戦慄させたことは大きいもので、現に翌年（一九三四年）英首相代理「ボールドウィ」は議會で次のやうに叫んで居る。

「空軍時代の今日英國の國境は「ドーバー」に非ずして「ライン」にあり」と

當時、英佛の推定に依ると、獨逸の實質的空軍兵力は一、五〇〇乃至二、〇〇〇機になつて居ると思つては居たやうであるが、各國は之を公然の祕密として認むるの己むなき状態であつた。

空軍再建空軍獨立

翌一九三五年三月十二日、獨逸は列強注視の中に敢然一方的「ヴェルサイユ」條約の破棄をなし、空軍の再建を宣言し同時に空軍を獨立せしめた。

そして同年四月一日から、軍航空の本格的再建に著手し、「ヒットラー」總統は「ゲールング」空相統率の下に舉國一致、空軍の擴充に邁進した。その企圖するところは「獨逸は

英佛兩國の優勢なる軍備に對し、強力無比の空軍を建設し、空を以て獨逸の生命線としやう」としたのである。

斯の如くして、一九三五年六月迄に整備した空軍兵力は三六中隊、第一線機四三〇、總軍用機一、四〇〇機となり、更に同年末には七〇―八〇中隊に擴張して第一線機は七五〇乃至九〇〇機を算した。

空軍再建宣言後一年に足らず聯盟退より僅に二年にして其の様な整備をやつたことは、如何に其の隠れたる準備と之に對する努力の大きかつたかが窺はれると思ふ。

「ロカルノ」條約廢棄

一九三六年三月、獨逸は果然「ロカルノ」條約の廢棄を聲明して歐洲の舊體制を脱し、次で同年七月西班牙の内亂が起ると、伊太利と密接に提携して革命軍（フランコ軍）の方を支援し、再興した精銳な軍備を背景にして、英佛兩國を睥睨し「スペイン」内亂に對する英國の不干渉政策を有名無實に了らしめたのである。

「フランコ」軍支援

一九三六年六月に於ける獨逸空軍兵力は一〇〇―一一〇中隊で第一線機のみで一一〇〇―一二〇〇機を持つて居た様である。

更に此の年十二月は吾人の記憶にも消えない日獨防共協定を締結し、之れに依つて一段と歐洲に於ける自國の國際的地位を強化さして居る。

日獨防共協定

日獨伊防共協定

翌一九三七年九月「ムツソリーニ」伊首相が訪獨してからは、從前の獨伊關係を更に緊密なものにしたし、其の十一月日獨伊三國間に防共協定が成立してからは、此の所謂「東京—柏林—羅馬樞軸」に依つて、對蘇、對英政策を確立し、前年伊國の行つた「エチオピア」合併に大なる支持を約束して居る。

右の期間、獨逸は外交、軍備に焦慮して居る英、佛を餘處に空軍の急速な整備を實行して居る。

再建空軍の大躍進

即ち一九三七年六月に於ける獨逸の空軍兵力は、一四一中隊、第一線機一、六九二機、第二線機八四六機合計二、五三八機になり、此の外學校其他に配屬せられた軍用機三〇〇—四〇〇機を加へると優に總計二、八〇〇機乃至三、〇〇〇機に躍進して居る。

壘國合併

一九三八年三月「オーストリア」に於て「ナチス」黨の蹶起するに及んで、獨逸は之に呼應し、速かに精銳なる其の陸空軍を「オーストリア」國境に進め、險惡複雑な歐洲の國際情勢下に、疾風迅雷之を合併した。(三月二日) 次で同年五月「ヒットラー」總統が羅馬を訪問し「ムツソリーニ」首相との間に獨逸合併後の獨伊兩國間の問題「チェッコ」及「スペイン」問題等に關し腹藏なき意見の交換を行ひ、其の意見が完全に一致を見たことは何人も知悉せるところであらう。

各國軍備擴張競争と惹起

このやうに獨、伊兩強國の提携が緊密になればなるほど、之を繞る英、佛、蘇三國は之を拱手傍觀することの出来ないのは當然のことで、大いに軍備擴張熱を煽り、米國亦之が渦中に投ずることとなり、列國相互に「軍備擴張競争」と白熱化するに至つた。

總統國防軍全部を直屬す

獨逸では此の間は(一九三八年二月)國防相「ブロンベルグ」元帥の辭職を廻ぐつて、一時國內的の危機に直面したこともあつたが、總統の敏腕はよく之を處理し、獨逸國防軍の統帥權を擧げて「ヒットラー」總統に直屬することとなり、又獨逸軍備の根幹をなす空軍兵力も、飛躍的増大を遂げた。雨降つて地固まるの例に漏れぬ轉禍爲福の結果を生じたのである。

空軍の大躍進

一九三八年六月に於ける空軍兵力は、二五〇中隊第一線機約三、〇〇〇機、第二線機一、〇〇〇機合計約四、〇〇〇機を算し、其他軍用機に使用可能のものを加算すれば尨大な數に及んで居る。

爾後、如何に此の空軍の威力(脅威)が國際情勢に寄與して居るかは、既に讀者も承知のことであらうが其の主なるものを拾つて見よう。

「ズデーテン」地方占領

一九三八年九月英獨間に「ズデーテン」問題再發により危機を招來した時に、獨逸のこの空軍の待機は倫敦市民を全く恐怖の淵に投じ、遂に英政府にその恫喝的態度を抛棄せし

「チエッコ」  
保護領

めて、十月十日に「ズデーテン」地方は完全に獨領となつた。  
次で歐洲政局の焦點となつたものは「チエッコ」問題であるが、一九三九年三月、豫め國境に集中中の獨軍は突始行動を起し、「チエッコ」に侵入、英、佛「ソ」聯等何等爲すところなき間に三月十五日之を保護國としてしまつた。

「メーメル」  
復歸  
「ダンチヒ」  
復歸  
開戰

次で三年二十二日「メーメル」地方を復歸し、八月には一時「ソ」と結び、八月三十一日波蘭に進入、九月には「ダンチヒ」を復歸せしめ、遂に九月三日英、佛の對獨宣戰となり、今次歐洲の本舞臺の幕を切つたことは新しく記憶にあるところである。

このやうに再興以來、日尙ほ淺い獨逸が連續的に對外強硬政策を遂行し得たのは、一つに其の軍備、就中空軍兵力が他の夫れを斷然凌駕して居つた無言の力があつた爲であらう。

一九三八年末の獨空軍兵力は第一線機約三、五〇〇機第二線機約一、五〇〇機であつて隣邦の合併及爾餘の政治的軍事的條件を考慮するときは、將來第一線機六、〇〇〇機になり第二線機及戰時軍用機として空軍編入の可能なものを加へると保有總量は驚異的數量である（附表參照）

伊太利

## (二) 伊太利

伊太利は一九一八年の休戰後より一九二二年秋に亘る間未曾有の社會的混亂の爲め反軍思潮瀾蔓し、頻發せる政變に禍されて國防に關する一定の方針も確立出来ない状態であつた。それに加へて財政窮乏の結果、空軍も逐次縮少せらるゝに至つたのであつて、一九二二年末の航空勢力は前にも述べたやうに僅かに舊式機八〇機を保有するに過ぎない状態になつて居つた。

再建着手

一九二二年十月「ムツソリーニ」に政權が移つてから、其の下に於ける「ファシスト」愛國運動に伴ひ、俄然空軍熱が勃起された。

「空中兵器ハ富者ノ兵器ニアラズ、熱烈勇敢ナル若キ國民ノ兵器ナリ「ファシスト」的兵器ナリ」

この思想の下、首相の明敏なる洞察力と、果敢なる実行力とに依り、斷乎として直ちに精銳な空軍の再建に著手された。

空軍獨立

斯様にして一九二五年五月、空軍が獨立せしめられ、同時に一九三〇年に至る五箇年擴張計畫が策定された。之等は前に述べた「ドゥーエ」將軍の思想が強く響いて居ることは

衆知の事實である。

空軍五箇年擴張計畫

空軍五箇年擴張計畫は、飛行一八三中隊二、七九七機、氣球八中隊、飛行船九中隊を完成しようとするのであつて、計畫通りには實行されて居ないが次のやうに逐次擴張されて居る。

- 一九二六年五月、 六〇一七〇中隊、 第一線機約七〇〇、
- 一九二七年六月、 九七中隊、 第一線機約九〇〇、
- 一九二八年六月、 一〇八中隊、 第一線機約一、〇〇〇、
- 一九三〇年十月、 一一三中隊、 第一線機約一、二〇〇、

建艦競争による空軍擴張の一頓挫

斯くして居る間に一九三四年になり佛國との間に地中海を中心とする建艦競争が起つたので伊太利空軍の擴充は財政的方面の掣肘を受けて一頓挫を來すの已むない事情に陥つた。

然し、元來伊空軍は從來其の擴充の重點を主として量的方面に置いたため、列強に比して質的に著しく遜色があつたから、此の間に器材の更新を圖り、又戦時に於ける豫備器材の整備を實施する方針を樹立した。

此の間の整備の状況は

- 一九三三年五月、 一一九中隊、 第一線機一、二〇〇餘
- 一九三四年一月、 一一九中隊、 第一線機一、二〇〇餘

器材更新六箇年計畫

と云ふ状況で部隊數も機數も増加して居ない、一九三四年七月に至り伊國空軍は器材更新六箇年計畫を策定し、之が實行に著手した。

急速なる擴張再開

然し、英、佛兩國が獨逸の國際聯盟及軍縮會議脱退、次で其の空軍再建（共に前述）に刺戟せられて、空軍の擴充を策するに及んで、伊太利も亦晏如たるを得なくなつたのは當然であつて、茲に空軍の急速な擴充を再開した。

一九三五年一月の整備状況を、一二二中隊第一線機一、二五〇機になつて居り、更に對「エチオピア」工作に伴ふ戦争準備として、同年八月迄には右の外一四中隊を増加して居る。

伊「エ」戦

一九三五年八月、伊「エ」紛争勃發、九月空軍の一部は伊領「エリトリア」に出征した英國は國際聯盟の盟主たる地位を利用して、伊「エ」紛争に干渉し、自ら其の優勢な艦隊を動員して又々恫喝的に之を阻止しやうとしたが「伊太利の斷乎たる決意と伊空軍の嚴然たる實力とは、遂に之を無力に了らしめ、一九三六年五月に伊國が「エチオピア」を併合するのを袖手傍觀するの不體裁な結果に至らしめた。又伊「エ」紛争其のものに於ては戦



場は廣大なる人文未開の山地であつたのと、對手軍隊の素質に鑑み、航空の開拓せる領域は甚だ廣く、地上作戰に對する協力と云はんよりも寧ろ之が打開誘導と云ひ得る大功績を擧げて居る。

## 西班牙内亂

一九三六年七月「スペイン」内亂に獨逸と緊密に提携して「フランコ」軍を支援して英、佛、「ソ」勢力との抗爭を續け英の不干渉政策を封じたことは前項獨逸のところでも述べた通りである。

防共協定、  
聯盟脫退

一九三七年一月、一五〇中隊、第一線機一、五〇〇機の整備が出来、十一月日獨伊防共協定となり、十二月國際聯盟脫退となり、現狀維持歐洲各國に一大痛撃を加ふるに至つた。又之が爲に、英、佛兩國が戦火の幻想に懊惱して軍擴を開始し、特に獨、伊兩國の空軍を目標として軍航空の大擴張に狂奔したことなど、凡て獨逸の項で既述した通りである。

空軍急速擴  
充

伊軍は此の間、更に急速なる空軍整備に努めた。一九三八年一月には約二〇〇中隊、第一線機約二〇〇機、第二線機一、〇〇〇機を保有し、地中海に於ける英國の昔日の覇權をして遂に權花一朝の夢と化せしめた。

一九三六年六月の計畫に據ると伊空軍兵力は一九四一年に三〇〇中隊第一線機三、〇〇〇機を整備するといふ豫定であつて、近き將來其の總數は五、〇〇〇機乃至六、〇〇〇機に

達する協勢に在つた。

因に「アルバニア」併合によつて多年の宿望を達成した伊太利はその精銳で優勢な空軍兵力を擁し、英、佛「ソ」「波」及「ルーマニア」の五國からなる對獨伊空軍同盟に對し、獨逸と共に毅然たる態度を堅持して來たことは今次歐洲大戰參加後の成果を見ても諒解出來ると思ふ。

## 英國

## (三) 英國

英國が、戦後空軍を縮少し、僅に五〇〇機を以て餘命を保ちしことは、本節の初めに述べた通りであるが、其後に於ける國際政局不安と多難を知り、一九三四年七月議會に於て「ポールドウイン」首相は前に述べた様に英國國境を「ライン」なりと述べ、又「英國の島國的歴史は既に終れり、飛行機の現出に依りて英國は最早や島國に非ず、吾人の欲すると否とに關らず離脱し能はざる程度に歐洲と連結しあるを記憶するを要す」と述べ、傳統久しき海主々義の英國々防に、大なる變化を生ずるに至つた。今左に其の經過を追つて見やう。

一九三一年に於ける英國の航空兵力は七二中隊（本國四九、海外二三）、第一線機約八〇

○機であつて、一九三三年に僅かに之を増加し八八中隊（本國六四、海外二四）第一線機八四五機を保有したに過ぎなかつた。

獨逸は刺戟されて空軍擴張の輿論

一九三三年十月、突如獨逸の國際聯盟脫退と軍縮會議の脫退とが英國官民を刺戟し、輿論は俄かに空軍擴張の急務を唱導するに至つた。

空軍擴張五年計畫

そして、一九三四年七月、政府は空軍擴張五年計畫を議會に提出して其の通過を見た。

其の内容は、自國空軍を數年内に隣接諸國中の最大空軍と同勢力にしようとするのであつて、一九三九年四月迄に四一中隊を増設しようとしたのである。

五箇年計畫の繰上

一九三四年十月頃に於ける情勢は、獨逸の再軍備が公然の秘密として確認せらるゝに至つたことは前に述べた通りであつて、これがため倫敦及工業都市港灣の空襲危険が感ぜらるゝに至つたので、益々英國輿論を刺戟し、政府は前の五箇年計畫を促進する案を議會に提出し、既定計畫四一中隊の中二五中隊を爾後二箇年を以て完成しようとするに至つた。

従つて此等の増設計畫によると、一九三八年迄に正規軍第一線兵力として約一、三三〇機（其他正規軍に屬せないもの一三〇機）を整備しようとするのであつた。

一九三五年三月、果然獨逸は再軍備を宣言し、更に四月空軍建設令を發布して、空軍の

獨逸再軍備宣言の影響

再建に着手したので、英國の上下は異常なる衝動を受け、獨逸空軍に對する恐怖の念は、更に空軍大擴張の氣運を促進した。

第二次空軍大擴張計畫

即ち同年五月、政府は第二次空軍大擴張計畫を發表し、議會の熱狂的支持の下に一九三七年迄に本國空軍第一線機一、五〇〇機の整備を實現しようとするに至つた。

伊「エ」紛争干渉失敗の影響

次で一九三五年八月、伊「エ」紛争に際し英國が國際聯盟擁護の名目の下に、其の盟主たる威力と、地中海に於ける傳統的海軍勢力とで、伊國の對「エチオピア」政策に威嚇的干渉を試みたが、精銳なる伊空軍の決死的覺悟の前に、脆くも失敗に終つたことは前に既述した通りである。

この英國の失敗は、嘗に國際聯盟々主たる威信を失望したのみでなく、彼の傳統的政策である地中海制覇工作の失敗であるから、英國の軍備擴張熱を煽つたことは當然のことである。

第一次空軍擴充計畫

一九三六年三月政府は改めて第一次空軍擴充計畫を提出し之が通過を見た。この計畫中空軍に關するものは、一九三七年三月迄に、本國及海外空軍を合し、總計一八中隊を増設しようとしたものであつて、從來の既定計畫に依る一九三七年三月末迄の整備數第一線機一、五〇〇機に更に二五〇機を増加し、一、七五〇機にするのであつた。

一九三六年七月「スペイン」内亂に於て、再び不干涉政策が失敗したことは前項に述べた通り、そのみならず、獨伊兩國提携強化の餘力は、更に「バルカン」半島諸小國の縦斷的團結を生ずることとなり、英國は頓に國防上の不安を痛感し、殊に彼の建國以來の傳統的外交政策である「歐洲政局の均衡維持」すらも破壊されんとする危急に頻して來たから再び軍備の大規模な擴張を促進した。

五箇年一五億磅國防計畫

即ち一九三七年二月未曾有の大計畫たる五。箇。年。一。五。億。磅。國。防。計。畫。案。を樹立した。

其の特異なる點は、從來英國が海、陸、空軍の順序に按配して來た國防豫算の割當を改めて空軍豫算を海軍豫算の次に大ならしめたことであつて、英國の空軍第一主義への接近の芽生えと見ることが出來やう。

獨、伊の強  
ず力に抗し得

斯の様に英國は傳統の海軍第一主義から逐次空軍第一主義に移らうとし、逐年空軍の整備擴充に邁進して來たが、結局何時も時機を失して及ばず、一九三八年に至つては現狀打破を目指す、獨、伊新興勢力の銳鋒は其の優勢な空軍力を背景として、愈々辛辣を極め、所謂「伯林—羅馬樞軸」で英、佛を威嚇しながら、隣邦諸國の併合、復歸を強行して來たが英國は遂に之を傍觀する外なかつた。

結局、老大國たる英國は新銳若國の攻勢の前に外交政策は絶えず動搖し、無力なる國際

武力を背景  
とする平和  
政策

聯盟を擁して右往左往唯纔かに軍備の強化に依る、所謂「武力を背景とせる平和政策」を樹立しながら、國を擧げて軍備擴張に狂奔し、遂に陸軍一六、〇〇〇萬磅（二十七億圓）、海軍一五、〇〇〇萬磅（二十五億圓）、空軍實に二二、〇〇〇萬磅（三十七億圓）の老大な國防豫算を計上するに至つた。

一九三九年の空軍兵力は約二、〇〇〇機の第一線機と略々同數の第二線機であつて、從來の豫定によると、一四〇年三月迄に本國空軍及海外空軍を合して第一線機合計三、三七〇行略々同數の第二線機を整備しやうとして居つたのであるが、歐洲大戰勃發後は自國の航空工業力を總動員して整備を強化する一方、米國にその補充を求め別表のやうな現有量を持ち獨英空中戰に活躍して居る。

#### (四) 佛 蘭 西

佛國は前にも述べた様に、戦後空軍確保の唯一の國であつたが、爾後各列強の目覺めたる眞剣な空軍運動に立遅れて、傳統的の誇を傷け、一九二七年商相の墜死するに及んで世論囂々として起り、翌一九二八年空軍が獨立するやうになつた。

然し此の時の佛空軍の特色は、所謂器材劃一主義に依る進歩を計つたもので軍事的統一

ではない。

一九三四年實質的大改革を行つて初めて軍事的空軍となつたのである。

以下各國同様最近迄の變遷を述べて見やう。

大戦後第一の空中勢力保持

大戦直後の佛國は尅大なる航空兵力を擁し、一九一九年の動員の時でも尙ほ陸軍航空一二七中隊第一線機一、三五〇機を保有して居た。

大擴張計畫策定と中止

一九二三年十月になつて、戰敗國獨逸の國力恢復を豫期して陸軍航空に於て、五箇年二〇八中隊、二、〇五〇機計畫、海軍航空に於て六箇年五〇中隊計畫を樹立し、合計二五八中隊の建設を目標とする大擴張を企圖した、然し實際には財政上の不振と、國內政局の不安とに禍せられて意の如く進捗せず、其の中隊數増加も一九二八年になつても陸海合計十數中隊に過ぎず、而かも遂に間もなく之を中止するに至つた。

即ち戰勝國と自負した彼が、彼の戰敗國と見て居た獨逸、而かも一機すら持たぬ獨逸に間もなく脅威を感ずるやうになる因を作つた。

器材更新三年計畫

一九三〇年以後は空軍用法上の變革に伴つて、舊式機の改良に迫られ、一九三四年六月器材更新三箇年計畫を策定し、屢々經濟的危機に直面しながらも、辛うじて之が實施に努めた。

然し遂に隣邦獨逸の急速な復興に追隨することが出來ず、其の國際聯盟脫退、兩軍備宣言に當りても何等之を反撥拒止するの力もなく、空しく之を黙視するの已むなき實情に在つた。

伊「エ」紛争以來の國際形勢に刺戟さる

一九三五年八月に於ける伊「エ」開戦に伴ふ地中海制覇を繞る英、伊間の紛争は地中海沿岸國である佛國を其の紛争圏外に在るを許さず、又西隣「スペイン」に於ける動亂、更に獨逸の「ライン」進駐等益々時局の切迫するに及んで、佛國も愈々陸、海、空三軍の急速な擴充の必要なことを痛感し、尅大なる臨時軍事費を計上して、軍備の強化、就中空軍の急速なる擴充を實施することになつた。

大擴充計畫

即ち一九三八年には二二八中隊、第一線機約二、〇〇〇機の整備を完成し、更に最近の大計畫によつて一九四〇年春迄に第一線機二、六五〇機と豫備機を合し計四、七〇〇機の整備を策定した。

人民戦線に禍さる生産能力激減

然し本計畫も亦人民戦線の結成以來、其の政策に禍せられて、空軍擴張の母體である航空機生産能力激減し、豫定の如く進捗せず遂にその實現を米國航空工業に依存するに至つた。

獨、澳「チエツコ」の合併成り、「スペイン」に反佛新國家成立し、伊太利亦「アルバニ

他力本願の末路

「ヤ」を併合し、四隣の形勢次第に不利を加ふるに至つて、佛國は僅かに英國と提携するにとにのみよつて、自己の活路を得んとし、兩國空軍の提携を圖り、國土の防衛に備へたけれ共、獨の一撃に遭つては、彼國人自ら「佛蘭西敗れたり」に告白せる通り、他力本願の弱點を遺憾なく暴露して衰れにも獨の軍門に降ることになつた、仰々誰の罪であらう。

(参考)

自一九三一年 國際事情と獨、伊、英、佛の空軍擴張競争  
至一九三九年

年次	主要事情	獨逸	伊太利	英吉利	佛蘭西
1931	(九月) 滿洲事變勃發		(二月) 一二二		
1932	(十月) 滿洲國生る	(英、佛推定) 二〇	(五月) 一一九		
1933	(一月) ヒットラー獨首相となる (三月) 日本國際聯盟退會 (十月) 獨逸國際聯盟及軍縮會議退會		(二月) 一一九		
34	(六月) 佛國、器材更新三年計畫策定 (同月) 伊太利、器材更新六年計畫策定 (同月) 英國、空軍擴張計畫策定	英、佛推定) 三〇	(六月) 一一三〇	(六月) 九四	(六月) 一七八

蘇聯邦

(五) 蘇聯邦

蘇聯邦は革命後の内亂も大體に片付いた一九二四年になつて、初めて空軍的の形を採つ

第五節 第一次歐洲大戰後の趨勢と列強の航空勢力擴充

1939	1938	1937	1936	1935	19
(八月) ヒットラー獨總統就任 (四月) 獨逸空軍再建宣言 (六月) 英第二次空軍大擴張計畫策定 (八月) 伊「エ」戦争起る	(四月) 羅カナル條約廢棄 (五月) ドン軍縮會議決裂 (八月) 伊「エ」併合起る (三月) スペイン内亂起る (二月) 日獨防共協定	(二月) 英五ヶ年十五億磅國防計畫策定 (七月) 支那事變起る (三月) 日、獨、伊防共協定	(四月) 獨、埃、併合 (九月) スデーテン問題 (四月) 伊、アルバニア併合 (六月) 獨、チエッコ併合 (六月) フランコ將軍、スペイン統一 (八月) 獨、伊軍事同盟、獨、伊軍事同盟、獨、伊軍事同盟、獨、伊軍事同盟 (九月) 第三次歐洲大戰起る	(八月) 獨逸空軍再建宣言 (四月) 英第二次空軍大擴張計畫策定 (八月) 伊「エ」戦争起る	(八月) ヒットラー獨總統就任
(六月) 五〇三 (九月) 六〇〇	(二月) 二二五 (六月) 二八二	(六月) 一四一 (三月) 二〇〇	(六月) 一〇〇 (五月) 一四五	(四月) 七〇一 (八月) 一三三	
(九月) 二二六 (九月) 二七三 (九月) 二九三	(二月) 二〇五	(二月) 二一五 (三月) 二〇〇	(六月) 一〇五	(六月) 一〇五	
(九月) 一六五	(六月) (推定) 一四〇	(六月) (推定) 一二三	(三月) 一一〇	(六月) 一八〇	
(九月) 二二九	(六月) 二二八	(六月) (推定) 二〇〇	(三月) 一八三 (十月) 一八八	(六月) 一八〇	

數量は凡て「中隊數」を示せり

た。然し、再建日も淺く、赤軍の基礎を強化すると云ふことに没頭して、他を顧るの餘祐がなかつたので、萬事を當時前にも述べた立ち遅れの佛國に範を採ると云ふ状態であつた。それで本質的には依然地上部隊協力主義になつて居て、所謂空軍的色彩は未だ濃厚でなかつた。

「ドゥーエ」  
思想の反影

然るに一九二七年に前に述べた伊國の「ドゥーエ」の思想を輸入してからは、此の思想が蘇聯の金科玉條である「レーニン」の戦争教書と一致するのを認め「スターリン」一派の中央派は航空第一。次五ヶ年計畫を樹立し、「ブハーリン」の右翼派は「トロツキー」の左翼派を壓して五ヶ年計畫を強行するに至つた。

航空第一次  
五ヶ年計畫

斯くして一九三一年に終つた第一次五ヶ年計畫は、遂に本質的の大空軍を建設したのである。此の内容は之を數量だけで見ても次の通りに逐年増加して居る。

急速なる擴  
張

一九二二年に約二〇中隊、一九二五年には約八〇中隊であつたものが擴充の一途を述べて二八年には約一〇〇中隊となつて居る。

飛行機數も第一次五年計畫前（一九二七年）には約一、二〇〇機であつたのが計畫終了時（一九三二年）には二、二〇〇機となり約一、〇〇〇機の増加である。

其後逐年各方面軍事の躍進的強化擴充と併ひて、空軍も強化せられ、一九三四年には

三、〇〇〇機、翌一九三五年には四、〇〇〇機更に一九三六年には約五、〇〇〇機三七年には五、五〇〇機三八年には六、五〇〇機と各年大體一、〇〇〇機の増加を示して居る。

「ラブチンスキー」（陸大教官）は開戦劈頭に於ける「ソ」國空軍に就いて次のやうに述べて居る。

「空軍は先づ開戦劈頭獨立分子として戦争の策源及敵の政治經濟の中樞を急襲し、敵國民を混亂動搖せしめて、敵意を喪失せしむるを要す、之れがため四軒平方の歐米の都市十箇に對し同時に之を攻撃し、各々其の面積の四分の一を破壊すること必要なり之が爲めには有效搭載二噸、一、〇〇〇機の遠距離爆撃機を同時に出動せしむる空軍を以て核心たらしむるを要す」

又其の教會の一節には

「ホスゲン」一〇〇噸を以て大都市全市民を中毒せしめ二〇〇噸にて完全に全滅せしむることを得」

之等によつて、蘇聯空軍が其の國策に順應して如何に敵國內―戰場外―に空軍威力を及ぼそうとして居るかが窺はれると思ふ。

既に數年前に獨立空軍は一、〇〇〇乃至一、五〇〇軒の行動半徑を有し有效搭載二噸のも

の間接空軍は五〇〇乃至六〇〇軒行動半經、有效搭載一噸のもの、直接協力機は行動半經三〇〇軒、搭載二〇〇乃至四〇〇噸のものを基準と定めたりと云はれて居る。

今次大戦前に於て保有して居た勢力は、獨逸に次ぐ世界第二位であつたが（附表参照）獨「ソ」戦開始以來甚大なる損耗を生じ、且つ生産力は逐次減退し到底之が補填を完全にする事は出来ないの、目下は獨逸に對し空軍的活躍の餘地を極度に狭められて居る、

### （六）米 國

米國は第一次歐洲大戦の平和克復後、銳意歐洲交戰諸國航空の精粹を吸収することに努めた、又華府會議以來比島布哇に於ける空中威力の増進に著目し、著々其の充實に努力して居た。彼の所謂「アメリカ第一」の思想により、飛行新記録の樹立長距離飛行の敢行又優秀飛行機の設計製作等に邁進し、航空機工業の發達と共に、其の進歩は驚くべきものがあり、大戦時漸く佛國の援助によつて、當時の水準に達した米航空が、一大飛躍をしたことは周知のことであらう。

第一次航空  
五年計畫  
航空調査  
委員會

一九二七年以テ實行した其の第一次航空擴張五ヶ年計畫は支障なく完成したが、更に將來に對する計畫策空のため元陸軍長官たる「ベーカー」を首班とする航空調査委員會を組

織して航空に關する諸問題を徹底的に研究政府に意見を具申せしめた。

此の委員會で一九三四年「空軍の不必要」を答申して居ることを見逃すことは出来な

獨立空軍否  
定

。「世界は空軍の獨立の大勢に在る。然し特種の地理的情勢に依り空軍を必要とせざるもの二あり、米國及日本なり」

と此の意味は、當時に於ける獨立空軍思想に對し米國は地理的事情（勿論國策を考へてのこと）から其の必要がないとしたもので、軍用航空の不必要を述べたのではない。

即ち海軍は渡洋攻勢作戰を主義として、改装充實し、海軍航空亦此の目的に副ふやう、編制も性能も考慮するし、陸軍航空も亦海軍の推進的威力となる編成をとり、一、〇〇〇機を以て純然たる戰略任務部隊とした。

斯くして前記委員會の答申により、逐次陸軍航空の内容を改めたが一九三六年になつて下院議員「マックスウェーン」の提唱によつて、一九四一年を目標とする戰略空軍の大擴張案が議會を通過した、（現有勢力約一、四〇〇機を五年計畫によつて四、〇〇〇機に擴張すると云ふ案は議會が承認せなかつたが今後三年計畫で二、三二〇機に擴張すると云ふ案が採用されたのである）

大擴張案

第二章 軍用としての航空機の發達

一九〇

斯やうにして今次大戦の直前（一九三九年夏）には陸軍機一、九二四機（一二八中隊）、海軍一、八〇〇機を有することになったが、更に數次に亘つて擴張案を擴大して居ることは最近周知の通りである。

大戦直前に於ける

列國空軍狀況一覽表

國名	大戦直前一九三九年半頃に於ける航空兵力	同期に於ける航空機生産能力
獨逸	第一線機 五〇〇〇乃至六、〇〇〇機 中隊數 五〇〇乃至六、〇〇〇機 兵員數 軍協同偵察約三〇、海軍協同約三〇、其他	一月産 一〇〇〇〇機
英國	第一線機 八〇〇〇機 中隊數 本國空軍一〇、五〇〇機、海外空軍三、〇〇〇機 兵員數 陸軍協同七、一般偵察一三、連絡二、海軍協同五、一般偵察四、輸送二、其他	一月産 四〇〇〇機
佛國	第一線機 二、三〇〇機 中隊數 一二三九機、戰闘四八、爆撃一〇八、陸軍協同五七、其他 兵員數 將校四、四三一人、下士官兵七、七〇〇人、計八二、一三一人	一月産 二五〇〇機
伊國	第一線機 二、二〇〇機 中隊數 二二二九機、爆撃八〇、驅逐四九、偵察一四、陸軍協同五、海軍協同二〇、海外三五 兵員數 將校二、四七二人、技術將校二七七人、下士官兵五九四一人、計六二、一五九人	一月産 三三〇〇機
蘇國	第一線機 六、六〇〇機 中隊數 七、一〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、九二四機、練習用機を含む	一月産 四五〇〇機
米國	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 六〇〇〇機
波蘭	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機
威爾斯	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機
諾威	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機
和蘭	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機
白耳義	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機
芬蘭	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機
希臘	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機
希臘	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機

附節5第 章2第

國名	大戦直前一九三九年半頃に於ける航空兵力	同期に於ける航空機生産能力
蘇國	第一線機 六、六〇〇機 中隊數 七、一〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、九二四機、練習用機を含む	一月産 四五〇〇機
米國	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 六〇〇〇機
波蘭	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機
威爾斯	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機
諾威	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機
和蘭	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機
白耳義	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機
芬蘭	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機
希臘	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機
希臘	第一線機 八、四〇〇機 中隊數 七、四〇〇機 兵員數 陸軍正規航空隊一、八〇〇機、練習用機を含む	一月産 七〇〇〇機

(一第)表

第五節 第一次歐洲大戦後の趨勢と列強の航空勢力擴充

一九一



支那(支那支隊)	第一線機 七〇〇機(内、戰、爆五〇〇)	第二線機 二〇〇機	計 九〇〇機	所有機數の六割は米國製、二割伊太利製、二割英、獨佛製
支那(前直發勃變事那支)	中隊數 三四			
那	操縱者數 七五〇人(但支那人のみ)			

最近列國空軍狀況一覽表

國名	航空兵力	航空生産能力(月産數)
獨逸	昭和十六年一月現在 第一線機常用八〇〇〇機 豫備四、〇〇〇機 計一、二〇〇〇機 (雜機、舊式機を合し 三、五〇〇〇機)	昭和十五年未現在 一、四〇〇〇乃至五〇〇〇機
英國	昭和十六年二月現在 第一線機四、〇〇〇機 機補給豫備二、〇〇〇機	昭和十六年五月現在 一、〇〇〇機
米國	陸軍(一六年六月現在) 約六、〇〇〇機(内約半數は練習用機其他) 中隊數二二四中隊 海軍(一六年五月現在) 三、五〇〇機(内約半數は練習用機其他) (但明年完成充實豫定) 兵員數、陸軍(一六年一月現在)飛行將校六、二〇〇人 飛行候補生約七、〇〇〇人 海軍(一六年二月現在)飛行將校三、七〇〇人、 飛行候補生約三、〇〇〇人	昭和十六年四月現在 一、四二七機
蘇俄	昭和十六年四月現在 第一線機 六、五〇〇機(内極東三、〇〇〇機) 豫備機 約三、〇〇〇機	昭和十六年四月現在 八〇〇機
伊國	昭和十六年初頭現在 第一線機約三、〇〇〇機 機補給豫備機一、〇〇〇機 計 四、〇〇〇機	昭和十六年一月現在 五〇〇機

第2章 第5節

(在現頭初年六一) 國 諸 方 南		支那(支那支隊)
泰國	第一線機 一三〇乃至一五〇機	昭和十六年三月現在 戰闘機約一〇〇機(内第一線實用機約六〇機) 偵察機約二〇機(同) 練習機約六〇機 輸送機約三〇機 計 約三一〇機(内第一線實用機約一三〇機)
佛國	第一線機 五〇機 第二線機 一〇〇機	
印度	第一線機 二〇〇機乃至二五〇機	
馬來	陸軍 二二五〇機 海軍 四二〇〇機	
印度	陸軍 第一線機 二二〇〇機 海軍 同 五〇〇機 補給豫備機及雜機 六五〇機	
島嶼	第一線機 二〇〇機	
新洲	第一線機 約一〇〇機	
關西	第一線機 約一〇〇機	

表間(二第)

第六節 日本軍用航空の發達

航空機發生の歴史、軍用としての航空の發達の經過さては、我軍用機の初參戰等に就いては既に前章と本章の前數節に記述したが、本節には改めて我帝國に於ける軍用航空の發

達の狀況を述べて見やう。

然し茲に斷つて置くことは、前節に於て述べた様に細かい隊數であるとか、機數であるとかは種々の關係上過去の事實も公開することを許されて居ないので、其の記述の程度も從來秘密の取扱をせられず公開公表された事項だけを纏めて見た従つて讀者には多少物足りない感じもあらうと思ふが十分に意のあるところを諒とされたい。

今一つは海軍の方であるが周知の通り機種にしても、任務にしても陸軍とは異なる點があり、發達、整備擴張の歴史も異つて居るが、海軍のことは海軍の人が書かれたものも出て居るし、著者が之を筆にすることは他人の領域を荒すとは云はずとも、多少畑違ひの感もあるので記述を省略した。然し海軍亦陸軍と同じく、殆んど同時に發走して多大の苦勞と努力の賜が漸く世界第一と云ひ得る、海軍航空勢力（必ずしも數を云ふのではない）を作り上げ、今次大東亞戰に於て世界が古來未だなき大戦果と驚嘆する功績を現はして居ることは周知のことであるから、其の努力の跡は陸軍航空の發達史を讀みつゝ想像していただきたい。

さて我國に於ても歐米と同じく明治四十年前後から研究が初められ、數年間にして頓に長足の進歩をし、略實用に適するやうになり爾來幾多の犠牲と國帑とを費し、大正三年に

青島出兵に我國嚆矢の航空機戰闘参加を見、次て大正十四年航空兵科の新設せらるゝに至り、日に月に擴張充實を計り國防第一線の重責を負ふ空軍の完璧を目指して飛躍して來たのである。

多少古臭く感ぜらるゝかも知れぬが現時の飛行機時代に至る迄、氣球飛行船等が活動した時代があるので、先づ之れから逐次主として年次を追つて記述することゝした。

### 軍事上、空への着眼

明治元年 會津藩士等徳川家のため大政奉還を拒んで、同士を糾合して同藩の若松城を本據として官軍に抗した時官軍の重圍に陥り、交戦三旬會津勢は官軍の情況視察と爆彈の投下を考へ出し、大風を作つて人を乗せ、之を飛揚さそうと試みた、然し九月に城が陥つたので之を實現ささずに終つた。人の考は同じことで、此の時から空を利用すると云ふ著眼があつたことは敬意を表すべきものであつて、技術的の智識が急速に進歩した今日の頭で「凧なんか」と笑つては申譯ないと思ふ。

### 二、氣球時代

明治十年 西南の役に於て、賊軍が田原坂の嶮を扼し、官軍の力を以てしても之を抜き得ず、戦線が膠着した時のことである。

氣球時代

(明治十年)

軍用氣球製  
作の嚆矢

氣球を用ひて賊軍の背後を偵察する要を認め、之が製作に著手した。之が本邦に於ける軍用氣球製作の嚆矢である。

最初工部大學、海軍兵學校陸軍士官學校にその試作を命じた、工部大學では岩田武夫博士が中心となつて、約二週間で直徑五尺と云ふ紙製の小型氣球を完成したが實用にならな

し。海軍大機關士麻生武平氏は命を奉じ、築地海軍兵學校構内で其の製作に著手し、同年三月二個の球狀氣球を製作し、明治天皇の臨御を仰いで試揚さしたところが其の浮揚試験中に強風のため一個は繫留索を斷ちて天空高く舞ひ去り、一個は瓦斯爆發氣囊が破裂するの不幸に終つた。

そこで更に政府は其の製作を陸軍士官學校に命じ、武田大佐と教官上原六四郎氏とが、六月二十一日起案、九月下旬一個の球狀氣球を完成した。中徑八、二米、全容積三〇〇立方

(明治二十四年)  
佛國より球狀氣球の購入

米、甲斐絹製球皮にゴムを塗つた二人乗である。然し該氣球の竣工前に賊軍敗退遂に之を實用に使用するに至らなかつた。

爾後氣球の研究を全く中絶の状態であつたが、明治二十四年陸軍省は佛國ヨーン會社から容積三五〇立方メートルの球狀氣球繫留車並に瓦斯發生機各一個を購入し、之を工兵會議に交

(明治二十七年)  
日清戰爭

付して氣球の研究を再興せしめた。明治二十七年日清間の風雲急を告ぐるに至つたので、曩に佛國から購入した球狀氣球を此の戦役に使用しようとしたが、該氣球は製作後歳月を経ること久しく、塗料のゴムが

(明治三十一年)

溶けて居て之を使用することが出來ず、茲に再び氣球の實戦使用を見ないで終つた。明治三十一年陸軍省工兵會議で凧式氣球を製作して、昇騰験を実施、又氣球塗料の研究を開始して、北海道上川及臺灣總督府の兩測候所に託して寒暑に對する曝露試験をし、

氣球塗料發見

殆んど完全なる一種の氣球塗料を發見して居る。

(明治三十二年)

明治三十二年氣球範式の決定に着手し、木製模型十數個を試製して、立川附近の多摩川で之の水壓試験を行ひ、其の實施の結果で内容積が一〇立方メートルの紙製氣球を試作し之を試揚して性能試験の緒に著いた。

(明治三十三年)

明治三十三年四月内容積三一立方メートルの紙製氣球を製作し、數回の昇騰試験を実施し、其の結果に基いて、九月新に内容積六九三立方メートルの日本凧式紙製氣球を製作し、十二月に此の昇騰試験に移つた。

(明治三十四年)

明治三十四年五月前記氣球の第二回昇騰試験を續行したが、午後二時四十分風が遽かに増加したので繫留絲目が切斷し氣球は惜くも流失した。

最初の昇空  
空中寫眞撮  
影

同年十二月陸軍砲工學校卒業式に際して、構内で三回に互り前と同型の氣球を昇騰し、三五〇米を昇つたし、又其の氣球から寫眞撮影を實施して居る。

(明治三十  
六年)  
絹製風式氣  
球

明治三十六年 内容積七五立方メートルの絹製風式氣球を作り、十一月特別大演習には初めて氣球隊を編成し信號勤務に服せしめて居る。

(明治三十  
七年)

明治三十七年 日露戦争が開始せられ、陸軍は氣球を實戦に利用することになり、從來の氣球を改修して之を新式氣球と命名し、軍用氣球の範式とした(五月に二個完成)

六月五日陸軍電信教導大隊に臨時氣球隊の編成を合せられた(隊長以下約一〇〇名)

氣球實戰參  
加

七月二十四日動員を完結し、同時に乃木大將の第三軍の戰闘序列に入れられ旅順の攻圍軍の戰闘に参加することになったかやうにして、同隊は八月十七日の第一回氣球偵察から十月三日に至る間に十四回の昇騰を行つて、信號、偵察、寫眞撮影等に任じ、軍の作戰に大なる貢獻をして居る、之が我國に於ける最初の氣球實戰參加である。

(明治三十  
八年)

明治三十八年 三月には獨逸から當時世界最優秀の風式氣球二個を購入し、十月陸軍電信教導大隊に氣球班を創設し氣球に關する新しい研究を開始した。

(明治四十  
年)  
陸軍氣球隊  
創設

明治四十年 十月編制改正に伴つて從來の氣球班を廢止し陸軍氣球隊を創設された。

爾後幾變遷を経て演習と實戦に多大の努力と功績を顯はして、今日の氣球隊になつたのであるが、氣球一式の時代は過ぎて茲に飛行機が出て來又航空船の現出もあり、之等が互に並行雁行して研究され、進歩して來たので次には之等を纏めて今日の所謂「航空機」たる綜括的名稱の下に時代を追つて、其の歴史を述べることにする前數節に記述した歐洲の發達と對照して貰ふたい。

前に記述した通り、日本で陸軍氣球隊が創設された、當時歐米では既に飛行機が相當進歩して居つたので、この歐米の景況に發奮した日本は、明治四十二年になつて氣球と飛行機とを合せ研究し、製作すべく、特別の機關を設けられたのである、之を陸軍の航空發達史の上から區分して見ると

明治四十二年から大正七年迄を研究創設時代、大正八年から大正十三年までを發達時代、爾後を整備……躍進時代

とすることが出来ると思ふ。

### 三、軍用航空機研究創設時代

明治四十二年 七月臨時軍用氣球研究會の官制が制定せられた。

(明治四十  
二年)  
臨時軍用氣  
球研究會

第六節 日本軍用航空の發達

此の研究會は陸海軍大臣の監督に屬し、氣球及飛行機に關する諸般の研究を行ふ所で、會長は本職ある陸軍將官、委員は本職ある陸海軍佐尉官、海軍機關佐尉官、海軍造船兵官、陸海軍技師、帝國大學教授及助教授、中央氣象臺技師、氣球及飛行機に關する學術に堪能なる者となつて居る。然し當初の研究費は年額僅かに八千二百五十圓であつて、これで必要な諸設備をやり、飛行機試験場の選定、氣象、氣流、發動機、プロペラ等の研究飛機の製作迄もやらうと云ふのであるから、如何に當時其の必要性を感じて居たか、窺はれると思ふ、又之が爲め當時會長委員の諸先輩が如何に苦心して、此の新生面の開拓に努力されたかを思ふと唯々感謝敬服の外はない、當時委員中の主なる方々の氏名を記して置く

會長陸軍中將長岡外史、委員帝大教授理學博士田中館愛橘、同陸軍歩兵大尉日野熊藏、同陸軍工兵大尉德川好敏、御用掛陸軍技師若本周平、海軍造兵中技師奈良原三次等

兎も角も十月研究方針を審議決定して、茲に愈々本邦航空研究機關の組織成り、劃期的研究の緒に就いたのである、先づ如何なることから着手したかを此の年にやつた點を列記して見よう。

### (1) 飛行場の建設

先づ第一に着手したことは飛行場を選定し、建設することがあつて、東京近郊に適當な

(飛行場の選定)

場所を探すこととなり、田中館博士が外國資料を審査し、次で徳永熊雄(陸軍工兵少佐)氏が關東及相模平地を踏査し、現在所澤の飛行場のある埼玉縣所澤町の北方松井村下新井附近に選定した。

實にこの地こそ我陸軍航空の發祥の地であつて、當時は二十三萬八千坪であつたが大正七年三十五萬五千坪に擴張、更に今日の尨大な飛行場になつた、一所澤と云へば飛行機飛行機と云へば所澤と云ふやうに人口に膾炙したのも當然であらう。

(氣象研究)

(2) 高層氣象研究の爲め横須賀鎮守府所屬汽艇を以つて數回風を飛揚し氣象研究の緒に就いて居る。

(發動機の研究)

(3) 發動機の研究は氣球隊で行つて居る、即ち陸軍運輸部から借用せる、二十五馬力「ケルチング」式、同アンザニー式輕油發動機、百二十馬力テール石油發動機等に就いて研究を開始した。

(諸設備の設計)

(4) 飛行機の安定、速度及び螺旋機の研究等氣流に關する實驗設備の設計には田中館博士、又螺旋機試験器械製作に關する設計には横田(成年)工學博士が之に従事して居る。

(飛行機の試製)

(5) 飛行機の試製には委員の日野大尉、同奈良原技師が考案せるものを試製することとして着手した。

(明治四十三年)

明治四十三年 二月研究會委員日野歩兵大尉の設計に係はる飛行機の製作を終へたので、三月之を戸山ヶ原で試験飛行をやつたが、其の結果は遺憾ながら機の安定と各部の機能が概ね良好であつたのにも拘はず遂に飛揚するに至らなかつた。

(日野式飛行機)

(本飛行機は幅八米、長さ三米、發動機八馬力の單葉機で、工費一九〇〇圓であつた)

同年四月には飛行機の購入及び操縦者養成目的で日野歩兵大尉と徳川工兵大尉を、五月には氣球、飛行機の狀況、飛行試験場、格納庫等の研究のため田中館博士と共に歐洲に出張せしめられた。

氣象觀測用 風と風洞

六月、氣球隊で高層氣象觀測用風を製作して氣象觀測を開始し、又氣流に關する實驗用として四五馬力「ダイヤモンド」發動機を据へ付けた風洞を製作した。

氣球の自由飛行

七月、氣球隊で拿捕氣球を使用して、栃木縣下、石橋附近で徳永工兵少佐、伊藤工兵中尉搭乘、我國最初の自由飛行を実施した(最高々度七〇米、飛行距離九〇〇米、飛行時間二十分)

(奈良原式飛行機)

十月研究會委員奈良原技師の設計した飛行機が完成したので、戸山學校で試験飛行を実施したが之も亦遂に飛揚せなかつた。

軟式飛行氣球の製作、

本邦に於ける飛行の嚆矢

(本飛行機は主材は全部竹、二〇馬力アンザニー發動機を附し全重量四五〇匁の複葉機で工費は一千八百四十三圓であつた)  
十一月破究會委員徳永工兵少佐、同小濱海軍機關大尉の設計による軟式飛行氣球の模型を作り、各部の研究と試験を遂げて本氣球を製作することゝなつた。

十二月囊に佛國にて日野、徳川兩大尉の購せし、四種の飛行機(ライト式複葉機、グラデー單葉機、アンリーファルマン式複葉機、ブレリオ式單葉機)の内ファルマン式とグラデー式が到着したので十四日から練習を開始し十九日愈々公開飛行を実施した。

午前九時徳川工兵大尉はアンリーファルマン式を操縦し高度四〇米、飛行時間四分にして三、〇〇〇米を飛行し、

同日午後日野歩兵大尉はグラデー式を操縦して高度二〇米、飛行時間一分二十秒で七百米を飛行した。

是れが本邦に於ける飛行の嚆矢である。

(明治四十四年)

明治四十四年 前年度購入せし各種飛行機の飛行試験を續行し、逐次其の操縦技能も向上して來て居る、四月、日野歩兵大尉はライト式を操縦して飛行時間五十三分、高度二三〇米、距離六二軒を、又徳川工兵大尉はブレリオ式に同乗者を搭乘さして、飛行時間一時間

飛行機上より空中寫眞  
往復野外飛行

九分三十秒、高度二五〇米距離八〇籽を飛行して居るが、之れが當時の最高記録である。六月にはアンリリアアルマン式飛行機上から初めて航空寫眞を撮影し、又同機で徳川工兵大尉は所澤―川越間距離四二籽の往復野外初飛行を実施した、その高度は四五〇米で飛行時間は三十五分を要して居る。

飛行氣球の飛行

一方八月下旬航空船の研究に資するため其の第一歩として軟式飛行氣球（内容積二、九三〇立方米）の製作を完了し、之を「イ號飛行氣球」と命名して、十月には所澤試験場で試験飛行を実施して居る、其の操縦者は伊藤工兵大尉と中島（知久平）機關中尉であつた。

國産飛行機  
出づ

當時本邦には飛行機の部分品修理工場もない貧弱な状態であつたが、徳川大尉は自ら七月に複葉機の設計を始め幾多の苦心の結果遂に同年十月徳川式飛行機を完成（會式第一號）して其の試験飛行を実施して居る。そして數回に亘つて改良し二十五日にはこの國産機で高度六〇米、七分間に八籽五〇〇を飛び秒速二十米に達して居る。

（明治四十五年）  
偵察、操縦  
開始

明治四十五年 五月、空中偵察將校、航空機操縦將校の養成要領が規定せられ、六月第一期偵察將校（修業期間三ヶ月）六名、七月第一期操縦將校（修業期間一ケ年）五名を分遣され氣球隊で教育を開始した。

八月には前年石本工兵大尉、益田工兵大尉等を歐洲に出張せしめられて購入した、獨逸

飛行機飛行  
氣球の演習  
参加

製バルセバール式飛行氣球（内容積八〇〇立方米）の試験飛行を行つて、良成績を収めて居るし、十一月の特別大演習には初めて統監部に飛行機と飛行氣球を配屬して、偵察任務に服せしめて居る。又一方研究会では佛國からアンザニー式發動機（六〇馬力）グノーム式發動機（七十馬力）モリスファルマン式飛行機（ルノー七〇馬力發動機附）ニユーポール式飛行機（グノーム一〇〇馬力發動機附）、ゴーマー會社製高層氣象觀測用一人用風並に飛行氣球用テレフンケン式無線電信機等を購入して之等の研究に着手し又昨年度製作した第一號二層型飛行機の良好なる結果に鑑みて、本年度更に同式の二號三號四號を製作した。

（大正二年）

大正二年 二月にはバルセバール式飛行氣球（飛行船）―前述の通り獨逸より購入のものが青山練兵場（現在の神宮外苑）に飛來し翌三月二十八日にはブレリオ機と研究會式第三號機が飛來して來たが、當時は未だ飛行機を見ない人も多かつたので、陸軍の各團隊長や貴衆兩議員等の見學に供した。今日から考へると恐らく想像もつかない大騒ぎであつた。

此の日本村鈴四郎（砲兵中尉）徳田金一（歩兵中尉）がブレリオ機で青山練兵場を出發し、所澤に向つて歸還の途中、所澤飛行場の東北約一、〇〇〇米の地點で、突然急激な突風のた

我航空最初の犠牲者

めに左翼を折損墜落、兩中尉は機と共に墜落殉職された。是れは我航空界最初の貴き犠牲者であつて、現在も其の地點に記念碑を建てられて、永久に其の功績を残して居る、著者も當時青山練兵場出發時笑顔で愛機に搭乗された兩氏を見たり、見送つて九段の兵營に歸つたら殉職の報が入つて來て驚いたのである。今尙ほ其の時の勇姿が眼前にあつて、斯く筆執りながら暫し瞑目其の瞑福を祈るものである。

次て四月には佛國製モリスファルマン式とニューポール式飛行機並に本邦製若鳥號の試験飛行を実施し共に良成績を収めて居る。

五月には氣球隊の編制が改正せられて、氣球中隊が設置された。

八月初めて佛國から購入したアストラ會社製スコット式爆彈投下機と擬製爆彈の投下試験を実施した。

斯くて十一月名古屋附近の大演習では、飛行機隊二個（各二機編成）を兩軍に分屬され偵察勤務に服して居る。

前記のモリス・ファルマン式飛行機は殊に當時に於て優秀な飛行機なることが實證せられ、其後陸軍の主要飛行機として多數に使用せられ、又逐次改修されて大正十年頃までは非常な貢獻をして居る。

（大正三年）

大正三年 三日には所澤—高崎間、所澤—水戸間、所澤—宇都宮間等の野外飛行に成功し七月には東京砲兵工廠で飛行機用ルノー式七〇馬力發動機二臺を試製した。（九月に試運転をして良成績を収めて居る）。

飛行機實戰參加の嚆矢

八月、日獨交戰状態に入つてから、臨時航空隊を編成せられ、青島に出征して、航空機による敵偵察爆彈攻撃射撃觀測等に任じたことと其の實際的數字は本章第二節の五に記述した通りで實に我國飛行機實戰參加の嚆矢である。

（大正四年）  
交通兵團

大正四年 一月交通兵旅團司令部を交通兵團司令部と改稱せられ、交通兵團長の下に飛行隊、氣球隊、飛行船等が一切統一された。

雄飛號

三月には獨國製バルセパール航空船の氣囊を本邦創始のものに改修することが出來て、四月之を雄飛號と命名（全長八五米、容積一萬立方米、昇高度二、五〇〇米、秒速一九米の軟式飛行船）され日本全土を雄飛した。

最初の夜間飛行

又此の間三月には日本最初の夜間飛行に成功して居る。

民間飛行練習生教育

六月には研究會で帝國飛行協會の依託を受け初めて民間飛行練習生二名に飛行機操縦術を教育し、九月に第一回卒業生を出した。

球狀氣球の

六月乃至七月には、球狀氣球による夜間自由飛行を実施し高度三、二五〇米に達し夜間



夜間自由飛行

自由飛行の新記録を得て居る。

照彈投下試験

七月東京砲兵工廠の製作に係る照明彈の第一回投下試験を実施した。

山岳飛行

八月モ式飛行機で所澤—高田間の山岳飛行を実施し高度三、〇〇〇米を以て山岳地帯を翔破し飛行高度の新記録を出した。

十月には青森縣下の特別大演習に参加し、其の機を利用し、モ式七〇馬力四機で所澤—青森—弘前間の往復野外飛行を実施して居る。

十二月の大禮觀兵式には青山練兵場で、信號氣球を昇騰し、飛行船の飛行とモ式三年型機十機を以て空中分列式を実施した。

航空大隊新設

此の月、編成改正で航空大隊〔本部と第一第二中隊（飛行機）及第三中隊（氣球中隊）を新設せられ従來の氣球隊を解かれた。

（大正五年）

大正五年。この年は俗謠にも唄はれた様に米人ナイルス。アトリスミス、女流飛行家カザリン・スチンソン嬢等が、次々來期して各地で高等飛行夜間飛行の妙技を演じて、我國民を大に刺戟した年である。

本邦製軍用制式飛行機

四月、臨時軍用氣球研究會の設計製作になる制式第一號機が竣成した。本邦製軍用製式飛行機の嚆矢である。

十二月、には飛行隊と氣球隊を切つ離して航空大隊を新設した。

（大正六年）  
水上著陸  
空地連絡

大正六年。二月、所澤—甲府間の山岳飛行を実施し、併せて諏訪湖上にて初めて水上著陸の實驗をやつたし、五月には、モ式八〇馬力及制式第一號飛行機に、砲兵の射撃觀測用として無線電信機を裝備して空地連絡を実施した。

炎暑濕潤の研究

七月、航空船雄飛號による所澤—仙臺間の往復野外飛行に當りては、田中館博士の考察に係る空中座標の決定に關する研究を実施して居る、七月下旬から八月上旬に互つては、モ式四型機で臺北、臺中臺南を起點として、中央山脈以西の蕃界を飛行し、炎暑及濕潤の飛行性能に及ぼす影響と之が取扱に關する研究を実施して居る。十二月航空大隊を航空第一大隊及同材料廠と改稱し、航空第二大隊を増設された。（各務原）

航空大隊の増設  
（大正七年）  
航空大隊増設

大正七年。我が陸軍の航空術は交戦五年に亘る歐洲に比し著しい遜色があつて、國防上眞に憂慮すべきであるとの論が盛んになり、茲に諸般の大改善を実施するの必要を認められ各方面に改正されたり増強された點が多い、一、二の例は四月には航空第三大隊を滋賀縣に新設、十二月には更に第四大隊を創設され又同月陸軍少將井上幾太郎（現大將）を長とし臨時航空術練習委員を任命し、佛國航空團員を招聘し、同團員の指導で航空術練習教育に關する準備に着手された。

臨時航空術練習委員

西伯林出兵

一方八月西伯利出兵となり、我が陸軍飛行機も參加、遠く、スバスカヤ、チタ迄飛行して、偵察に爆撃に多大の功績を擧げて居る。

以上のやうに航空日本が現在の如き急速の進歩の背後には如何に多數先輩の貴き犠牲、と見えざる苦心、研究が與かつて居るかを思ひ、將來現在の日本航空の飛躍的發達に志す人々は深く反省努力を要するものと思考する。

發達時代

## 四、發達時代

以上苦しき研究創設時代を突破した我國軍用航空界は、第一次歐洲大戰の結果驚異的發達を遂げて獨立時代に入つた歐洲諸列強の空軍状態に鑑み、更に一大躍進をする必要に迫られ、前節記述した大戰後唯だ一國休戦時の空軍勢力を保持して居る佛國空軍の指導を待つことになつて、大正七年末臨時航空術練習委員の規定を見るに至つた。

(大正八年)

佛國航空團  
員の指導

大正八年 二月以降、佛國航空團員(フォールス大佐以下)の指導を受くることになつて數班に別れて教育練習が實施された。即ち二月から航空機材料検査の教育、三月から操縦教育、四月中旬から戦闘飛行、偵察飛行、五月下旬から射撃と爆撃教育、偵察、觀測術の練習六月下旬から氣球操法氣球偵察觀測術等を、七月上旬から九月中旬迄は第二次佛國航空團員によりて氣象に關する教育と航空現地戰術等を實施された。

此の指導教育に依つて、我國航空界に一新紀元を作つたのであつて、我軍航空が外國の指導を受けて一本立ちになつたと云ふことは、一見洵に残念に思はるゝが、明治初年我陸海軍が英佛から範を採り、或は獨逸の指導を受けたと同様であつて、歐洲大戰に五年間の經驗を積み、而かも此の間に劃期的發展を遂げた歐洲列強から見れば、我軍は本大戰間僅に青島攻略と海上協力に終つて殆んど大戰の圏外にあつたと云つてもよいので、甚だしく立ち遅れて居たことは眞に己むを得ないことであるのであつて、此の期を境にして日本人古來の負けじ魂と、努力は、やがて來るべき次の時代の飛躍を齎らし、今日進んで諸外國に範を示し得るに至つたのである。「聞くは一時の耻、知らざるは一生の耻」と云はるる通り、我々は廣く知識を世界に求め、而かも之を日本化して、独自の發達を期することが何れの方面にも大切なことであらう。

以上のやうに、實質的に軍航空の資質向上を期すると共に、又一方諸制度其他も逐次劃期的の改善が行はれ來つた。

航空兵隊の  
分離  
陸軍航空學  
校新設

四月十日には交通兵團司令部條例が廢止され航空兵隊は交通兵隊から分離してしまつたし、又同日陸軍航空學校條例が制定せられて十五日には所澤に陸軍航空學校を新設せられた。

六月には臨時航空術練習委員偵察觀測班は千葉縣六方野に臨時教場、飛行場を設けて之に移轉し、又三重縣明野原に空中射撃演習場を設けることにされた。今日の下志津飛行學校、明野飛行學校等の芽生へである。

(大正九年)  
海洋横斷飛行

大正九年 三月、京城一所澤間の野外飛行を実施されたが本邦海洋横斷野外飛行の嚆矢である。

航空局

八月一日、航空局官制が制定せられた。

十月十三日、航空機操縦生採用規則を制定せられて、航空局で採用した操縦生の教育を陸軍航空學校に依託せらるゝことになった。(翌十年一月にこの依託生十名が航空學校に入校、爾後毎年五—一〇名の依託生を養成することになる)

(大正十年)

大正十年 四月一日、陸軍航空學校の下志津分校、明野分校が出来た。

四月八日航空法を、七月九日航空研究所官制、航空評議會官制が制定せられた。

十二月一日航空第五大隊、第六大隊等の編成に着手された。

(大正十一年)

大正十一年 六月、佛國航空技術者六名を傭い、之を陸軍航空學校に配屬して、軍用機々體(金屬製三座機)の設計製作に従事せしめられた。

八月九日、航空隊の名稱を改正されて、航空隊は飛行隊と航空大隊は飛行大隊と改稱された。

飛行隊の名  
出づ  
落下傘教育  
開始

れることとなる。

八月中旬から、陸軍航空學校でガーゼアンゼール型落下傘によつて初めて落下傘教育を実施するやうになった。

大正十二年 三月、航空局が官制改正で陸軍大臣の管理下から逓信大臣の管理下に移つた。

九月一日、關東地方に大震災火災が起つた、此の震災の被害が甚大であつたことや多數の死傷者を出したことは周知の通りであるが、罹災地内外の交通連絡杜絶の際、飛行機による偵察、連絡、情報蒐集等戒嚴治下にあつて重要な大任を完ふした飛行隊の活動を忘れてはならない。(九月二日から十月四日迄の飛行回数四九九回、飛行時間五三七時間十九分)及んで居る)

關東大震災  
の飛行隊活  
動

(大正十三年)

大正十三年 三月、陸軍飛行學校令を制定せられ從來の航空學校同分校を廢して、所澤、下志津、明野の三陸軍飛行學校となつた。

陸軍飛行學  
校生る

十月には東京—京城間の長距離無著陸飛行演習が實施された。

(大正十四年)  
陸軍航空本  
部

大正十四年 四月、陸軍航空本部令を制定され益々航空の擴充強化整備に邁進することになり、濱松、屏東に各一個の飛行聯隊が出来(飛行聯隊十個となる)たし、續いて五月

航空兵科の新設  
整備進時代の入る

には航空兵科を新設され愈々航空獨立が確立した。

斯様にして着々空軍の充實が出来列強と伍して独自の整備期に入つた。

そして昭和時代に入つてから内容外形共に幾多の改善新設事項が出て來たが、昭和六年九月の滿洲事變勃發と共に北滿、上海に大活躍をしたことは國民周知のことである。

爾來、國際情勢の緊迫と、國軍使用の見地から一大飛躍をすることになり、飛行團が出来たり、航空兵團が出来たり、航空總監部が出来たり、各地に飛行學校が増設せられたり世上に發表された事項も多いが、其の詳細については今日残念ながら記述することを許されない。

以上のやうに、昭和に入つてから飛躍したと云つても周知のごとく、今次支那事變の勃發した時には飛行聯隊は十個（別に滿洲に若干部隊を置いて居る）機數も先づ一、〇〇〇機程度であつて、昭和十年航空防空緊急充備計畫に依つて充實されたと云つても、隣邦諸列強の航空勢力に比し遜色があつた。然し航空部隊は支那全土に、又北滿國境に大活躍をしたことは周知の通りであり、其後も益々充實と訓練の精神を期し、努力した結果は、今次大東亞戰爭初期の如き大成果を得たのである。以下章を新にして現時に於ける我が航空の活躍時代を事實に就きて記述することとする。

## 第三章 最近の軍事航空

以上第二章で述べたやうに、軍用航空機は第一次歐洲大戰を契機として、大なる進展を見せ、次で大戰後各國共に「將來の國際的勝敗の鍵は空中勢力の優劣に在り」との觀念で空軍擴充の競争時代を現出したのである。

本章では斯くして擴充を重ねた列強の空軍の現況を記述しようと思ふが、その現實なる活動を記述する前に、軍事航空に課せられた任務即ち飛行機は軍用として、如何なることをして居るか、それがために如何なる種類の飛行機があるかと云ふことの概要を記述することとする。

### 第一節 軍事航空の重要性

（軍用機に課せられた任務）

曩にも述べたやうに、飛行機の優劣が戦争の勝敗を支配すると云はるゝ位であるから、現在の航空機は軍用として随分多方面の任務を負擔して居る、海と云はず、陸と云はず、平地と云はず、山地と云はず、晝と云はず、夜と云はず、いやしくも戦闘行動のあるところ、現在に於ては飛行機のないところ活動して居ない時はないのである、色々の分け方もあらうが大體次のやうなものである、海軍のものも任務別にすれば大同小異であるが、茲には陸軍のものについてだけを記述した。

地上作戦の  
直接協力

## (一) 陸軍の地上作戦に直接協力

○搜索 これは戦場や、戦場後方の敵情とか、色々の施設とかを偵察したり、戦闘に必要な地形を偵察したりするもので、搭乗者の目視によることもあり、又寫眞を撮影することもある。

○測量地圖の調製 戦場、又は戦場外でも、軍事上必要な地域の測量をしたり、寫眞を基礎にして地圖を作る―第一章に述べた。

○地上、海上軍隊の掩護誘導 未知の土地、地圖の不完全な土地で、作戦をして居る部隊を、空中から誘導したり、又敵の航空機とか、地上軍隊に對して味方を護衛するので

ある、特に陸軍の行つて居る上陸作戦には上陸地點迄の間の海上輸送間の護衛、上陸直後の誘導等は最も重要なことである。

支那事變、殊に奥地の作戦とか、今迄屢々行はれ、又今次の戦争で「マレー」附近で行つた上陸作戦に航空部隊の協力は恐らく現地以外の人には想像も出来ない程の大切な役割をして居る。

○指揮連絡、通信 未開の土地、不毛の土地の作戦は勿論、そうでなくても廣大なる地域で、しかも迅速な作戦をやつて居る此の頃では、左右前後の連絡がなか／＼とれないことがあり、時には他の通信機關が杜絶することもあり、又これがあつても、時間がかかることの多いので、かやうな時に空中を自由に、しかも迅速に飛翔して居る航空機で指揮官の命令通報を部隊に知らしたり、又指揮官に報告したり、御互に連絡することは、作戦を容易にし敏活にするものである。

○砲兵との協力 このことも、歐洲大戦間大いに發達したことを前に述べたが、地上の觀測だけでは十分でない、砲兵射撃に有利に協力するのである。

○地上戦闘に参加 よく此の頃の戦闘は立體的になつたと云はれるが、空中から地上の戦闘に参加することが多くなつた、即ち空陸一體の戦闘である、こゝに云ふ参加とは戦

場（第一線と其直後）の敵部隊を銃、爆撃したり敵の陣地、又は後方の砲兵とか指揮官の居る處を爆撃して地上の砲兵が届かなかつたり、届いても十分効果の上らないところを空から助けるのである。

○敵後方重要施設、物資等の破壊、撃滅 戦場でなくとも其の後方の直接戦場に關係のある場所へ侵入して行つて、重要な施設とか、集積してある物資を破壊したり、炎上させたりして敵の戦闘力を消耗したり、又戦闘繼續を斷念さすのである。

これ等は最近は段々激しくなり、又大規模になり、地上ばかりでなく、陸軍機で敵の軍艦、商船等を盛んに撃沈させて居ることは大東亞戦争の日々の戦果発表にもある通りである。

○物資の補給人員の輸送 廣大且つ僻遠の地で作戰をして居る地上軍隊、又は敵中深く侵入して後方の續かない軍隊、或は今次の支那奥地とか「マレー」とか、全く車馬を通じない處で作戰して居る軍隊に、必要な武器、彈藥、衣糧、衛生材料等を補給するので、空中から落下するのである又一方面から一方面へ迅速に軍隊を移動させたり、人員を補充したり、前線の人員を必要な時に後方に運ぶことも、又大切である。

この外直接地上作戰に協力する仕事は一つ一つ擧げては端でなしであるからやめる。

空軍独自の  
作戰

## (一) 空軍独自の作戰

これは所謂制空權を獲得するのと、防空である。

○制空權の獲得とは、敵の空中勢力を撃滅するか、又は完全に撃滅せない迄も敵の空中勢力が味方の頭上に及ばないやうにするのであつて、前に述べたやうに、色々の重要な任務を持つた空軍と、地上部隊と、空地一體になつて遂行する現時の陸戦で、一方に空中勢力がないか、又は甚だ僅少であつたなら、彼我の勝敗は殆んど戦はずに決したやうなものであることは、何人も想像が出来やうと思ふ、支那事變の最初の時期に敵の空中勢力に大打撃を與へ、其後殆んど之を潰滅状態に陥し入れた日本軍が、如何に有利に作戰が出来て居るか、又今次の大東亞戦争で、何のため陸海軍が開戦直後空軍の大出動をやつて、敵の空軍を奢つたか、又其後の困難な諸方面の作戰とか、後方の輸送が勿論困難ではあるが比較的樂に順調に進展して居るのは何のためかと、考へて見れば、茲で色々説明せなくとも、我が陸海の空中部隊が、敵を制することを第一着手とし、且つこれが實現したからのことであるとは判断がつくことと思ふ。

○防空とは今更云ふ迄もないことで、積極的に相手の空中勢力を全く潰滅してしまへば重

も角、少しでも残つて居るとか、後から後からと新しく現出することになれば、假令其の勢力は少くても、航空部隊の特質上我が頭上に潜つて来て、或は戦闘を不利に導いたり、大切な處を爆撃したりするのはあり得ることであるから、我方でも常に油断なく空中警戒をして、敵を近づけさせないやうに、又近づけば必ずこれを撃破するやうにせねばならぬし、萬一敵が相當勢力の空中部隊を持つて居て前に述べた制空權を味方の手に收めて居ないことがあつたら、少くも最少限重要な方面とか、地域だけでも防空を完全にして、敵の我儘な振舞を禁止せしめなければならぬのである。

現に支那大陸は勿論、太平洋方面に於て制空權を我手に收めて居り、敵は殆んど空中勢力の活動の出来ない状態になつた。我國の今日でも、軍官民協力一體防空の萬全を期して居ることも明かであらう。

### 戦略的又は政略的用法は

#### (三) 戦略的又は政略的用法

近時の戦争が戰場に於ける武力戦のみでなく、政治、經濟、思想等、凡ての部門の総合的戦争、所謂「國家總力戦」であることは、何人も周知の通りである。従つて愈々戦争となれば、單なる戦場の角逐ばかりでなく、國防軍は勿論、相手國々民の全面に亘つて、經

濟破壊、思想破壊、政治中樞の破壊をやる必要がある、これ等の爲には勿論新聞、雑誌、「ラヂオ」等を通じての言論戦も必要であるが、又直接行動として武力の一部航空機の活動を要すること大である。

即ち宣傳をやつたり、間諜を潜入せしめたり、後方擾亂をしたり、重要な陸海の交通遮断をしたり、生産機能、運輸機能を破壊したり、政治機關を破壊撲滅したりすることである。獨乙の倫敦爆撃とか、日本の重慶、新嘉坡、蘭貢等の爆撃とか、或は各方面に於ける宣傳ピラ撒きとか、獨乙の第五列敵國降下とか、又は獨、英、伊、日等各國が敵の陸上、海上輸送路を航空機によつて遮断したりするのは皆之れが爲である。

#### 第二節 陸軍機の種類と性能

陸軍機だけに就いて述べても、前節に述べたやうな、多種多様の任務を持つて居る飛行機は、何人が考へても中々一種や二種の飛行機で全ふすることの出来ないことは判断出来ると思ふ。

任務の多岐に亘るにつれて、幾多の飛行機が必要であるが、生産力の關係もあつて、各國共に、そうやたらに多機種を作ることは出来ないので、大體兼用の出来るものは兼用さ

して、數機種に制限してゐる。

用途上から區分して大體次の様なものがある。

一、偵察機

近距離偵察機

遠距離偵察機

二、爆撃機

輕爆撃機

重爆撃機

超重爆撃機

三、襲撃機

四、戦闘機

單座戦闘機

複座戦闘機

五、練習機

六、輸送機

七、病院機

これから右各種の飛行機が何をやるのか即ち前節に述べたどの任務に従事するか、と云ふこと、各々の性能の大體のことについて記述する。

偵察機

一、偵察機

偵察機とは、字の通り、偵察を主たる任務とするものであつて、飛行機が軍用として登場したのも仰々の初まりは、前にも述べた通り、この偵察任務に使ふためであつた。即ち歐洲大戰で地上は猫一匹も通れぬ様な戰場となつたので、從來偵察と云へば、騎兵と云つたのが馬も人も通れるものでなく、遂に開放されて居る空中だけから敵情を捜すと云ふことが許されるやうになり、飛行機が偵察に重視されるやうになつたのである。

現在では偵察機は其の任務が非常に廣範圍になつて、敵情、地形其他諸般の偵察に従事するばかりでなく、指揮連絡即ち軍隊運用上の傳令的任務をやつたり、砲兵戦の目標搜索や射弾の観測をしたり、又人馬、車輛、簡単な築造物などに對して爆撃もやり、直接地上戦闘に参加して歩兵の突撃を容易にしたり、友軍の危急を救つたり、輕量な物資の補給もやり、時には遠く敵の後方首都、大都市から飛行場、軍港の狀況や列車、自動車の行動迄も偵察する、友軍の道案内もする、全く七面八臂の活動をするものである。

近距離偵察機

(1) 近距離偵察機

戰場附近の近距離を偵察し、直接軍隊に協力する飛行機で直協機とも云ふ。

即ち敵軍の色々の状態敵兵力と其の配備、塹壕、堡壘、砲臺の設備等を偵察して直ぐにこれを友軍に知らして、之に應ずる適當な戦闘を出来る様に協力したり、敵第一線の模様



を捜索したり、砲兵の観測をしたり、指揮連絡に使はれる。

#### 遠距離偵察機

##### (2) 遠距離偵察機

遠距離を飛んで、敵軍の遠く後方や、敵國內の情況を探るのである、即ち開戦と同時に敵國深く飛行して、敵の動員状態、軍隊の集まる場所軍隊の移動の状態など広い範囲のことを捜索し、又其後に於ても絶えず、敵の輸送の様相とか、敵飛行場の様子を捜して、爆撃隊の行動の爲めに重大な任務を果すものである。

以上のやうであるから、この飛行機は強大な航続力と速力を持ち、又敵地深く入るのだから戦闘力も備えて居る、現在各國で使つて居るものは一、〇〇〇軒以上の行動半径を持つて居るものがある。

##### (3) 偵察機の装備

任務の關係から、操縦者の外に、専門の偵察者や通信員を乗せることも必要であり、偵察に必要な器材や、武器彈藥、を積み、特に通信は迅速にせねばならぬので、無線電信、電話機とか、信號拳銃、信號彈、通信筒、手旗等を有し、更に寫眞撮影のため優良な寫眞機を持つて居る。

又地上から通信する手紙の様なもの、低空に降りて行つて、釣り上げることも出来る

やうに、準備してある。

武装の概要、性能の概要は表がつけてあるからこれで判断してもらふこととする。又偵察のやりかた、寫眞の撮し方なども面白いことであるがこれは割愛する。

#### 爆撃機

##### 二、爆撃機

これは空中の戦艦とも云ふべきものである。字の通り爆撃をやるのが主任務であつて、戦争戦闘の目的を達成するために必要な目標、それは人馬であらうと、物體であらうとを問はない、陣地とか、砲壘とか、或は都市であるとか、艦船であるとか、目標の種類は色々あらうが、これらに對し爆撃を落して、徹底的に粉碎するし、或は焼夷彈を落して焼き盡さうと云ふのである。

近年、各地で盛んに實施して居る防空演習は、主として、この爆撃機の投下彈に對する對應策を訓練して居るのである。毎日の新聞ニュースを賑はして居る敵飛行場、都市、建築物の爆破とか、飛行機の地上炎上、爆破とか、時には陸軍機で商船或は軍艦迄も爆沈して居るのは、多くこの爆撃機である。

爆撃機も、其の目標の大小によつて投下する爆撃に大小があるし、行動する範囲も戦場の近くだけを航行して前に述べた地上戦闘の直接協力をやるのもあれば、遠く、深く敵地

に深入して戦略上又は政略上の重要な任務を果さなければならぬものもあるので、軽爆撃機、重爆撃機、超重爆撃機に区分して整備されて居るのが普通である。

軽爆撃機

(1) 軽爆撃機

これは通常四、五百瓦迄の爆弾を搭載してゆく飛行機で、航空距離も短い、割合に輕快であるから、その特性を利用して地上の作戦に協力する時に有利に使用される。

例へて見れば、我砲彈の十分届かない戦場の或る目標とか、敵の後方に集まつて居る敵の豫備の軍隊とか、地上から見えない山陰にある陣地とか、増援に急進し又は退却して居る軍隊とかを爆撃したり、地上軍隊の突撃の時機に敵の第一線を襲つて直接之に協力するし、又偵察に使はれることも多い。

装備としては爆弾装置は當然であるが、機關銃、寫真機、無線通信機等を装備して居る。

爆弾は従來は胴體の外、翼の下面等に装着して居つたが、此の頃の飛行機は速度を出す爲めに、各國とも胴體内の爆彈倉に入れて居るから、一寸、外から見えない、敵の頭上に行つて、この彈倉の扉を開いて電氣装置で持つて居る爆彈全部を同時に落せるし、數彈同時に落せるし、又一發毎に希望の時間々隔、(一秒とか〇、五秒とか)で自動的に落せる。

る様に出来る爆彈の投下装置が出来て居る。

重爆撃機

(2) 重爆撃機

これは多量の爆彈や、大型の爆彈を積んで、敵地深く進入して、飛行場を襲つたり、敵の軍事上、經濟上、政治上の中樞要地を爆撃破砕したり、重要な交通設備即ち大切な港灣停車場、橋梁、鐵道等を爆撃して、敵の作戦に重大な影響を與へるものである。

爆彈は普通一噸から二噸を搭載し、十數時間飛行が出来る、乗組員も前の軽爆撃機は二人であつたのが、五六名乗つて居る。

装備軽爆撃機と同様なものが必要であるが、航続時間も長いので、自動操縦装置と云ふ操縦者が手足を放しても相當長い時間飛行出来る装置があつたり、自衛の爲めの銃器等も澤山持ち、中には機關砲迄持つたのがある。

又高空を飛んで行くために酸素吸入器も装備されて居る。

超重爆撃機

(3) 超重爆撃機

搭載彈量と航続時間を著しく大にしたものを各國で作つてゐる。開戦劈頭に敵國の首都や、作戦の中樞を急襲しやうと云ふのである。

どんな大きいものがあるかと云ふと佛國の「ポター」四一型は六五〇馬力の發動機四、

最大時速三二〇杼、爆彈搭載量六、五〇〇瓦、航續力一、五〇〇杼

米國の「ボーイング」B一七型は發動機四、最大時速三七〇杼、爆彈搭載四、五〇〇瓦航續力五、〇〇〇杼から八、〇〇〇杼と云ふ大型のものも出來て居る。

## 爆撃の方法

## (4) 爆撃の方法

簡単に爆撃のことを述べて置かう、爆彈其他投下彈にはどんな種類があるか、又其の効力はどんなものかと云ふことは、此頃色々の書物に出て居るし、防空訓練の基礎智識として老人も子供も周知のことであるから、こゝには省略して爆撃の方法だけを述べる。

爆撃の方法は水平爆撃と降下爆撃に大別出来る。

## 水平爆撃

水平爆撃とは水平に飛行しながら、爆彈を投下するのであつて、これには色々面倒な計算などをせねばならぬが、その細かいことは省略するとして、先づ自分の飛行機が土地に對して幾何の速さで飛んで居るかを計算で出す。即ち對地速度を出す。そして飛行機の高。度とか、當時の温度とか、爆彈の種類とか、色々條件を加味し、それに風の方。向。速度等を測定して、眞直ぐに目標の方に飛行しながら、目標が某角度(投下角と云ふ)で、丁度覗いた時に、引金を引けば爆彈が機から離れて、飛行機の数と、引力によつて一つの曲

線を畫いて、目標に向つて飛んで行くのである。それで正確に目標に彈丸を當てやうとすれば、○高度を正しく一定に保つて飛ぶこと、固有の速度を一定した速度にすること、○對地速度を正確に測ること、○目標に向つて正しく飛行すること等が必要で、これ等を前に述べた、風とか温度を加減して正しく學問的にやらねば決して目標に命中せない、如何に爆撃が困難かと判ると思ふ。

## 急降下爆撃

急降下爆撃と云ふのは、これも色々諸元によつて、目標の前方の某地點を狙つて急降下しながら、適當なところで爆彈を投下するのであつて、この目標と狙つて降下する地點との開きは、高度、降下角度、飛行機の数と風等で異なるから、これも中々困難で、相當訓練を必要とする、我々が映畫を見たり、ニュースを聞いて、簡単に命中する様に考へたら大變な誤解で、小銃や、大砲で目標を覗つて命中さす以上に、大變な苦勞があり、むづかしいことであると云ふことを知つて頂きたい。我陸海軍の航空部隊が常に大なる成果を擧げ、必中彈を出して居るのは、訓練の賜であることを忘れてはならない。

茲に今一つ述べることは、編隊爆撃と云ふことである、一機で彈を落しても目標に命中せぬことがあるので、三機とか、五機とかが、編隊を作つて飛行し、彈を投下することがこれである。

即ち數發、數十發の彈を、目標附近に雨の様に投下して、これで命中彈を得ようとするのである。この投下した爆彈を爆撃火網と云ふ、即ち爆彈の網を目標に被せて、命中彈を得るか、綜合の効力を得やうと云ふのである。

我々が、將來敵の爆撃を受けるとして考へて見ると、恐らく特別な場合の外は敵は編隊でやつて来て、この爆撃火網を希望する地域に被せやうとするだらうと思ふ。

### 襲撃機

襲撃機とは、攻撃機とも云ふ。大凡輕爆撃機の種類と思つてよいと思ふ。

唯、高空からでは効果が少ないので、地上數十米の低空に下りて敵軍の頭上から機關銃の掃射をやつたり、爆彈投下をやるのである。

即ち、敵軍の地上攻撃であつて、道路上を行進する部隊、集合部隊、騎兵部隊、戦車群砲兵陣地等あらゆる敵を指して、襲撃して之を蹂みにじつてしまふのである。

この襲撃機を整備し發達して居るのは、米と「ソ」聯とである。米國は航空の五分一も之を備へ、「ノースアメリカン」NA一六型(機關銃五、時速四〇三杆)等の優秀機を持つて居る。

### 戦闘機

#### 四、戦闘機

空中戦闘で進んで敵を攻撃し敵機を撃墜する所謂空中戦の花形である。

戦闘機は前節述べたやうに偵察機に次いで生れた軍用機である。

今日の戦闘機には

單座戦闘機(搭乗者一名)

複座戦闘機(搭乗者二名)

多座戦闘機(搭乗者三名以上)

の三種あるが、現今最も多く普通に使用されるのは單座戦闘機である。

この單座戦闘機は、一名乗であるから、非常に輕快で、快速力を出し、敵機に追ひ迫つて、機首にある固定機關銃で、猛射を浴せて、彈丸がなくなれば體當りをやつて、敵機を撃墜しやうと云ふ、頗る攻撃精神の旺盛な飛行機で、我國の武人には最もふさわしいものである、後で述べるが「ノモンハン」のあの空中戦の大勝は全くこの卓絶した攻撃精神の賜ものである。

複座、多座戦闘機は、元來單獨で攻撃をやること云ふよりは航續力を大にして、敵地に進入する偵察機や、爆撃機の掩護用として發達したものである。

#### 五、練習機

### 練習機

#### 第二節 陸軍機の種類と性能

練習機とは字の通り、實用機でなく操縦、爆撃の照準法、偵察、射撃の観測等を練習する飛行機で、多少實用機よりは鈍重であるが、安定、安全性が大であり、多くは複葉を使つて居る。

又初歩の練習には教官が同乗して操縦を教へるやうに操縦装置が二重になつて居る。

そして初歩練習用、中間練習用、作業練習用の三種の飛行機があつて、之等を使つて初歩の者が一人前になつて實用機に移るのである。

#### 輸送機

#### 六、輸送機

武装した兵とか、時には所謂第五列を敵地深く輸送して、敵の後方に落下させ敵の後方要點とか、敵陣地の背後を占領し、又は敵の交通を遮断したり、敵を腹背から攻撃するのである。

この方法は最近になつて、大變盛んになつたのであつて、從來落下傘部隊の研究國である「ソ」聯邦が波蘭攻撃の際使用したのが大規模にやつた初めであらう。今次の歐洲大戰で獨乙は盛んにこの空中輸送による落下傘部隊を活動させて居る。僅か五日で和蘭を制壓したのもこれである。この落下傘部隊と云ふは、とりもなほさず飛行機と地上部隊との混合部隊である。

このやうに急速に兵員なり、物資なり、兵器なりを輸送するのが輸送機の役目である。従つて多數の人員なり、重い物資を運ぶやうに大型の飛行機を使ふのである。大砲や、戦車等も今度の歐洲戰では輸送機で運んだ例があるやうで、獨乙では戦車も運べると云ふ。廣大な土地とか、遠方に殖民地を持つて居る、英、米「ソ」伊等では盛んに専門の輸送機を整備して居る。

各國の輸送機の性能を一寸記して見ると、「ソ」聯の「アンドニ」O型は數十人を乗せ七千斤を飛ぶし。

英國の「ハンドレベーチ」四三號は三十人乗りである。

民間の平時商用航空に使つて居る大型の輸送機も、戰時には軍の輸送機として利用することが出来る。

#### 病院機

#### 七、病院機

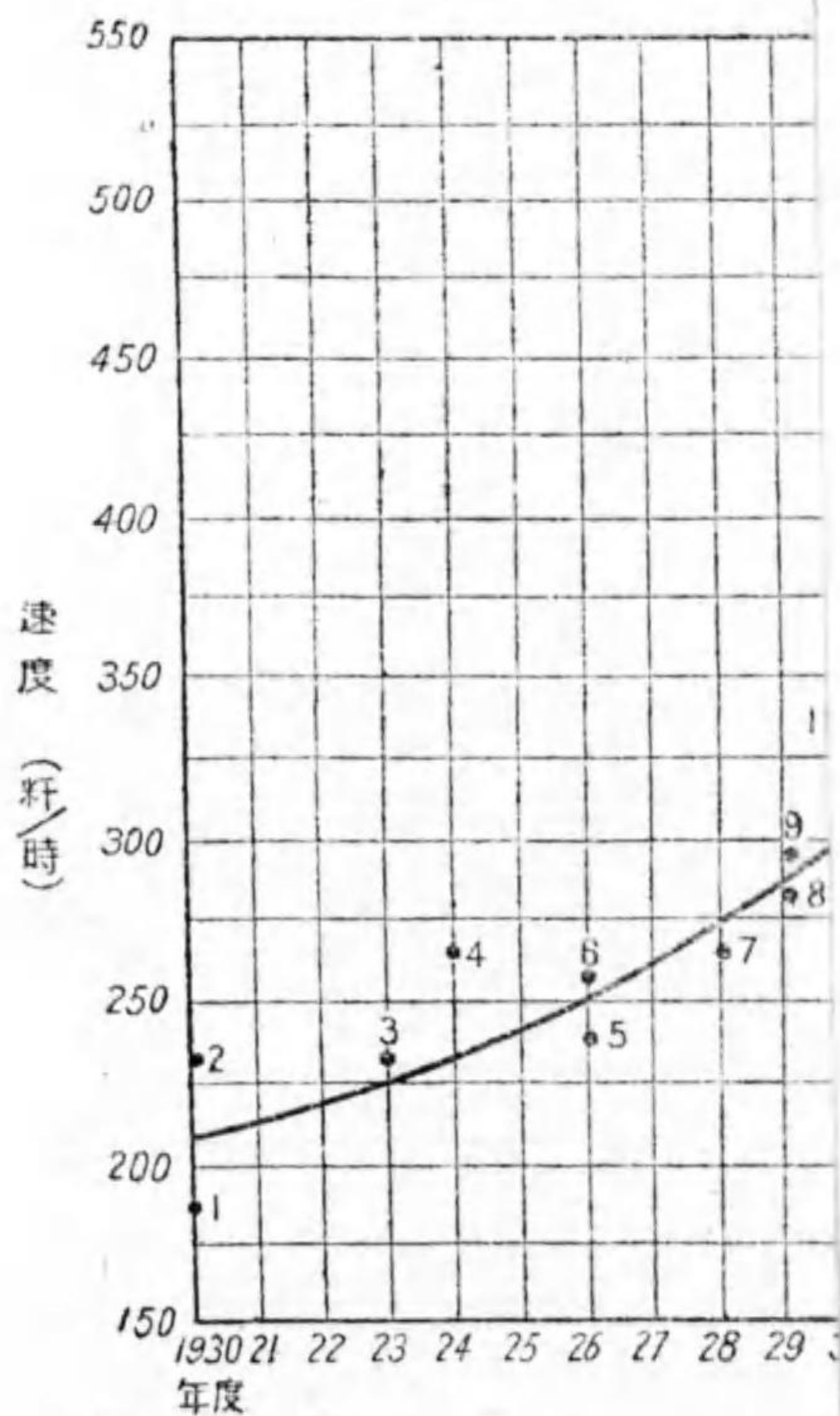
第一線の假病院で、手當の出來かねる重傷者などを、一刻も早く後方に送つて、適當な手當を行ふに使ふものであつて、即ち患者輸送機である。地上を運んだのでは時間もかゝるし、不良な道路を病院車でゆられては助かる重患者も激動で命を落すことがあるが、これには速くて、震動のない飛行機が最も適當な輸送機關と云へよう。

( 値 要 )

全	真	全
(公)	(本)	(本)
0.15	11.20	9.
12.9	12.19	9.
12.12	9.85 (L)	8.
20.0	12.05	9.
10.21	14.00	10.
10.55	9.9	8.
11.9	9.5	9.
12.0	8.28	9.
12.12	16.70	10.
25.0	-	-
10.12	11.20	8.
10.3	9.1	7.
23.6	15.85	11.
19.8	10.87	7.
-	11.8	8.
10.12	10.54	9.
12.10	10.3	8.
23.9	10.7	8.
21.1	9.50	8.
24.9	9.45	-
9.45	10.53	8.
9.65	10.74	7.
18.0	9.7	-
17.9	11.20	7.
21.5	11.0	7.
9.3	10.2	6.
12.5	9.0	6.
13.0	9.0	6.
-	10.9	7.
9.7	13.8	8.

第二節 陸軍機の種類と性能

各國軍用機速度



- |                      |                  |
|----------------------|------------------|
| 1. Sopwith           | 11. Pury         |
| 2. Thomas Morse MB-3 | 12. Dewoitine D  |
| 3. Nieuport 28       | 13. Curtiss XP-2 |
| 4. Boeing PW-9       | 14. Jocky        |
| 5. Caurdon 32        | 15. Boeing P-26  |
| 6. Curtiss P-1       | 16. Hanriot 110  |
| 7. Nieuport 42       | 17. Dewoitine D  |
| 8. Bulldog           | 18. " D          |
| 9. Curtiss P-6       | 19. Fiat CR-32   |
| 10. Wibault 210      | 20. Dewoitine D  |

各國の重要なもの約50機種の内平均に近き

各國軍用機の性能

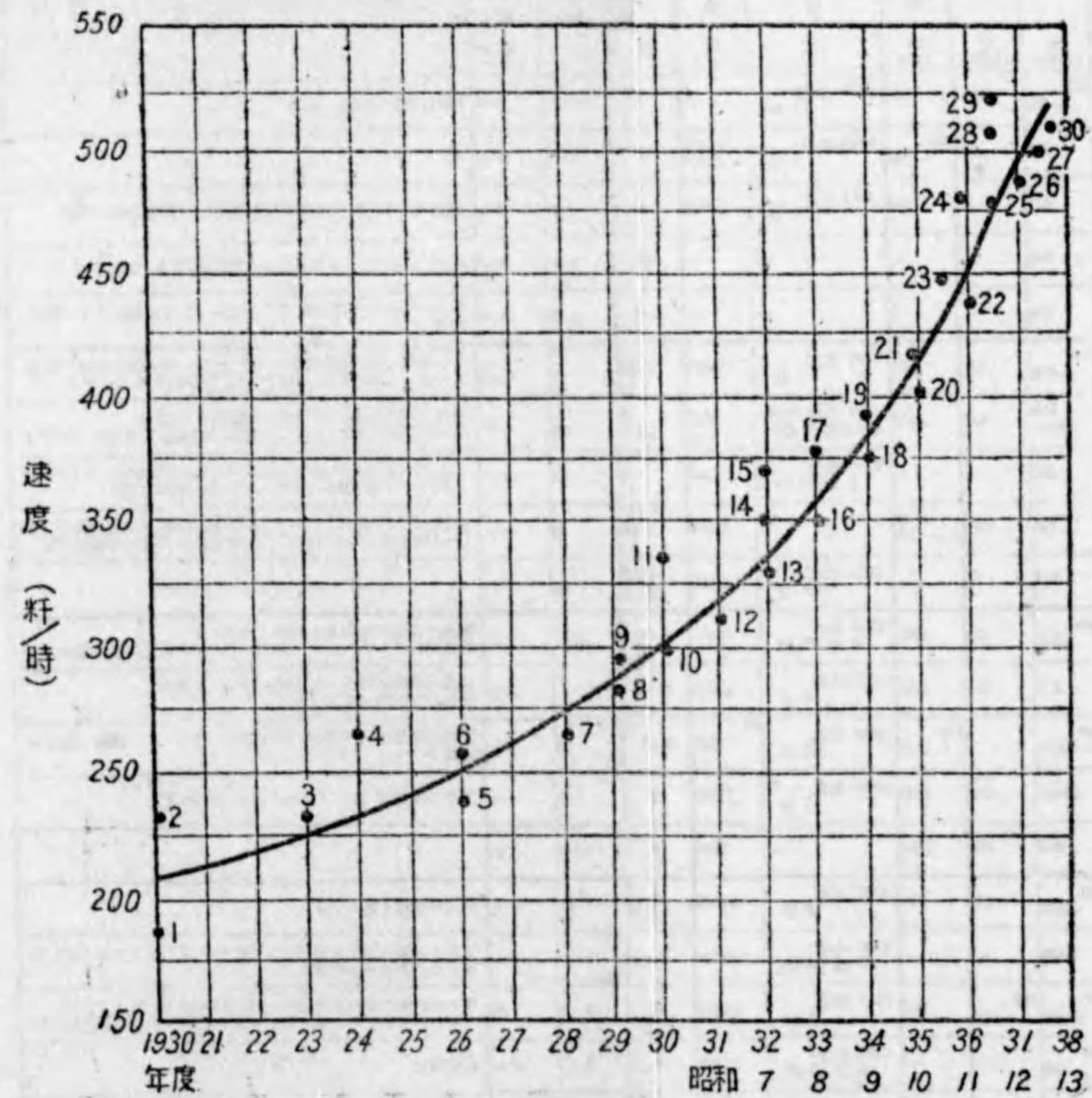
八、各國軍用機の性能

この飛行機は普通の旅客機のやうに造られて寝臺とか、病院にあるやうな色々な設備をしてあつて、看護の兵が付き添つて手當をしながら患者を温存輸送し得る。

軍用機の實際の性能は各國共に御互に秘密にして居つて、正確なことは判明せないものであるし、又日進月歩同じ機でも改造、改修されて性能を向上して居るやうであるが、現在各國の使つて居る軍用機の諸元を附表として添付して置く。

何時も断るやうに我國軍用機については一切之を省略した。他に大凡の程度を公表されてあるのもあるが、眞實なところは勿論秘密であるから、茲には大凡のことを掲げるよりも、寧ろ一切之を抜きにした。讀者は我國軍用機の諸元は決して掲げてある他列強のものに劣つて居ないと云ふことだけを考へて頂きたい。

各國軍用機速度增加趨勢表



- |                      |                     |                         |
|----------------------|---------------------|-------------------------|
| 1. Sopwith           | 11. Pury            | 21. Gladistor           |
| 2. Thomas Morse MB-3 | 12. Dewoitine D-37  | 22. Fokker D-21         |
| 3. Nieuport 28       | 13. Curtiss XP-22   | 23. Dewoitine 513       |
| 4. Boeing PW-9       | 14. Jocky           | 24. Nieuport 160        |
| 5. Caudron 32        | 15. Boeing P-26     | 25. Morane Saulnier 405 |
| 6. Curtiss P-1       | 16. Hanriot 110     | 26. N-17                |
| 7. Nieuport 42       | 17. Dewoitine D-500 | 27. Caudron 710         |
| 8. Bulldog           | 18. " D-510         | 28. Severky P-28        |
| 9. Curtiss P-6       | 19. Fiat CR-32      | 29. Koolhoven FK-55     |
| 10. Wibault 210      | 20. Dewoitine D-372 | 30. Renard R-36         |

各國の重要なるもの約50機種の内平均に近きもの約30機を選出して示せり。







列國主要(偵察哨戒(急降機ヲ合ス))機要目表

國	機名	用途	機種	主務	乗員	全長	全高	全幅	自重	全重	最高速度	巡航速度	航続距離	上昇速度	上昇高度	武装	備考				
																		機名	乗員	全長	全高
英	ヘラクレス Ha 130	偵察機	高翼、固定脚	陸軍	3	14.5	10.5	3.7	31.5	2100	1000	3300	100	385	314	600	3000 米迄 8分	7900	3	ナレ	100
	ヘラクレス Ha 200	偵察機	高翼、固定脚	陸軍	3	14.5	11.0	4.3	38.5	2240	1200	3400	90	300	250	1500	1650 米迄 8分	6040	3	ナレ	140
	ヘラクレス Ha 200	偵察機	高翼、固定脚	陸軍	3	17.16	12.12	3.0	43.57	3071	1789	3400	120	480	400	1800	3000 米迄 7分	8310	3	ナレ	450
	ヘラクレス Ha 200	偵察機	高翼、固定脚	陸軍	3	17.16	12.12	3.0	43.57	3071	1789	3400	120	480	400	1800	3000 米迄 7分	8310	3	ナレ	450
日	ヘラクレス Ha 130	偵察機	高翼、固定脚	陸軍	3	14.5	10.5	3.7	31.5	2100	1000	3300	100	385	314	600	3000 米迄 8分	7900	3	ナレ	100
	ヘラクレス Ha 200	偵察機	高翼、固定脚	陸軍	3	14.5	11.0	4.3	38.5	2240	1200	3400	90	300	250	1500	1650 米迄 8分	6040	3	ナレ	140
	ヘラクレス Ha 200	偵察機	高翼、固定脚	陸軍	3	17.16	12.12	3.0	43.57	3071	1789	3400	120	480	400	1800	3000 米迄 7分	8310	3	ナレ	450
	ヘラクレス Ha 200	偵察機	高翼、固定脚	陸軍	3	17.16	12.12	3.0	43.57	3071	1789	3400	120	480	400	1800	3000 米迄 7分	8310	3	ナレ	450
米	ヘラクレス Ha 130	偵察機	高翼、固定脚	陸軍	3	14.5	10.5	3.7	31.5	2100	1000	3300	100	385	314	600	3000 米迄 8分	7900	3	ナレ	100
	ヘラクレス Ha 200	偵察機	高翼、固定脚	陸軍	3	14.5	11.0	4.3	38.5	2240	1200	3400	90	300	250	1500	1650 米迄 8分	6040	3	ナレ	140
	ヘラクレス Ha 200	偵察機	高翼、固定脚	陸軍	3	17.16	12.12	3.0	43.57	3071	1789	3400	120	480	400	1800	3000 米迄 7分	8310	3	ナレ	450
	ヘラクレス Ha 200	偵察機	高翼、固定脚	陸軍	3	17.16	12.12	3.0	43.57	3071	1789	3400	120	480	400	1800	3000 米迄 7分	8310	3	ナレ	450

第三章 最近の軍事航空

二三八

第三節 第二次歐洲大戰に於ける獨國空軍の活躍

既に述べたやうに、前の第一次歐洲大戰間に發展した、軍事航空は大戦後更に國際情勢

列國主要

國名	機名	用途	主製	機数	性能			
					最高速度	上昇力	航続距離	重量
英	ヘンレルー He 100	陸軍協同偵察	高翼、固定脚	金	3	1000 (870)	1	14.12
	ヘンレルー He 100	偵察機	低翼、引込脚	金	3-3	400	1	11
	ヘンレルー He 100	偵察機	低翼、引込脚	金	3	400	1	11
	ヘンレルー He 100	偵察機	低翼、引込脚	金	3	400	1	11
	ヘンレルー He 100	偵察機	低翼、引込脚	金	3	400	1	11
日	ヘンレルー He 100	陸軍協同偵察	高翼、固定脚	金	3	1000 (870)	1	14.12
	ヘンレルー He 100	偵察機	低翼、引込脚	金	3-3	400	1	11
	ヘンレルー He 100	偵察機	低翼、引込脚	金	3	400	1	11
	ヘンレルー He 100	偵察機	低翼、引込脚	金	3	400	1	11
	ヘンレルー He 100	偵察機	低翼、引込脚	金	3	400	1	11
米	ヘンレルー He 100	陸軍協同偵察	高翼、固定脚	金	3	1000 (870)	1	14.12
	ヘンレルー He 100	偵察機	低翼、引込脚	金	3-3	400	1	11
	ヘンレルー He 100	偵察機	低翼、引込脚	金	3	400	1	11
	ヘンレルー He 100	偵察機	低翼、引込脚	金	3	400	1	11
	ヘンレルー He 100	偵察機	低翼、引込脚	金	3	400	1	11

第三節 第二次歐洲大戰に於ける獨國空軍の活躍

既に述べたやうに、前の第一次歐洲大戰間に發展した、軍事航空は大戦後更に國際情勢の不安に驅られて、各列強互に、研究、検討、大なる擴充を行つて、來るべき有時に備へたが、遂に其の時が來た、東亞に於ては昭和十二年七月支那事變の勃發と共に地上、海上の武力と共に空中に大なる武力を使用し、以て所謂「立體戰」の實行に入り、茲に五年、更に昨年末大東亞戰に進展し、空中の活躍は更に驚異的なものがある、此の間歐洲に於ては、第二次歐洲戰の勃發となり、歐洲強國互に準備し、擴充した、大空軍を活躍さして、茲に歴史以來なき大空中戰を演じたのであつた。

我國空中部隊の支那事變以來今日迄の活躍は後節記述することとし、先づ第二次歐洲大戰に於ける實況、特に其の花形であり、主役であり、最も偉効を顯はして居る。獨乙空軍の活躍振りを検討して見ることにした。

今次歐洲第二次大戰は、一九三九年（昭和十四年）九月一日の獨軍「ポーランド」進撃開始から實行期に入つたのである。實際は前年三月十二日の獨境合併から始まつたと見るのが至當であらう。愈々實行期に入つてからは、獨乙軍は得意の電撃戰で忽ち「ポーランド」

ド」を席卷、次いで諾威、丁抹、「ルクセンブルグ」白耳義、和蘭、佛蘭西に及び、更に「バルカン」に飛火して、「ユーゴ」<sup>スラ</sup>「ギリシャ」を收め、北亞弗利加には伊軍と協力、遂に「クレタ」島を手に入れ、近く近東、北亞弗利加に英軍との雌雄を決せんとして居る。しかも一方英本土に對しては、連日猛爆と海上封鎖の手をゆるめずして、昨年六月二十二日には世界の陸軍國と自他共に許して居た。謎の國、獨乙にとりては後門の狼、「ソ」聯邦に向つて大鐵槌を振り、旬日を出でずして「スターリン」線を抜き「スモレンクス」「キエフ」の大勝を経て今や「レニングラード」「モスコ」<sup>ウ</sup>「ドンバス」地方の線に次期大進撃を待つて居る。

この間最も華かであり、最も偉効を顯はして居るのは、その空軍である全機能を發揮しての活躍、しかも急降下爆撃、空中挺進部隊落下傘部隊、或は空中列車と云はるゝ新しい戦法迄も用ひて、全世界の驚異となつて居る。正に東亞に於ける我國空中部隊の驚異的成果と双壁であらう。以下戦争の順を追ひ、大要を記述する。

波蘭戰

一、「ポーランド」戰

本戰に於ける獨空軍の活躍は大體に於て、制空權の獲得、地上協力作戰、政略攻撃の三つに分けることが出来やう。

大戰開始前の「ポーランド」軍の空軍兵力は大體次のやうであつた。

第一線機 八四〇機 其他 四一〇機  
 合計 一二五〇機  
 中隊數 七四(爆一〇 驅逐三二 偵察三六 連絡六)  
 兵員數 一五、〇〇〇人

之に對し獨乙空軍の使用兵力は約二、五〇〇機と云はれて居るから、約三倍、勝敗は戦はずして明かでもあつた。而かも使用機の性能、用法等は比較にならぬ優劣差があるのだから、「ポーランド」「スミグリ」元帥が「吾等は伯林を一時間にして空襲し、精銳なる陸軍を以て敵首都を指すのは決して難事に非ず」と、開戦六週間前に豪語したことも單なる夢物語であつた。

制空權獲得

(1) 制空權の獲得

九月一日、午前五時四十五分、命令一下獨空軍は珍らしき濃霧の悪天候を克服して進撃の第一歩を踏み出し、敵の重要飛行根據地に對する爆撃を敢行した、機先を制したのである。

爾後、逐次攻撃の範圍を擴大し、獨乙國防軍司令部は早くも二日午後には「ポーランド

「全土の制空権を掌握せり」と発表した。

地上作戦協力

(2) 地上作戦協力  
この間、接的なものは交通線と通信線の破壊である。制空権の獲得と共に、鐵道線殊に停車場は大半爆撃したので、波軍の後方から輸送中の約十師團は遂に汽車輸送に依るを得ざるに至つた。又命令の傳達も至難になつた。

波蘭參謀本部が「敗戦を自覺」したのは己に開戦第三日であつたと云ふ、如何に機先を制したかが判ると思ふ。

地上作戦協力の直接行動としては、敵行軍縱隊に對する急降下爆撃、豫備隊、既設陣地砲兵陣地の爆撃、橋梁破壊、トーチカ攻撃等御多分に漏れず、目覺ましいものがあつた。

有名な「ブズラ」河畔の空地協力の殲滅戦（九月四日）の如き約二時間餘に波蘭の五箇師團を粉碎するに至つて居る。

政略攻撃

(3) 政略攻撃

一方獨空軍は首都「ワルソー」に對し、政略攻撃を敢行してゐる。

諜報によつて、よく敵高等司令部に痛撃を與へ、後方に「パニック」を起さすため勞働者街を爆撃し、特に工業地帯は完膚なく破碎した。

右のやうなことで、住民は大混亂、當局の統制に服せず、高等司令部は轉々位置を移して指揮錯亂、作戦は不能となり、國民は歸趨に迷ふこととなり、二十二日には、獨「ソ」間に分割協定成立し、二十七日には首都「ワルソー」陥落して、遂に波蘭なる國が地圖上から消えた。

九月三日から（一、二日發表なし）九月十九日迄の撃滅數の累計は

空中戦によるもの	六七
對地攻撃によるもの	一二九
捕獲せるもの	二八一
遁飛せるもの	二六四
合計	七四一

諸威戦

二、「ノールウエー」戦

この作戦は、大體に於て空軍對海軍戦と云ふことが出来るが、獨空軍活躍の見地から見ると次の三つに分けると思ふ。

即ち、輸送機による軍隊輸送、海軍對空中戦、彈藥糧食の空中補給。

軍隊輸送

(1) 輸送機による軍隊輸送

一九四〇年四月八日、英海軍は獨乙輸送船を魚雷によつて諾威沖で撃沈した。依つて、九日突如丁抹に進兵して無血占領した獨乙は、同時に軍艦により諾威の「オロス」灣に進入しやうとし、諾威は之を砲撃したので、本格的の戦争となつた。

英海軍は直ちに出勤して、九日中に諾威海岸で海戦となり、獨軍は不利、輸送船も數隻沈められて制海權が英海軍に收められた。

海上輸送に失敗した獨軍は、輸送機二百機を以つて、「ベルゲン」「オスロー」等四要衝に兵員を空輸した。九日だけの一日に「オスロー」に上陸した海上輸送員三〇〇に對し、空輸兵一、五〇〇名であつたと云ふから、其の効果の大を知り得やう。

かくして、一週間に歩兵三箇師團を空輸して居る。

この獨乙、諾威間の空輸距離は七〇〇軒、一日數回往復して居る。

獨乙の空輸戦は、既に「スペイン」内亂の時に實施したことがある。この時は「モロッコ」土民一萬人を「スペイン」戦線へ、三〇機の「エンカー」52型で一週間に空輸して居る、(平時一七人乗の旅客機であるが内部改造で三〇名の武装兵を乗せる)

對海軍戦

(2) 對海軍戦

南部諾威が獨軍の手に歸した時、英海軍は北部「ナルヴィク」を封鎖し、獨軍は苦戦に

陥つた。しかも英軍は多數の輸送船を使用し、軍艦護衛で「トロントハイム」に向つたので、直ちに獨空軍は一五〇機の爆撃隊を出動せしめ、英艦隊に猛爆を加へ、且つ陸上では例の急降下爆撃をやつて、遂に英軍の企圖を水泡に期せしめたばかりでなく、この空海戦で、英の三萬六百噸「ウォースパイト」號型大戦艦を、唯一發の爆彈の命中で、三十一秒間に沈没せしめて居る。この事實は從來「飛行機では小型艦船以外爆沈出来ぬ」と云はれた事を裏切つたもので、世界の驚異である。之れも今次大東亞戦争で「マレー」海上、英主力大戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」と「レバルス」を一舉に奢つた日本空軍の成果と共に、永く歴史を飾り、將來の海軍軍備に大なる革命的變化を與へるもの、一つであらう。

空中補給

(3) 空中補給

前にも述べた「ナルヴィク」附近の獨軍は、英艦隊の封鎖と、英軍の上陸によつて孤立苦戦に陥つたが、獨軍は「オスロー」から「トロンハイム」を経て武器、彈藥、食糧及大砲迄も空輸し、以て英軍をして諾威より總退却の端緒を開いたのである。

戦果

(4) 諾威戦の戦果

諾威戦に於ける空軍總戦果は獨軍發表によれば左の通りである。

○與へたる損害

飛行機 八七（撃沈航空母艦のもの含まず）  
軍艦 二八隻（約九萬噸）  
商船 七一隻（約二八萬噸）

右の外大損害を與へたるもの

軍艦並補助艦艇約八〇隻

商船約三〇隻

○獨軍の損害

巡洋艦 三隻  
驅逐艦 一〇隻  
水雷艇 一隻  
潜水艦 一五隻  
飛行機 九〇機（損害を受けしもの 二七機）  
戦死傷者 二、九二一  
行衛不明者 二、三七五

白蘭戰線

三、白蘭戰線

一九四〇年五月十日佛曉、「オランダ」「ベルギー」「ルクセンブルグ」の三國に對し一齊進撃を開始した。

この戦線では、獨空軍は益々威力を發揮し、全戦局の大捷は空軍の力なりと云ふも過言でない程である。

空軍は「アントワープ」「ブラスセル」を爆撃し、又遠く佛國の空軍基地十數ヶ所を猛爆して機先を制し、「オランダ」海岸の敵前上陸に協力、地上作戦に協力し、落下傘部隊空中挺身隊の奇襲等、と相待つて所謂電撃戦に成功した。

前と同じく制空權の獲得、落下傘部隊の運用、地上作戦協力の三つに分つて大要を記述する。

制空權獲得

(1)制空權の獲得

獨乙空軍の敵空軍攻撃は、開戦當日五月十日未明に開始された。驅逐機、戦闘機に掩護された爆撃隊、急降下爆撃隊は和蘭、白耳義及北佛の合計實に七十二個の飛行場を爆撃したので、第一日で既に根本的に破壊し、しかも第二、第三日と繰返へし、大體第三日で目的の大部を達成したのであるから、驚く外はない、五月十日から巴里の空襲をやつた、六

○與へたる損害

飛行機 八七（撃沈航空母艦のもの含まず）  
軍艦 二八隻（約九萬噸）  
商船 七一隻（約二八萬噸）

右の外大損害を與へたるもの

軍艦並補助艦艇約八〇隻

商船約三〇隻

○獨軍の損害

巡洋艦 三隻  
驅逐艦 一〇隻  
水雷艇 一隻  
潜水艦 一五隻  
飛行機 九〇機（損害を受けしもの 二七機）  
戦死傷者 二、九二一  
行衛不明者 二、三七五

白蘭戦線

三、白蘭戦線

一九四〇年五月十日佛曉、「オランダ」「ベルギー」「ルクセンブルグ」の三國に對し一齊進撃を開始した。

この戦線では、獨空軍は益々威力を發揮し、全戦局の大捷は空軍の力なりと云ふも過言でない程である。

空軍は「アントワープ」「ブラッセル」を爆撃し、又遠く佛國の空軍基地十數ヶ所を猛爆して機先を制し、「オランダ」海岸の敵前上陸に協力、地上作戦に協力し、落下傘部隊空中挺身隊の奇襲等、と相待つて所謂電撃戦に成功した。

前と同じく制空権の獲得、落下傘部隊の運用、地上作戦協力の三つに分つて大要を記述する。

制空権獲得 (1) 制空権の獲得

獨乙空軍の敵空軍攻撃は、開戦當日五月十日未明に開始された。驅逐機、戦闘機に掩護された爆撃隊、急降下爆撃隊は和蘭、白耳義及北佛の合計實に七十二個の飛行場を爆撃したので、第一日で既に根本的に破壊し、しかも第二、第三日と繰返へし、大體第三日を目的の大部を達成したのであるから、驚く外はない、五月十日から巴里の空襲をやつた、六



月三日迄に敵機破壊總數は九五〇機（總數二、六六〇機の約三六%）であつた。

英佛軍は、波蘭軍と異り、五月十四日には、獨軍の「ゼダン」攻撃の時、英佛聯合陸上部隊と共に空軍も大反撃して、西部戦線最初の中空戦を展開した。この結果、英佛軍は一七〇機を、獨軍に撃墜さるゝと云ふ西部作戦最大の記録を残し、全く敗退、爾後制空權は完全に獨軍の手に歸した。

落下傘部隊

(2) 落下傘部隊運用

落下傘部隊は前述の「ポーランド」戦にも「ノルウェー」戦の「オスロー」上空でも少量は用ひられたが、今度は實に大々的に利用されて、偉功を奏して居る。

○「ロッタルダム」附近の戦闘では、十日の拂曉に空輸部隊は爆撃隊に掩護されて同市に接近し、低空から不意に格納庫其他の施設を爆撃し、之と前後して落下傘獵兵（約三中隊）が飛行機場周辺の畑地に集團降下し、三方向から飛行場を攻撃し、友軍機の爆撃地上掃射と協力して、一部を占領、續く空輸挺進部隊は飛行場に著陸（兵力約八〇〇名）し、一時間後には完全に飛行場を占領した。「モエルヂック」附近の橋梁は落下傘獵兵だけで橋梁の兩側に集團降下して、守備兵を驅逐し、且つ橋梁破壊の餘裕も與へずに之を占領した。○「レイデン」附近「アルベルト・ケーナル」運河附近でも落下傘獵兵が集團降下して奮

地上作戦協力

闘して居る殊に後者に於ては運河を瞰制する「ルーチツヒ」要塞「エベンエマエル」堡壘の背後に、集團降下し、之が一角を占領し、地上軍の到着迄確保して居る。

(3) 地上作戦協力

「マデノ」線中最薄弱部分と認めらるゝ「ジヤールヴェイル」「セダン」間を獨軍は突破しやうとしたが、「マース」河渡河が困難である。特に機械化部隊の渡河は難事である。依つて獨爆撃隊は幅三呎の最脆弱部を連續爆撃し、後方側面部隊の援助も爆撃で妨害し、かくて空地密接な協力で「マデノ」線を突破に成功した。

以上の如く、獨乙の計畫通り、白蘭戦線が五日間に攻略出来たのは、其の原因は空軍の活躍が第一であると思ふ。獨軍使用飛行機數は約五、〇〇〇機を超え、英佛機合計は約一、二〇〇機位であつたらう。

四、「フランドル」包圍殲滅戦と佛の敗退

「マデノ」線を突破した獨乙軍は直ちに東西二方に進撃して、丁度「マデノ」線の裏から攻撃する格構になつた。次で其の主力は西へ西へと延び、遂に世界戦史上特筆すべき「フランドル」の大包圍殲滅戦が展開したのである。

四、五十萬の英佛軍は、「ダンケルク」「オステンド」の間約五〇呎の海岸線と「リール」

「フランドル」包圍殲滅戦と佛の敗退  
（マデノ）線突破

を繋ぐ三角地帯（東京府位の廣さしかない）内に追いつめられたのであつて、獨乙急降下爆撃隊が地上の機甲部隊と協力して思ふ存分に活躍して居る。

（カンブレ  
！戦車大遭  
遇戦）

五月二十日から二十四日に亘る「カンブレ」<sup>！</sup>「ヴァラセエダ」の平原に起つた戦車の大遭遇戦は亦稀有のもので、數千臺に上る聯合軍戦車は、中央突破戦法に出た獨軍機甲部隊に左右から襲ひかゝつたのである。

此の時も、獨乙急降下爆撃隊は、痛烈に聯合軍戦車團を攻撃して、之を追ひ散らし、獨戦車團の活動を支援して、遂に聯合軍側をして失敗に終らしめた。

（白耳義降  
伏）

五月二十八日、白耳義の無條件降伏となつて、聯合軍は益々窮地に陥り、遂に「ダンケルク」から英本土に逃避する作戦となつた。

（大殲滅戦）

然し、獨空軍は聯合軍の逃避を許して置かう筈なく、二十九日の午後から夜に亘つて、二個飛行軍團が翼を揃へて大舉「ダンケルク」「オステンド」附近の乗船退却作業に對し痛弾を浴せて殲滅的打撃を與へた。

五月三十一日には「フランドル」「アルトア」戦線は聯合側の大敗となり、六月四日には遂に「ダンケルク」も獨逸の手に歸した。かくて「フランドル」殲滅戦も休止符を打たれた。

この戰場派遣の英佛聯合軍少くも四十萬、しかも英本土に退逃上陸したもの僅かに英軍十二、三萬、佛軍三、四萬であつた。この輝く戦果は一つに空軍の賜で、空の空軍、地上の機械化部隊こそ近代戦の兩横綱であると云へやう。

對佛作戦

### 五、對佛作戦

（巴里空襲）

「ダンケルク」の殲滅戦が終つてから、六月三日には獨空軍は大舉巴里を空襲して、佛空軍に一大鐵槌を與ふると共に、巴里市民を恐怖の渦中に投じた。

この目的は「巴里市民に對し、大敗戦の實相と、制空權は獨軍にあることを知らしめ、戦意を失はしめ降伏を促進しやう」と云ふ。政略攻撃である、六月三日、空襲の結果は一〇四機を撃墜し、三、四〇〇機を地上に破壊し、且つ巴里周邊（特に巴里市街を避け爆撃した）の軍需品工場、飛行場、飛行機製作所に徹底的爆撃を実施して居る。

斯くて、佛軍の運命は更に急速度を以て下り坂になり、戦意を失ひ、又國內相剋となり相待つて殆んどなすことなくして土崩瓦解してしまつた。獨空軍としては、英佛の連絡特に海上連絡の遮断と陸軍援助に活躍したが、共に獨り角力の形であつた、殊に地上作戦は殆んど佛國の抵抗もなく、十日後の六月十三日には既に獨軍の一部十四日には全部の巴里入城となつたし、交通遮断も英國が自己の本土防備に忙殺されて殆んど手が出なかつた状

態である。

(英佛連絡遮断)

英艦船損害状況を見れば英佛の連絡遮断の大體が想像されるであらう。

一九四〇年自六月四日至六月二十二日空爆による英艦船損害表

巡洋艦	1	1	3	3
補助巡洋艦	1	1	1	1
驅逐艦	1	1	1	1
輸送船	40	40	25	65
計	42	42	29	71

(獨軍發表による白蘭戰、「ダンケルク」戰及び佛蘭西戰に於ける損害機數)

對白蘭戰	1,143	340	1,570	1,953	441
對ダンケルク戰	346	155	233	734	102
自六月三日至六月五日戰					
對佛蘭西戰					
自六月三日至六月五日戰					
計					

英本土爆撃と經濟逆封鎖

六、英本土爆撃と經濟逆封鎖

(1) 英本土爆撃

英本土爆撃は、國交斷絶（一九三九年九月三日）以來間歇的に行つて居つたのであるが「フランス」攻略後七月中旬から、英本土東南地區の重工業地帯に對し、大規模に實施を開始し、更に八月七日から、一齊に空軍は活潑な動きを見せ、數百機の大編隊で、一日數回「スコットランド」地方と「ブリistol」地方に本格的の空襲をやり始めた。

かくて、十四日には「クロイドン」飛行場を、十五日には遂に「ロンドン」上空に獨機千機以上の姿を現はし、以後益々熾んに英本土隈なく爆撃せらるゝに至つた。

英國亦全力を擧げて挑戦し、世界無比と迄云はるゝ地上の防空施設と相待つて（「ロンドン」を中心とする高射砲の設置されたるもの約三千門と云ふ）茲に大空中覇權の争闘戰も開始せられた。

(初期の空襲回数)

初期に於ける獨機の對英空襲回數は實に左の通り屢次に亘り、十一月のみでも六、七四七噸の爆弾を投下して居る（燒夷彈を含まず）

都 市 名	八 月		九 月		十 月		十 一 月		計
	昼	夜	昼	夜	昼	夜	昼	夜	
ロンドン	二	四	二六	二六	三〇	三〇	二四	二八	一七〇
プリストール	二	五	四	四	〇	〇	〇	〇	一五
バイミンガム	三	七	二	一	一	二	三	一四	四三
コヴェントリー	一	三	〇	一	二	一〇	〇	一〇	二七
リヴァプール	〇	六	五	一〇	六	一四	〇	二二	五三
マンチエスター	一	一	〇	二	三	二	〇	〇	九
ブリマウス	二	四	一	一	〇	〇	一	二	一一
サマムトン	一	〇	四	一	〇	〇	一	四	一一
其の他	九三	九〇	三八	二九	三二	二	三三	一〇	三二七
計	一〇五	一二〇	八〇	七五	七四	七〇	六二	八〇	六六六

(初期四ヶ月間の損害)

又其の四月間に於ける飛行機損害は左の通りである。

	八 月	九 月	十 月	十 一 月	計
英	一、五六〇	一、一一二	四〇三	一七九	三、二五九
獨	四一一	三四二	一三二	九九	九八三

經濟逆封鎖 (2) 經濟逆封鎖 (通商破壊戦)

獨逸が制海權を英國に握られて居る以上、英國から經濟封鎖を受けることは當然で、今次歐洲戰に於ても、開戰以來今日迄封鎖を受けて居る。然し大陸の作戰に一段落を告げた獨逸は、大西洋岸に地歩を得たので、「ノールウェー」と佛國の「ブルタユエー」半島の兩方面から、「アイルランド」西方大西洋上五〇〇—七〇〇浬の海上に空軍を出動さし、Uボート、Eボートと呼應して、對英經濟逆封鎖を敢行したのである。

開戰以來昨年中頃迄の獨軍發表による艦船撃沈噸數は左の如くである。

總噸數 一一、六六三、二一一噸

而して其の撃沈内譯を見て見ると大體に於て其の約二一—二五%が飛行機によるものである。

(逆封鎖の将来)

参考の爲に英國の經濟的見地からこの通商破壊戦を見て見やう。

英國の自活上必要な船舶噸數は一、五〇〇萬噸と云ひ或は一、二〇〇萬噸と云ふ。

英國開戦前の保有船舶噸數 二、〇六〇萬噸

獨伊側より鹵獲せるもの 四〇萬噸

獨逸の占領國籍にありしもの 七〇〇萬噸

米國より購買せるもの 八〇萬噸

開戦後建造せるもの 一五〇萬噸

計 三、〇三〇萬噸

右の中で生活用に使用し得るものは

陸海軍徴用船 七〇〇萬噸と

開戦後の損料 一、一〇〇萬噸を

除いて昨年末には一、二三〇萬噸となつて居る獨軍發表を不正なりとして昨年末迄に英國自ら公表した通り損耗が六一〇噸なりとしても残るは一、七二〇萬噸であつて前に述べた必要量の一、五〇〇萬(一、二〇〇萬)噸に比し僅に二〇〇(五〇〇萬噸)萬噸しか餘裕がない状態である。

而かも開戦前と異りて、必需品は遠く印度、濠洲或は近くも南阿迂回で且つ輸送力の減少する輸送團運行をやらねばならず、更に英本土の港灣施設を破壊されて荷役の減少して居る今日、果して彼の云ふ如く一、二〇〇—一、五〇〇萬噸にて生活し得るであらうか、更に近く獨逸の全力が對英直接の作戦となり、又大東亞戰爭の結果濠洲、東亞から輸送も不可能になり、米國亦援英を積極化し得ないとしたならば、英本土島民の餘命も亦長くはないではなからうか。

北阿、「バルカン」戦線

七、北阿バルカン戦線  
伊軍の作戦香ばしからぬ北阿の戦線、と「ユーゴ」 「ギリシャ」等攻略の「バルカン」戦に於ける、獨空軍の活動も亦大なるものがあつたが、四月中旬から「クレタ」島に向けて撤退を開始した英軍を希臘灣に於て再び「ダンケルク」悲劇を演ぜしめて終つた。(一萬五千の兵員と夥しい兵器々材を遺棄せしめ艦船七〇隻—四〇萬噸を沈めた)ので詳細は記述せない。

「クレタ」島攻略

八、クレタ島攻略  
この攻略は終始一貫空軍のみで攻略したと云ひ得やう。

獨空軍は英、濠、希軍に對して急降下爆撃機、落下傘部隊、水陸の「グライダー」部隊

及空中挺身隊で約旬日でこれを完全に攻略したのである。

獨軍の攻撃を豫期した英軍は、「バルカン」戦前から「ニュージールランド」兵二師團と希臘軍の一部計約五萬で最後の死守を決意して居つた。

獨軍は、昨年五月二十日早朝島内數ヶ所の飛行場を猛爆した後、先づ落下傘部隊に、引續いて多數の「グライダー」や軍用輸送機によつて奇襲着陸を敢行したのである。

斯くして防備軍と激戦中である落下傘部隊の後援として、同夜三千名を更に爾後逐次空輸部隊を派遣し、又火砲戰車を空輸して、兵力を増強、一方二十五日には獨軍空軍の協同下に海上から「カネヤ」附近の上陸に成功し、茲に兩者協力して、二十八日には「カネヤ」を攻略し、續いて東方に戦果を擴大して行つた。

其後空軍の英空軍攻撃、上陸作戰協力等があつて、二十三日英空軍は埃及「キブルス」島に撤退し、二十五日から伊空軍も亦参加したので、「クレタ」島の制空權は獨伊に歸し、英海軍は獨伊空軍の爆撃下に曝されることゝなつた。

此の機に乗じた、伊海軍の猛攻と相俟つて、英海軍は獨空軍のために巡洋艦七隻、驅逐艦十一隻、快速艇七隻、潜水艦四隻を伊海軍のため巡洋艦五隻、驅逐艦一隻を撃沈せられた。

又島上に於ては英軍一萬七千、希臘五千を捕虜として獨軍の手に残し、辛うじて「クレタ」島を撤退したのは大部分武器を放棄して、英軍の埃及に撤退したものの約一萬五千と云はれて居る。

本攻畧戰で特に注目すべきは、落下傘や「グライダー」の大規模の使用で、これで大部隊を降下着陸せしめたことは従來の戦史に一新紀元を劃するものであり、又後方補給は總て空中輸送したことも特記する必要があらう。

### 獨「ソ」戰 九、獨「ソ」戰

獨逸が建國以來精神的に相容れざる「ソ」聯の不信に對し、遂に昨年六月二十日開戦した。其の開戦に至る前年來の經緯とか爾後の戦闘推移の様子は本書の目的でないから茲に割愛するとして、開戦當日、獨空軍は「キエフ」「セバストポール」軍港、「ウインダウ」(「ラトビア」の「ソ」聯空軍基地)「コブノ」「オデッサ」を爆撃、二十三日には四回に亘つて「レニングラード」を爆撃、爾後地上の花形、機械化部隊の活躍と相呼應して、空に陸に空軍の全活動舞臺で大活躍をして來た。

かくて同月二十九日には早くも開戦來六、六八九機の損害を與へたと發表する大戦果を得て居る。

爾後「スモレンスク」「キエフ」「オデッサ」等の大殲滅戦を経て戦線は「レニングラード」「モスコ」「ドンバス」に亘る線迄進出し、冬季に入り、例年よりも甚だしき寒氣に作戦行動の自由を失ひ、一方次年春季（即ち今春）の作戦諸準備のため、一時作戦休止になつて居る。

開戦した時空軍は獨逸側約一〇、〇〇〇機「ソ」聯側西方戰場に在るもの六、〇〇〇機と推定さるゝが其の後「ソ」聯は全空軍を（極東軍の大部を除く）之の作戦に使用したので恐らく休止期迄には三〇、〇〇〇機を越して居やうと思はれるが、今や其の殆んど、九〇%は獨軍のため撃墜、撃破されたであらうと思はれる。十二月一日の獨逸側の發表では飛行機三二、〇〇〇の損害を與へたと云つて居るから、多少割引して考へても既に工業力の大半を失つた「ソ」聯が、而かも空軍の再建にのみ工業力を使用し得ないことから考へて最早や再び、獨空軍と相争ふだけの空軍は保有し得ないと思はるゝのである。

この獨「ソ」戦間の各地の戦況、戦果等は改めて、こゝに記述するまでもないと思ふから、來るべき再開の期を楽しみにして擱筆する。

#### 第四節 支那事變に於ける我が航空部隊の活躍

支那事變勃發以來茲に五年、此の間の戦況と之に伴ふ我航空部隊の活躍については讀者も詳細に知悉して居ることであらう。又當然知るべきことであると思ふが、今から航空部隊の活躍に就きて其の概要を記述しやう。

蘆溝橋事件が起つて間もない昭和十二年七月二十六日の拂曉北寧線郎坊の敵に最初の一弾を投下したのが初まりで、今日迄五年間、偉大な戦果を擧げて世界戦史に空前の大戦果と稱されて居る。

この今日迄の戦曆を述べて見ると初期は先づ地上作戦協力に終始して居た。これは當然のことであの廣大な土地、あの錯雜した地圖不正確な戰場、數百數千倍の雜軍相手であるから、飛行機の協力なしでは、地上戦闘は、左様に進捗はしないのである。勿論この間にも敵機の現出する毎にこれを撃墜したり、機を見ては飛行基地を襲撃して、敵飛行機を爆破した。即ち地上作戦協力を主體とし、必要に應じて隨時航空撃滅戦を行つたのである。之を見ると確かに近代戦が先づ航空撃滅戦、制空權獲得争覇から開始さるゝと云ふ方式と異つて居る。これは支那と云ふ特異の國又特異の軍備等による變態である。さて後に至つては遠く西安、蘭洲、成都、重慶に進攻し、來攻の敵機を邀撃して航空撃滅戦をやり、又、重慶、蘭洲、成都、昆明等の奥地進攻作戦を行ひ、更に援蔣滇緬「ルート」を爆撃し

た。

以上の間我々が看過し易く而かも看過し得ないことは戦闘機部隊が困苦多き要地防空に黙々として従事し、この廣大な占領地域に一機たりとも敵機に潜入の機を與へない防空鐵壁を作つて居ることである。

#### 地上作戦協力

##### 一、地上作戦協力

支那事變に於ける陸軍航空部隊の活躍は殆んど其の九割までが、前に述べた通り、この地上作戦協力である。

地上作戦協力と云ふことは、これを最も端的に云へば、地上部隊の作戦を容易にし効果的ならしめるための飛行隊の協力戦である。即ち

#### (搜索)

地上の友軍部隊のため敵情を搜索して斥候の役目をする。廣大なる地域で、しかも俗に「霜の様に現はれて、雪のやうに消える」と云はるゝ神出鬼没自分の庭の内で隠れん坊でもして居るやうな支那兵を相手にするのであるから、これをうまく搜索して捕捉することも大變である。地上ばかりではなかく、出來ないのである。それで飛行機で空中から敵の行動や其他を搜索して、これを直ちに友軍に知らして、之に對應する策を採らしたり、敵の慮を衝かす役目をせねばならない。昭和十四年の十月から十五年の一月に亘つた。敵の

冬季攻勢のとき等は、著者は漢口に飛行部隊長として、駐屯して居つたが、我が地上軍の四圍からそれこそ五月蠅むしやうに攻勢に出て來る。この情況を搜索するのに連日數回四方八方に飛んで、各々その方面の軍隊に通報するので大變であつた。

#### (進路開拓)

又部隊の前面の敵を掃射爆撃して、その進路を開いてやる。これも御互に正面衝突すれば相手に不足のやうな弱敵ではあるが、やはり廣い土地で數十數百倍の敵が居るのであるから、空から協力して適當な箇所を見て、又地上の軍隊の希望する場所を選んで、大打撃を與へてやり、それに呼應して地上軍隊が攻勢に出て敵全軍敗退の動機を作ると云ふことをやるのである。

#### (道案内)

又道案内の役を務める。地圖がなかつたり、あつても現地とは大變異つて居る不正確な處が多いことがあり、又蜘蛛の子を散らした様に敗逃した敵が何處へ、何れの方面に行つたか皆目不明のことがある。かやうなときに空中から地上軍隊に「こちらへ行け」と道案内をするのである。昭和十五年の五月からの宜昌作戦の時なども襄陽附近から漢水の西方地域に出て、南下し宜昌に向つた〇〇部隊のごときは、土地は山又山の處ではあり、地圖も不正確、又道と云ふ道もなく谷川傳ひに前進するので、左右の連絡も、前方の情況も皆目不明で困つて居つた。かう云うときに飛行機が空から部隊長の企圖通りにするには今



の處からこの方へ行け、その谷川を何軒進んだら今一つ右の谷へ移れとか云ふやうに教え  
てやつたり、又直接飛行機でその方向を知らして進路を誘導してやつたこともある。

(連絡)

○友軍部隊相互の連絡任務に當る空の飛脚の役をつとめる。このことも前の偵察機の任務  
のところでも詳しく述べたが、地上作戦の経過が早くて通信連絡の途がないときとか、廣大  
な地域に部隊が散ばつて居て左右の連絡も上下の連絡も出来ないとか云ふ時に、空から通信  
筒を投下して命令とか通報を傳へたり、又地上からの報告や通報を飛行機で釣り取つて、  
これを名宛のところへ持つて行つて又投下するとか、全く飛脚と同じことをやるのである  
この仕事は事變中何時でも戦場が尤大なのと、戦闘の経過が早いので、随分多くやらされ  
て居る。極端に云へばこの連絡の飛行機がなくては、完全な戦闘の指揮も出来なければ御  
互が盲目、豊であるとも云へるほどである。

(補給)

○又友軍が敵の重圍に陥つたやうな場合には糧食や彈藥や、醫療具など投下する。これも  
前に述べた冬季攻勢反撃の時など随分各方面でやつたことである。何しろ廣い地域で少な  
い部隊が、散りぢりに戦闘して居るし、敵が多いのであちらこちらに敵から四周を圍まれ  
た小部隊が出来ることは、當然であつて、飛行機で偵察連絡に行つて見ると「彈藥なし」  
と云ふやうな地上からの信號がある。すると速かに後方に飛んで歸つてこれを知らし、今

度は彈藥其の他の物資を積んで行つて空から落下してやるのである。

(砲兵協力)

○この外に砲兵の目標發見とか、射彈の觀例とかもやる。

凡て右のやうにやることは至極地味ではあるが、作戰上重大な意義があり、而かも随分  
苦勞の多い仕事が澤山あるのである。

實際戰場に立たない人は、飛行機と云へば花々しい空中戦とか、爆撃ばかりを考へるし  
新聞なんかにも「ニュース」としてはそんな花々しいことだけしか出て居ないから、想像  
が出来ぬかも知れないが、飛行隊の仕事としては、その大部がこの苦勞の多い。地味なこ  
とに追はれて居ると云ふことを十分に理解していただきたいと思ふのである。

航空撃滅戦

### 三、航空撃滅戦

これは敵空軍勢力を叩きつぶし制空権を握るための作戰である。

即ち長驅敵飛行根據地を襲つて、地上の飛行機や格納庫燃料庫等の航空施設を爆砕した  
り、又空中に敵を邀撃して、撃墜し、或は自ら敵地上空に進入して華々しい所謂空中戦を  
やることかゞこれである。

(撃滅戦の  
開始)

今事變で陸軍が、はつきりした形でこの態勢をとり出したのは前にも述べた通り、事變  
第二日目即ち昭和十三年に入つてからである。

事變第一年は、敵空軍は一切北支の空に現はれなかつた。中支方面は陸上に飛行基地が得られなかつたので、主として海軍機が活躍したのである。往々世間で陸軍機は何をして居るかと云ふやうなことを云ふ人もあつたやうであるが、これが全く前にも述べた『飛行機と云へば空中戦とか爆撃行の花々しいことばかり考へて、地味な地上作戦協力に關心を持ち得ない』ことから出た素人の文句である。

南京攻略に移る頃から陸軍もこの活躍を初めたのである。

九月十五日を期して、北支〇〇基地から長驅洛陽の初空襲を斷行、珍らしく應戦して来た敵機八機を鎧袖一觸に血祭に擧げ、次で山西省方面でも、九月二十一日太原飛行場を急襲して敵機を撃墜した。

年が明けて、昭和十三年になると俄然航空撃滅戦が忙がしくなつて来た。

一月三十一日舊曆元旦、洛陽の再空襲から、矢繼早やに各方面で空中戦も初まり、漢口作戦が初まる頃からは一方に地上作戦協力も多忙になり、悪天候を克服して連日出動しながら、一方各方面を爆撃して數十機を撃墜爆破して居る。

武漢陥落後の十月から十一月にかけて漸く活潑になつた重慶、蘭洲進攻作戦では忽ちにして敵機百四機を撃墜爆破して航空隊の本領を發揮した。

だが航空撃滅戦として特筆すべきことは、何と云つても昭和十四年五月十一日に突發した、「ノモンハン」事件での大戦果であらう。

(ノモンハン事件)

「ノモンハン」事件の荒鷲の活動は既に市中に本も出て居るし恐らく空軍に關心のあるなしに拘らず、好き戦記物語として讀んで居らるゝと思ふから詳しいことは省略する。

然しこの空中戦の特徴は、我が軍が終始「ソ」聯外蒙軍の壓倒的多數に對して、敢然戦つたことであらう。

數十回行はれた空中戦で必ず敵は我が二倍から七、八倍、多い時には十倍を越へて居つたのである。

六月二十七日の「タムスク」上空の空中戦では敵は我れに數倍する約二〇〇機の大群で文字通り空を蔽ふて來襲して來たが、精銳な我空の戦士は、忽ち九十八機即ち約半數を撃墜して居る。

九月十五日停戦迄僅かに三月餘の日數で、而かもこの一局地でありながら、その總戦果は撃墜機數一、三三二機、爆碎せるもの五七機合計一、三八九機で之に對し我が損害は一三七機であつた。(此の敵機の損害は極く内輪に見積つたので英米は勿論「ソ」聯自ら二、〇〇〇機損害を認めて居る)

この大戦果を挙げ得た原因は何であらうか。

色々の理由もあらうが、結局は人の問題であり、平素の訓練の精粗、真剣味の有無に歸するのではなからうか。

人の問題とは云ふ迄もなく國民性と、更に戦闘意識の強弱であらう、今更説明するまでもない。訓練と云つても今次大東亞戦緒戦の戦果を挙げ得た原因の大なるものがそれであると同様に、平素の訓練の真剣味が異つて居る。

一例を挙げると「ソ」空軍の平時訓練では危険防止の関係から「空中衝突等」〇〇米以内に相互近接を禁じて居るやうであるが、我が空中訓練ではその〇〇米以内でなければ射撃してはならぬ。但し〇〇米（約十分の一）以内には接近せぬやうにと云つて居る。それだから平時訓練中に我國では屢々相互に空中で飛行機が接觸して翼等を破損することがあるやうに、實に他人が見て冷汗を出すやうな真剣な訓練をやつて居る。これに反し現に「ノモンハン」事件の敵空軍ではやはり平素の訓練の現はれとも云へやうが、遠方から射撃を開始するので、我飛行機が射撃を開始しやうと云ふ實際に有効射弾の送れる〇〇米位迄に、彈丸を射ち盡して居たのが澤山あつたやうである。これは精神力が假りに我國と同様であつても、戦闘にならないのであつて、それに根本の戦闘意識—捨身の覺悟—が劣

つて居つては數十倍の形の優れた點があつても相撲にはならぬのでらう。

### 奥地進攻作戦

これは武漢戦後から、海軍航空部隊と力を合せて、開始されて、今日も尚ほ續けられて居り、前にも述べた通り、「ニュース」其の他で屢次、其の都度華々しく紹介されるし、人々の周知のことである。

即ち重慶、蘭洲、成都等敵の軍事的又は政治的中樞に向つて行はれたり、援蔣ルート、連絡路破壊を目的とする奥地進攻爆撃である。即ち言ひ換へれば連絡路破壊攻撃政戦兩略上の要地攻撃である。

この長驅爆撃行には、機材の優秀、搭乗者技倆の熟達、搭乗員の不撓不屈の精神力の三要素が完備せねばならぬ。

昭和十三年十一月十五日夜空軍再建の據點である蘭洲の初空襲から初まつて、爾後之を襲ふこと數次重慶は海軍機と協同して空襲すること數十次、今日もなほ屢次繼續されて居る。重慶も爲めに今日は灰燼に歸し、僅かに地下に潜つて餘喘を保つて居る。

南支方面では「ビルマ」からする唯一殘存の「ルート」の據點、昆明に昨年四月八日初空襲を行つて以來今日迄數次に亘つて痛爆を加へ、且つ其の「ルート」も直接爆碎しつゝ、

ある。

#### 四、要地防空

いま大陸のあの廣大な我が占領地域では、陸軍の飛行隊は「要地防空」の任務に當つて居る。

占領地域や、重要軍事地を敵の空襲から護るために、制空權を保持する「空の警備兵」とでも云ふべきものである。

毎日朝から夕まで、或は夜間もぶつ通して、飛行機を飛ばして、来るか来ないか分らない敵機を一刻の油断もなく監視して居る。誰が考へてもこれ程辛い任務があるだらうか。

しかも來襲に備へて相當の高度を飛んで居なければならぬ、五、〇〇〇米にも昇れば酸素吸入しながら幾時間かを飛ぶのである。現在戦線四、六〇〇軒、さしにも廣い占領地域に、敵の來襲を受けた例の極めて稀であるのは誰の力であらう。敵機がないのでない。今でも飛んで来るなら来るだけの力はあるが、來ても我占領地上空には潜入し得ない。鐵のやうな防空の網が、我が防空部隊で張られて居るのである。

#### 整備

#### 五、整備

空中部隊が斯く連日輝かしい戦果を上げる一方、我々として見逃がし易く、而かも見逃

かしてならぬことがある。それは飛行機の原因力とも云ふべき整備兵の見えざる辛苦である。斯く活動し得た空中部隊の功績の一半は、この整備兵努力の賜である、一日の戦を終つてから、人の寝る夜中を燈火も乏しい寒空の下で、こつ／＼と飛行機の手入、整備をして、翌日の出動に支障なからしむる。之等整備員の辛苦は花々しい活動をする空中勤務者と對比して誠に涙ぐましいものがある。

#### 戦果

#### 六、支那事變の航空戦果

戦果と云へば空爆、空撃で地上の軍隊、資材、施設に對しても大なる損害も與へて居ることは云ふ迄もないが、茲には支那空軍が現在全く鳴りを静めているやうに、これを殆んど潰滅さして居るから、敵空軍に對する戦果だけを掲げて參考にする。(海軍の與へた損害は含まない)

(支那事變陸軍航空部隊の敵機撃墜爆破數)

期 間	敵 損 害			我 損 害
	撃 墜	地上爆破	計	
自 昭和十二年七月七日 至 同 年 末	一九七	一〇一	二九八	自爆及大破
自 昭和十四年一月一日 至 同 十二月二十五日	一三三	五九	一九二	
自 昭和十四年十二月 二十六日 至 同 十五年 末	八二	一六	九八	
昭和十六年	—	—	—	
計	四二二	一七六	五八八	六五

備 考  
一、本表外不確實なるもの多數あるも除けり  
一、十六年末期若干の損害與へたるも之を省けり

第五節 大東亞戦争に於ける我が航空部隊の活躍

昨昭和十六年十二月八日横暴極まりなき英、米に對し開かれたる、この大東亞戦は、其

の規模の尨大なる點から云つても、又眞に空、陸、海の三者一體の立體戦たる方面から云つても、正に戦史空前の大戦争であり、其の緒戦の戦果は勿論、其後の作戦の進展、推移の迅速と我が皇軍の大捷は亦世界全般の驚異の的となつて居る。

この戦況、戦果につきましては我國民もとより我國隆嬰の分岐戦であるから、一事残さず之を知らんと努め、既に周知のことであるから茲に改めて記述の要もないかも知れぬが、特にその航空部隊の活躍に關する重要なる事項だけを抽出して見やう。

もとより航空部隊と云へば、陸軍も海軍もあるし、海軍のあの八日に於ける「ハワイ」大空襲、とか十日の「マレー」沖の大成功は恐らく世界の何人も永久に忘れやうとして忘れぬ事實であるが、今迄屢々斷つたやうに、海軍のことは省略して陸軍航空隊のことだけを記述することにする。

陸軍航空部隊としては十二月八日の香港攻撃開始「マレー」東北海岸の敵前上陸、兩者に對する協力から初まつて、十日の比島北部上陸作戦、十一日の「ピナン」初空襲等をやり、爾後「ルソン」島の攻撃協力、香港攻略戦、馬來進撃の協力、蘭領諸島の上陸協力、さては「ビルマ」進撃の協力から遠く「ラングーン」其の他の要地攻撃をやりながら、一方この支那本土上とも差のない廣大な戦場全地域の空中防衛を續けて居るのである。

詳細のこと、即ち参加兵力とか、我が飛行基地とか云ふことは、今日一切公表を許されないことであるから、従来公表されたしかも大本營からの公表—戦果の内、航空部隊独自の戦果と認めらるゝものを拾つて見やう。今一つは今次の作戦で忘れてはならない上陸作戦に於ける航空部隊の活躍と其の重要性について記述することにする。

戦果

一、今次戦争の戦果

今次戦争開始以来陸軍航空部隊の戦果としては、先づ敵の空中勢力に大打撃を與へて、最早や我と四つに組むで戦ふ丈の戦力も戦意も失ふに至らしめたばかりでなく、陸軍機としては珍らしく各方面で船舶殊に軍艦迄も撃沈すると云ふ大なる戦果を擧げて居る。公表に現はれたものには次のやうなものがある。

- 十二月十一日比島方面では敵機七七を撃墜し一二五機を撃破して居る。
- 同十三日比島方面では同じく一三機を撃墜し八七機を撃破して居る。
- 同日の発表では別に我陸軍によつて敵飛行機一二九機を各方面で撃墜破して居る。
- 同二十五日には香港が降伏した日であるが、飛行機四〇撃墜、爆破八の戦果を擧げて居る。

○斯くて八月以来二十六日迄の総合戦果の陸軍発表によると、次の通りである。

敵飛行機撃墜破	爆撃機一三五
	計 五四一
	戦闘機四〇六

撃沈(破)艦船	大型 三三
	計 三七
	小型 四

我が飛行機損害四九

○昭和十七年一月七日陸軍公表による香港要塞改略戦果として、敵機の撃墜(破)一四機を加え、撃沈(破)砲艦四、船舶一三となつて居る。

又開戦以来一月三日迄(比島方面を除く)の総合的戦果では

撃墜破行機	五五九
撃沈(破)艦船	砲艦 二九
	驅逐艦 一
	潜水艦 四
	魚雷艇 八
	船舶 三
	計 五四

我飛行機損害 八一

である。

○一月十五日陸軍発表に依れば

一月七日—十四日の綜合戦果中の

「ビルマ」方面撃墜機 八一

地上爆破機 一四

船舶大破 數隻

が掲げられて居る。

○一月十五日から二十三日迄の一週間綜合戦果として陸軍の發表には更に

「マレー」方面 撃墜機 五五

撃破機 五三

計 一〇八

比 島 撃墜機 八

と加えて居る。

○一月二十四日から、同三十日迄の一週間綜合戦果は更に次の通り發表された。

「マレー」方面 撃墜 六四

撃破 一一

計 七五

「ビルマ」方面 撃墜 七〇

撃破 八

計 七八

以上は開戦の十二月八日から本年一月末まで五旬に亘る戦果中から、空軍独自の成果と認めらるゝものを擧げて見たのであつて、此の外公表に至らぬものもあらうし、又地上にある敵遺棄死體中の爆死者とか、兵器其の他の爆撃破壊等を加へると實に驚くべき戦果と思はるゝ。更に今後戦場の廣大、進攻爆撃の進展に伴つて益々偉功を顯はすこと、思はる。

地上作戦協力 二、地上作戦協力

地上の作戦に協力して何をやるかと云ふことは、前節にも詳述したから、恐らく想像の出来ることと思ふが、今次作戦地の地形から之を見ても、其の苦勞と之が效果とは大なるものがあると思はる。

比島方面の上陸部隊に就いて考へて見ても「ルソン」島東南岸「ラモン」灣、殊に更に東南端の「レガスビー」附近に上陸した部隊が「マニラ」の平地に出る迄の地形は熱帯植物の密林であつて、其の中を貫いて居る道路は兎も角も、路外は殆んど戦闘行動も出来難い處である「ラモン」灣方面は十二月二十四日「レガスビー」方面は十二月十二日敵前上陸をして以來、一月一日に「マニラ」平地に出る迄は、この困難な地形の内敵の抵抗を逐次排除しながら、進撃したのであるから、空中から其の進路を拓いて貰ひ、連絡をして

貫い、又時には補給も受けて、前進したことは想像出来やう、この地上協力の空中部隊の苦勞も思ひやられるのである。

又馬來方面は周知の如く一月下旬進出した「ジョホール」州は平野が大部分であるが、馬來の北國境附近に上陸して以來、一つは「ペナン」に進出する迄、又他方面では東海岸方面であらうと、西海岸方面、又は中央方面であらうと、共に僅少な不良な道路以外は所謂熱帯特有の「ジャングル」地帯であるが、敵はこの「ジャングル」地帯の中にも陣地を設けて居るので、我軍は道路附近だけを進むわけにはゆかない、やはり「ジャングル」地帯を前進せねばならぬ、又平地を攻撃する時でも一部は正面から攻撃するのではなくて、側方を背後に迂回して、迅速に戦果を擧げる必要があるので、自然いやでもこの「ジャングル」地帯に入らねばならぬ、こうなると僅かな抵抗でも中々苦戦をすることになり、又左右前後の連絡も十分にとれなくなるし、時には糧食、彈藥が後方から届かぬことは屢々あることで、このときこそ頼りになるのは、何と云つても唯一つ空からの協力である。

恐らく前に述べたやうに空中部隊独自の所謂敵空軍撃滅戦に大努力をして戦果を擧げつゝある一方、終始地上作戦に協力して眞に空地一體の實を擧げつゝ驚くべき今日迄の成果を擧げて居ることであらう。

將來「ビルマ」の進攻更に進展し、或は蘭領諸島にも之から各方面大なる戦闘が展開するとすれば、益々この地上作戦協力は重要であり、又大いに其の協力振りを發揮するものと考へらるる。

### 上陸作戦協力

#### 三、上陸作戦協力

今次開戦の當日敵が防禦に十分力を用ひて、警備怠らない「マレー」半島の東北海岸數箇所に行はれた敵前上陸、又十日に行はれた比島北部の上陸或は其の後行はれたる各方面の上陸悉く、我々の今だ嘗て實行しない。強行上陸であつて、この海上數百、千艀を距つた敵地の、この行動が如何に用意周到に、且つ大膽に敢行されたかは、その悉くが成功して我が損害の少なかつた點から見て何人も想像出来やう。

實際の細かい情況は公表の限りでないが上陸作戦には如何に航空隊が協力するかを多少順を追つて記述して見やう。

○先づ上陸地點の偵察であるが、これは色々の情況で早くからやることもあり、上陸直前に行ふこともあり、双方必要なこともあり、時には他の情報だけで行はないこともある。何を偵察するかと云へば勿論海岸の敵の防禦の状態、即ち兵力とか陣地設備の状況とかは見るが、特に小舟艇で海岸の平素上陸設備のない處へ乗り附けるのであるから、其の海

(偵察)



岸の地形即ち砂濱か、泥濱か、水の深さと、遠浅か否か、と云ふことから、波の寄せ方、その波の高さとか云ふこと迄を、細かく調べて上陸軍隊の計畫と諸準備に参考にするのである。

## (輸送掩護)

次に途中の輸送であるが今度のやうな場合は何處から乗船出發したかは判断に委すとして、何處から行くにしても、始めから小さい舟艇に乗つて行けないことは當然で、某地から數十隻の輸送汽船に乗船、搭載して所望の海岸迄行くのである。

この海上輸送間は最も陸軍としては弱味であつて、敵の軍艦、潜水艦は勿論、空軍も鵜の目、鷹の目で機會を窺つて居るのであるから、之れに發見されぬやうに、相手を追拂ふことも必要だし、假に發見されたら、攻撃を受ける前に攻撃して撃沈するとか、墜落するとかせねばならぬ。もしこれが出来なくても少しも手出しの出来ない丈けのことはさせねばならぬ。

それでないとな切な上陸前に、日露戦争の時の常陸丸のやうな運命になつては申譯ないことであるし、何と云つても陸軍の兵が船の上で、海軍と戦つたのでは勝目がないからである。

この海上の直接護衛は多くの場合海軍の艦艇でやるが空から飛行機で護衛をすることも

亦缺いてならないことである。事前に完全に空中權が我が手にあれば敵の空中戦力丈けには心配がないが、そうでない今度のやうな場合は、空中と海上と兩者の敵に對して航空部隊が掩護する必要がある。

然かもこれは晝夜を分たず、一瞬の隙もなく、やらなくてはならないので、苦勞も大變である。

## (泊地掩護)

○今度は豫定の上陸地點の近くの沖合、これは海の景況とか海岸防備の景況とかで岸から數百米の時も又時には數千米の時もある。この沖合に輸送船が停止して積んで行つた舟艇を卸下しこれに部隊が移乗するのである―これを「泊地進入」と云ふ―この時が又大變であつて、海軍艦艇が輸送船團の周りを圍むで海上の警戒もするが時にはこれが深さの關係で出来ないこともあるし出来たと云つて既に敵の勢力範圍内に深く進入したのであるから發見されたら最後、陸上からも海上からも之を攻撃して来る。多くは夜半に隱密に行ふのであるが、中々最後迄發見されないと云ふことは難かしい。發見される迄は空中から敵の空中監視の出勤せないやうにせねばならぬし、發見されて愈々強行上陸であるから、空中からも、時には海上からも火蓋を切つて攻撃しつゝ上陸を敢行することになる。この泊地進入から舟艇卸下、移乗を終つて先頭が出發する迄の時間は訓練によつて随分短時間には

出来るが、やはり〇〇時間は費かるのでこの間の緊要さは又経験ない人の想像も出来ぬものである。

(水際戦闘  
協力)

〇愈々上陸開始となれば最早や、特別の場合の外は優良防者には発見せらるゝのが通例であるので、こゝで愈々水際の戦闘が開始せらるゝ、即ち戦闘しつつ上陸と云ふことにな

る。  
幸にして第一次上陸部隊が発見されずに海岸に跳び上つたとしても、遅くもこゝで水際の死闘が開始さるゝ。

この時には上陸部隊の兵力も少ないし、後援續かずと云ふ時であるから、空中から十分に協力して地上部隊の援助をする必要があるのである。そうでないとこの第一次上陸部隊の者を意義なく命を捨てさして結果は零となつてしまうのである。

(據點死守  
と戦果擴大)

〇據點死守と戦果擴大

このやうに第一次の部隊が漸く上陸して、海岸の一地點に據つたとして、次に上陸する部隊は多くの場合、第一次に使つた舟艇が輸送船に引き返えして、再び之れに乗せて來るのであるから、この間相當の時間がかかるし、火炮等の重いものも最初は持つて行くことはごく少ないのであるし、全兵數も多くの場合守備兵よりは少ないのである。一方守備兵

は急を知つて各方面餘つた者を戦闘の場所へ馳せ參ぜしむることは當然であるから、當分の間は後援續かぬ僅少兵力で海岸の占領地點を死守せねばならなくなる。そして逐次戦果を擴大して廣く、深く占領地域を増大して茲に初めて上陸成功となるのであつて、此の間時には數時間に亘る死闘を續ける様になることもある。そこで空中部隊が機關銃ともなり大砲ともなつて、この戦闘を援助し、又敵の逐次多方面から増加する兵力を爆、銃撃して近づけないやうに阻止せねばならぬのである。

以上述べたやうに眞に我が勢力の及ばない敵地、而かも遠隔の地に行ふ上陸作戦には、其の準備期間から、實施期間を経て、完成迄の間、終始不斷の航空部隊の協力を必要とし又之れなくては成功甚だおぼつかないものである。

## 第六節 防空

茲に軍用機の最後に特別に節を設けて防空のことを記述するのは、近時一般に防空のことが喧ましく云はれ、我々一同、晝夜不斷の防空に努力して居るが、これは所謂民防空であつて軍防空は別にやつて居ること、又之れが最も大切で民防空は消極的防空であり、他に積極的の防空があることを忘れ勝ちであるからである。

既に東京には軍として防衛總司令部があり、各地方には數箇の軍司令部等で地方毎に防衛に任じて居ることは周知の通りであるが、防空として飛行機が如何なる任務を持ち、如何にして居るかを略述しやう。

飛行機による防空は積極的防空と、消極的防空に區分出來るし、更に消極的防空にも直接的防空と間接的の防空とに分けて見ることが出來ると思ふ。

#### 一、積極的防空

これは一寸防空と云ふ言葉があつて「びん」とこないかも知れぬが航空としては何と云つても「待つて防ぐ」のでは、既に消極と云ふが、敵に一步を譲つたことになるのであつて、眞の積極的防空と云ふものは「待つ」のではなく、自ら出かけて行つて敵に先んじなければ駄目である。

即ち他の何れかの國と事を構えたと云へば、其の瞬間、更に其の後斷へず自ら機先を制して出動して、敵を襲ひ、敵の空中勢力を根こそぎ叩き付けてしまふのである。今迄述べた所謂空中撃滅戰、進攻作戰で敵の空中戦力の使用を禁止せしむるのである。

かく云へば、何人もこの積極的防空が最も效果的であり、必要であることは判ると思ふ。

即ち完全に空中制覇が出來てしまへば、如何にしても敵は我に向つて空襲をやることは出來ないのである。

これを支那事變で考へて見ても事變勃發當時相當の空中戦力を持つて居た支那が、僅に北部臺灣に爆彈を投下したのと、九州の近くに現出しただけで爾後五年間、唯の一回も本土は勿論、九州、臺灣と雖も空襲し得なかつたのは、何のためであらうか。全く我が陸海軍の航空部隊の活躍によつて、彼の空中勢力を撃滅し、其の後再建を考へても、常に其の立ち上る前に撃破せられたからである。更に完全に空中權を我手に歸せしめたので、支那の奥地と雖も我が占地域に關する限り殆んど空襲らしい空襲はなし得ないのである。

更に今次大東亞戰爭を考へて見ても、敵として我が國を空襲し得る範圍の大平洋には澤山の飛行基地もあり、飛行機も優勢なものを持つて居つたし、更に航空母艦、水上機母艦もあつたからやらうと思へば何時でも空襲が敢行出來たのである。然るに開戰以來既に二ヶ月唯の一回も、唯の一機も我領土に一彈も落し得ず、我々緊張待機の間にも、枕を高くし得るのは何のためであらう。云ふ迄もなくこれ亦我航空部隊の活躍によつて前述した通り敵の航空戦力を殆んど潰滅に近く撃碎した賜でなくて何んであらう。重ねて云ふ、かく敵をして摺伏せしむる爲の我航空部隊の奮闘と積極的防空の必要は我々として決して忘れ

てはならぬことである。

## 消極的防空

これは前に述べたやうに間接的と云ふか半積極的の防空と直接必要なる地域地點を消極的に防空する二つがある。

我々は勿論皇軍航空部隊が常に前述の積極的防空の効果を發揚して呉れることを信じ、又現にかくあるのであるが、敵に一機でも殘存して居るか將來の長期に亘る戦争間には、新しく新鋭な航空勢力も増援されるであらうし、又一方航空戦の特質として一機も我國に來襲しない、とは決して斷言出來ないのである、否な必ず何時か、何地かに來襲のあることを覺悟せねばならない。

それが現在でも民防空態勢以上に緊張して、軍の活動して居る所以である。

敵の來襲が海上、海岸等の對空監視者に依つて發見せらるゝが、又航空部隊自ら遠く領土周邊で之を發見したならば、直ちに國內各方面に待機して居る内の必要な飛行機が飛んで行き、或は空中哨戒に任じて居る飛行機が、その方面に飛來して茲に領土の周邊か領土の端末に於て空中戦を演じて、敵機を擊墜又は擊退して、彼の慾する空襲を中途に放棄せしむるのである。これが即ち半積極的と云ふか間接的の消極的防空である。

然し不斷の監視の幕を突破し、或は前記空中戦の内から潜入して、重要都市、重要産業地、重要施設に向つて突進し來る。勇敢な飛行機がないとは云はれない。この遠くに於て捕へ得なかつた飛行機、潜入して來た飛行機を、改めて重要地域の上空を遊飛して待機して居た我が防空飛行機が捕捉して、之を擊墜擊退するのが直接的な眞の消極的防空である吾人の頭上に連日連夜今日も我が軍用機の飛翔しつゝあるのは此の空中監視空中防空の責任者たる我軍用航空機である。この苦勞は、前々節支那本土の要地防空の項に於て述べたから恐らく判ることと思ふ。

かく航空部隊による二段構、三段構の防空陣を突破して來襲し得た。飛行機があつた場合に於ては、こゝに初めて我々民防空に於て平素訓練の腕前を發揮し、其の被害を最少限に止めて敵の苦勞して敢行した空襲の効果を無にすることが必要であり。更に夜間等は規定の燈火管制を嚴守して、敵の目標發見を不可能、又は困難ならしめねばならぬ。これが即ち國民の務めであり。防空に任ずる我航空部隊の苦勞に報ゆるの途でもあらう。

我が航空部隊の活躍は完璧のものである。決して敵の來襲を怖れてはならぬ、然し又之に信賴するの餘り自ら行ふべき準備と萬一に應ずる訓練を怠つてはならぬ、「備あれば憂なし」自ら待つてあつて初めて完全なる防空が出来るのであることを忘れてはならぬ。

## 結言

以上航空機發達の跡を尋ね、茲に擱筆するに及んで、幸にこの拙著を讀んで下さつた各位に對し最後の一言を述べることを許して頂きたい。

それは我々日本國民一同、その官にあると、民間にあるとを問はず全力を擧げて「航空日本の確立」に向つて、最大の努力を傾注して頂きたいことである。

航空機が現在、世界の最先端を行つて、完全に地球の表面を獨占しつゝあつて、所謂「空を制するものは世界を制する」と云ふことが、現實に示されて居る。軍事に經濟に、文化に、産業に、今や航空機なくしては、何事も其の覇を握ることは出來ない景況である。之を國際政局上より見ても、既に第二章、第五節に述べた通り、空中勢力の優劣は、戦はずして、國策遂行の能否を決裁して居る。又既に二國武力を以て雌雄を決するに至りては、空軍勢力の優劣は明かに、陸海兩勢力の範圍を超越して、戦争の勝敗を左右して居る

こと、亦幾多の戦史が之を立證して居る通りである。

即ち、平戦兩時を通じ、所謂高度國防國家の建設には、この航空機の優秀なるもの而かも多量に、又技倆卓絶せる多數の人材を完備することが一大要素となつて來た。

而かもこの、航空の擴張充實とは飛行機や、操縦士の數の多寡を以て論じ得るものではない。

無限の金力を持ち、製産能力の優位にあるものが常に優者なりと考ふるのは、數を以て萬事を決筆せんとする唯物主義、資本主國の誤れる見解であつて、これは今次の歐洲大戰大東亞戰爭が明かに吾人に證明して居る。

幾萬の飛行機、何萬の操縦士を整備したとしても、その一機一員が眞に國家的無形の精神から生れ、卓越な性能と、果敢なる精神がなければ、何等の價値もない、優秀無比の飛行機、精鍊されたる航空技術者を有し、更に平戦兩時常に國家に身を捧げて奉仕するの修鍊され、到徹した精神的空の勇者を有しなければならぬのである。

幸にして、吾人は建國以來悠久三千年、他列強の追従を許さぬ、奉仕精神に育まれ、何人も笑つて死地に赴くことが出來やうが、之れに優秀機を與ふることは、今後更に一般の努力を必要とするのである。

更に言ふ、吾人は決して、軍用機や、軍人のみを指して言ふのではない。

一國の國防力は航空に於ても亦、決して軍航空のみのものでなく、軍航空と民間航空との綜合能力を發揮すべきものである。

之を飛行機其のものから云つても、今後の空軍は純然たる軍用機のみを以て足れりと思ふ。輸送機、病院機等は平時民間に於て大いに發達せしめ、有事の際、之を軍用に活用することは、一つは民間事業の發展に資し、一つは平時より莫大なる空軍の悉くを編成準備するの勞を除くものである。又旅客機、郵便機も直ちに民間機を軍用偵察機或は爆撃機として利用し得る途がある。

又航空機搭乗員について見るも、戦時に於ける軍の損耗は至大なるものがある。本文記述の通り歐洲大戰では毎月二〇%を越し、將來は毎月三〇%乃至四〇%を出すと思はる。一から如何に平時、軍航空員が準備されて居ても、開戦後互格の戦闘をやれば數ヶ月を出ずして悉々戦死、戦傷者となり、而かも遽かに之が補充をなすことは困難であるから、平時民間航空機搭乗員を多量に保有することは、單に民間航空事業の發展のみならず、一國興亡に關する緊要事である。之等は既に本文に於て列強又我國の民間航空運動として記述したから、之を判續すれば、各國が如何に此の點に努力を拂つて居るか、明かであら

う。米國は一萬五千人、英國は四千人の民間操縦士を有し、且つ、なほ足らずとして、之が増加を期して居る。我國の現状は如何に？

更に、飛行機の損耗に就きても、本文に記述せし如く、平時は一ヶ月平均現用機の三—四%と推定せらるゝに拘らず、戦時に於ては急激に増大し、前歐洲大戰には其の末期に於て、毎月戦場機数の四〇%を損耗して居る。現在の空中戦に於ては、殊に彼我勢力伯仲の場合には恐らく、更に損耗率を増大するものと信ぜらるゝ、「ノモンハン」事件、今次戦争等に於ける、公表に依る戦闘損耗のみを以て輕々に判断するのは誤りである—従つて之の損耗を遺憾なく補充し、戦争遂行に支障をなからしむるためには、飛行機生産能力は平時の五—六倍又は八—九倍に擴大を必要とする。飛行機が長期の貯蔵に堪えず—日進月歩のため—戦時急速補充の外なしとせば、こゝに平時より製造工場の組織經營に弾力性を持たしめ、平時産業に遊休せしめざる施設を以て、而かも戦時直ちに轉換利用し得るの施設を準備し置かねばならぬ。

之を要するに大東亞建設の盟主たる我國の地位に鑑み、少くも列強の水準線迄、我が民間航空を引き上げなければならぬ。之れが吾人が結言として云はんとする、我々國民に課せられたる義務であり、之を果すことが、即ち國民奉公の途であると云へやう。

元より容易の業ではない、先づ優秀な、飛行機を比較的安價に生産し、技術卓越なる飛行士を養成し、一方、國內飛行場の増設、航空路の開発、普及航空工業の振興等に、官民一致協力大なる努力を傾注するを必要とする。然かもこれ等は必ずしも實現至難でない。これが爲めには舉國、航空に関する智識を培養することが最も緊急重要な問題であると思ふ。

(附録) 航空に希望を有する人の爲め

第一節 航空要員の養成

本文に於て記述した通り、我國に於ても將來更に航空勢力の擴充強化が必要である。ことは明らかであるが、之が爲には、その量と質とを同等に強化せねばならぬ。兩者の何れを缺いても、鳥の片翼を取り去つたやうなものである。

量と云へば、各國汲々擴張を重ねて居るのに對し必要なる器材を整備すべきこと、これに伴つて航空要員の大量を得ること、が必要である。戦時にこの要員の消耗率が甚大でしかも器材のやうに迅速に補充、養成することは至難であることは既に述べた通りである。

質と云へば主として人的要素と器材的要素の結合を云ふのであつて、この兩者共に優秀でなくてはならぬ。精神、技術が如何に優れた搭乗者があつても、不良な器材では十分な活動は出來ぬし、反對に、器材が如何に優良でも、人が之に伴はぬでは駄目である。

しかも器材も亦優秀な人によつて作らるゝから結局、航空の發達擴充強化は人を第一と



するのである。

それで現在我國でも軍民協力して、この人を得ることに努力され居るのである。

以下陸軍の航空要員の養成の現状と民間操縦士養成機關並に之と軍との關係の概要を述べて、將來奮つて何れかの途から航空に志願せんことを希望し、其の參考資料を提供しやう。

海軍の方面は省略する。又詳細の志願者手引などは今迄澤山發行されて居るからそれを見て貰ひたい。

### 陸軍航空要員養成の概要

#### 一、陸軍航空要員の養成の概要

#### 操縦者

##### (1) 操縦者

この教育は要員養成中の最も困難なもので、教育期間も長期である。而かも一通りの教育が終つてから、更に戦技教育と云つて、各分科毎に戦闘、射撃、偵察、爆撃等を教育する。

將校の操縦教育に主として陸軍航空士官學校で基礎の教育をしてそれから各分科の學校で教育する(第二で述べる)

下士官操縦者の場合は少年飛行兵として東京陸軍航空學校を卒業したものと一般下士官

から採用した者を熊谷、太刀洗、宇都宮の各陸軍飛行學校で教育する。

#### 技術と整備要員

##### (2) 技術(機關)及整備要員

これは學校教育だけでは十分でなく其の後實地の修練が特に必要であるが學校教育は次の通りである。

將校の教育は陸軍航空官學校の一部で實施した後、陸軍航空技術學校で行ふ。

又別に航技將校と云つて帝大等から採用もする途がある。(第二で述べる)

下士官は少年飛行兵として、東京陸軍航空學校を卒業した者の内の一部と各隊の下士官から採用したものを陸軍航空整備學校で教育する。

#### 通信要員

##### (3) 通信要員

航空の將校は全員通信技能が必要であるが、特に教官教育として陸軍航空通信學校で教育する。下士官以下の通信専門者は東京陸軍航空學校の卒業者中所要の者を通信生徒として、陸軍航空通信學校で教育する。

#### 爆撃、偵察者

##### (4) 爆撃、偵察者

操縦者たる將校に戦技教育と同時に進むこともあるが、又純粹の爆撃偵察各専門の者も養成して居る。

民間の航空  
要員養成  
沿革

## 二、民間の航空要員養成の概要

### (1)沿革

最近迄は民間の飛行學校とか、飛行研究所などと云ふものが、全國に澤山あつたが、國策上之等の民間飛行學校の類を整理統合して、國立のものを作り、澤山の飛行家の養成を始められた。

即ち逓信省航機局で先づ昭和十三年に仙臺と米子に航空機乗員養成所を開設し、中等學校終了程度の者を「操縦生」として、一年間の教育を施し、卒業時に二等操縦士、二等航空士の免狀を與へて居た。

これは過渡期の臨時のものであつて昨年十六年四月になり、仙臺、米子の外に新潟、印旛(千葉縣)、熊本と合計五ヶ所に、地方航空機乗員養成所が開かれて、いよいよ本格的な養成が始められた。

そして今迄の米子と仙臺にあつた養成所は、操縦教育専門であつたのが今度の地方航空機乗員養成所はもつと内容の充實したものである。更に本年四月から以上五ヶ所の外に古河、京都、岡山、愛媛、都城、長崎の六地方航空機乗員養成所が新設され中央航空機乗員養成所(千葉縣)と十一箇の地方航空機乗員養成所になつた。

### (2)養成所の一般

○養成所は生徒に對し、飛行機及「グライダー」の操縦術及び之が整備法を教育し、併せて甲種工業學校の制度に則り、航空に關係ある工業教育をするのである。

従つて卒業生は二等飛行機操縦士、二等航空士、及び滑空士の免狀のほか、甲種工業學校卒業の資格を與へらるゝ筈である。

○生徒は國民學校初等科卒業生から募集し五ヶ年の教育を受けるのであるが、過渡期であるので當分、高等科卒業程度の者から第三學年生も採用し、且つ從來の操縦生も當分の間從來通りの方法で募集し教育せられる。

○卒業後は生徒は五年間、操縦生は二年間航空局長官の指定する業務に従事する義務制がある。

○志願者の心得、即ち資格の細部、修業と特典、志願手續、採用試験の内容其他は「航空局第二部乗員課」宛に請求すれば貰へるので詳細は省略する。

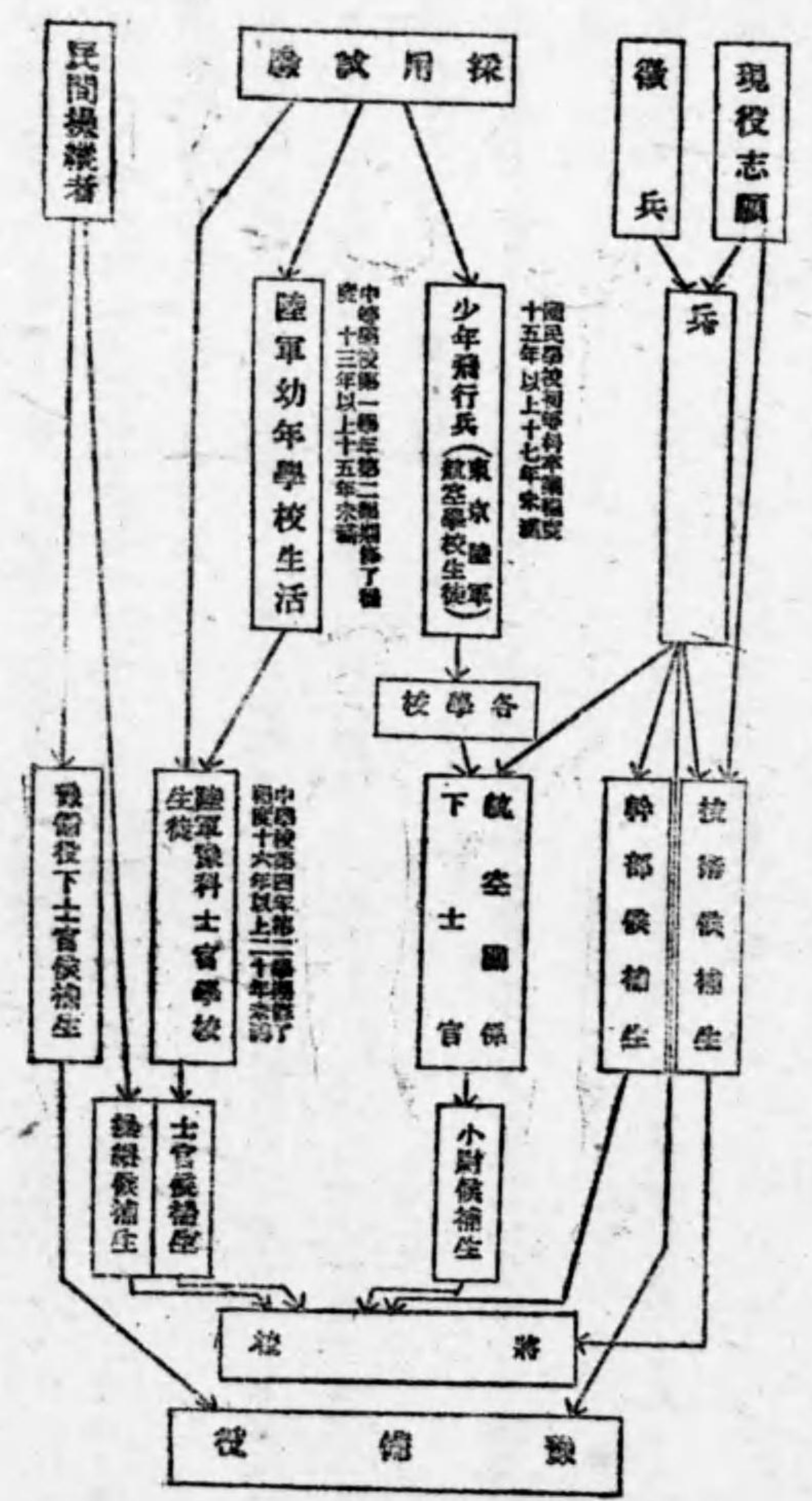
航空科豫備  
下士官養成

### 三、航空科豫備役下士官の養成

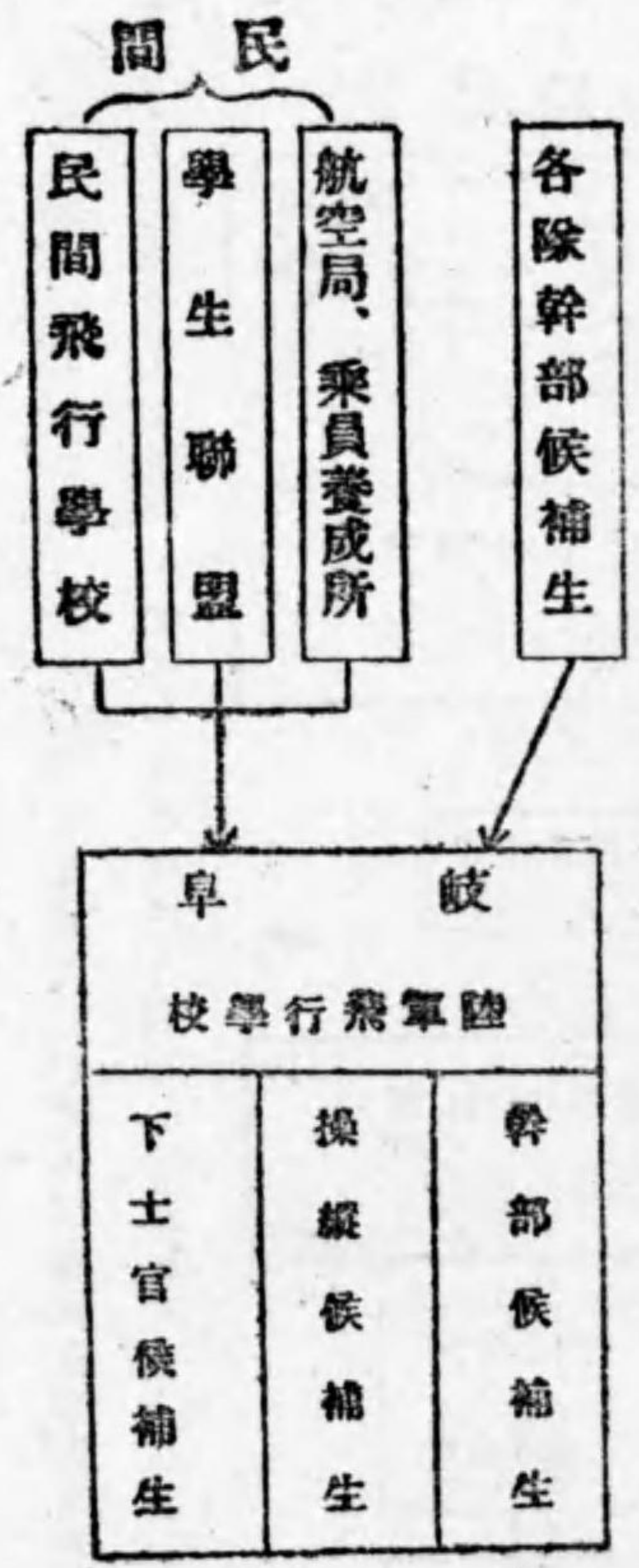
前項の乗員養成所、日本學生航空聯盟、又は從來の民間飛行學校を出て、資格のあるものは岐阜陸軍飛行學校に入校して所定の教育を経て、豫備役操縦將校又は下士官となり得

附録 航空に希望を有する人の爲めに  
る。

附圖第一 全般的航空部隊要員養成経路



附圖第二 陸軍豫備役操縦者養成要領



航空將校教育機關

第二節 航空將校教育機關

航空に關係する將校の教育にも色々の系統がある。即ち初めから陸軍將校生徒として採用せられて航空關係に入るもの、一般教育機關で高等教育を受けた者が航空技術將校となるもの、又其の内でも短期間現役技術將校を志願して採用せらるるもの、航空科の下士官から少尉候補者となり、將校教育を受けて任官するものなどである。以下先づ、本筋の將校生徒から進む路を述べ、其の後別の道からのものを説明しやう。

附録 航空に希望を有する人の爲めに

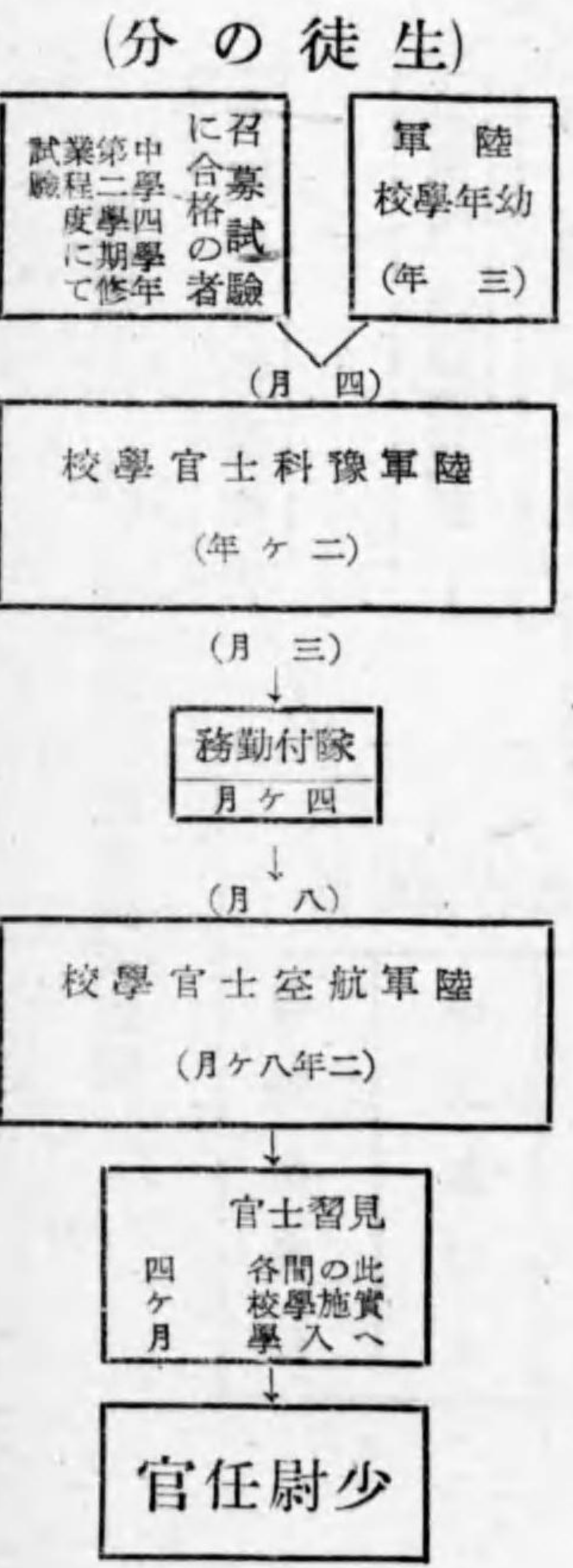
下士官から進む道は、先づ下士官になる道から述べなければならぬので第三で別に述べる。

陸軍航空士官學校

一、陸軍航空士官學校  
本校は航空關係將校と爲すべき生徒と學生を教育して、有爲なる帝國陸軍航空關係將校を養成する處である。

生徒は陸軍豫科生徒の課程を卒業し、航空關係の士官候補生を命ぜられたる者、又學生は航空關係少尉候補者を充て、各々通常毎年一回入校せしめらる。

現在は時局の關係から、教育期間を短縮せられたり又特別な手段も講ぜられて居るが、本則通りに教育するには、次のやうな経過と期間を必要とするのである。



そして、本校卒業後更に操縦者は分科に應じて明野(戦闘)、銚田(輕爆)、濱松(重爆)、陸軍飛行學校、又偵察を下津陸軍飛行學校で徹底的に教育を受けさせ、技術方面に従事せしめらるゝものは、陸軍航空技術學校に入校して教育さるゝのである。

志願者は陸軍幼年學校、陸軍豫科士官學校生徒共毎年度召募の告示が出るから、これによつて手續をして受験せねばならない。志願者の心得等は何時でも、教育總監部、各地の聯隊區司令部等へ申込みば貰へるから詳細は茲に記述しない。

學生、即ち少尉候補者から入校するものは、各隊の准尉、曹長、操縦術修得の軍曹から選抜された者が、所定の試験に合格して入校するのであつて、本校では一ヶ年間の教育を施し、卒業後、隊附二ヶ月を経て少尉に任官するものである。

陸軍航空將校

二、陸軍航空將校  
昭和十五年から、從來あつた經理部、衛生部と同様に陸軍に技術部なる新しい部門が創設された。

技術部は更に兵技と航技の二種に分れてゐて、専ら軍の技術を擔當する兵種であるが、兵技とは地上軍に關する技術、航技とは航空に關する技術を擔當するのである。

現役航空將校になる正道は依託學生(生徒)から進むのである。

依託學生(生徒)とは從來も軍醫などに、これからなつてゐるので、恐らく周知のことと思ふが、大學に在學中の者が學生、專門學校に在學中の者が生徒と云ふ名を附せらるゝのである。

○依託學生(生徒)に採用されると同時に兵籍に編入され、學生(生徒)には月四十圓(三十五圓)の手當金が給與される。又採用第一年次から、毎年、學校の夏季休暇中約三週間陸軍部隊(官衛、學校を含む)で軍事學、術科の教育を受けることになる。

○學生(生徒)が、在學校を卒業すると技術部の見習士官(曹長の階級)として採用され、通常二ヶ月の後に夫々學生(生徒)は陸軍航技中尉(同少尉)に任官せしめらる。

見習士官中は勿論營内に居住して、被服、糧食は官給であるが、外に月手當十六圓を給せられる。任官後は陸軍武官服務令の定むるところに従つて服務し、陸軍武官進級令によつて、尉官、佐官を経て、將官迄累進する。

○又任官後優秀者は詮衡の上、大學出身者は大學院に、專門學校出身者は大學に於て、勉學研究せしめられ、又は外國留學の途も開かれて居る。

○志願者の資格は毎年官報に發表されるけれど、大體滿二十七歳以下の者で

(技術部依託學生)

大學令に依る大學の理、工、農學部の學生であつて左の學科を履修しつゝあるもの、

工學部—航空學、船舶工學、機械工學、造兵學、電氣工學、冶金學、金屬工學、應用

化學、工業化學、火業學、燃料化學、建築學、土木工學

(以上之に類するものを含む)

理學部—物理學、化學學、地質學、數學(以上之に類するものを含む)

農學部—農藝化學、

(技術部依託生徒)

主として工業に關する學科を教授する專門學校(研究科、選科等の別科を除く)の生徒で左の學科を履修しつゝあるもの、

航空工學、造船工學、機械工學、精密機械學、電氣工學、原動機械學、應用化學、紡

績學、冶金學、金屬工業學、燃料學、土木工學、建築工學

(以上之に類するものを含む)

志願の手續等は其都度官報に掲げらるゝから之によつて承知されたい。

短期現役航  
技將校

三、短期現役(豫備役)航技將校

豫備役航技將校になるのであるが、二年間を限つて現役の航技將校として服務するもの

附録 航空に希望を有する人の爲めに

である。

希望者は陸軍技術候補生を志願すればよい。技術候補生に採用されると、約四ヶ月間、通常、陸軍航空技術學校で航技將校として必要な勤務の教育を受ける。この内、最初の二ヶ月が軍曹の階級、残りが見習士官であつて、それが終れば、大學出身者は現役の航技中尉に、専門學校出身者は現役の航技少尉に任官せしめられ、通常直ちに航空技術に關係する官衛學校に配屬されて、技術に關する仕事に従事し、二年の現役を終れば、豫備役に編入されるのである。

二年の現役を終つた者には志願に依つて引續き現役の航技將校となる途も開かれて居る。

### 第三節 陸軍少年飛行兵

陸軍少年飛行兵

#### 一、沿革

昭和十五年まで通稱「少年航空兵」と呼ばれて居たが、これは正しく云へば「東京陸軍航空學校生徒」である。

昭和九年から初められた制度で、所屬陸軍飛行學校の生徒隊で教育を初めたのが昭和十

三年、東京府下村山村に東京陸軍航空學校が設立されて、こゝで教育することになつた。

そして昭和十五年迄は此の修業期間「陸軍生徒」の身分で取扱はれて居つたが、改正されてからは、最初の二年間（航空學校の一年と其後の二年間他の學校で教育を受ける全三ヶ年の内の前の二年）は陸軍生徒で、最後の一年間は現役上等兵となりこれを特に（少年飛行兵）と呼ぶやうになつたのである。

#### 二、志願資格

○入校年度の四月一日調べで満十五歳以上満十七歳未満の者と云ふ年齢の制限がある。

學歷は問はないが學力として國民學校初等科六學年卒業程度がなければならぬ。

○其他破産の宣告を受けて復権してゐない者とか、禁錮以上の刑に處せられた者は志願出來ない。

○又試験の内で體格検査は當然随分嚴重に實施せらるゝことであり、標準も定まつて居る。

詳しい心得は航空本部、東京陸軍航空學校、全國の各聯隊區司令部などで貰つて承知すればよいから茲には記述しない。

東京陸軍航空學校の教育の内容は省畧するが勿論、軍人としての精神教育を主體とし、

身體も保育上醫學的に心理的に且つ給與に、萬全の注意を拂つて十分將來の激務に堪えるやうに作られる。普通學も入校當時は國民學校第六學年卒業程度が、この一年間には概ね中學三年程度にまで進めらるる。

飛行機操縦等の飛行機の實際の教育は東京陸軍航空學校では教育せず、今述べた通り、將來下士官となり將校となるための、精神的教育と、普通學、軍事教育も教へ、且つ體力の増進に重きを置いて居る。

### 三、教育の経路（附圖参照）

○東京陸軍航空學校の一年間の課程を卒へると、本人の希望と適性検査の結果で、三つに分けられる。即ち操縦、整備、通信に區別される。

#### (1) 操縦生徒

これは爆撃機操縦は熊谷陸軍飛行學校、偵察機は宇都宮陸軍飛行學校、戦闘機は太刀洗陸軍飛行學校に入校して教育せらるるのである。

○東京陸軍航空學校を卒業して右の學校へ入校したなら、最初の一年は陸軍生徒として地上教育中隊で、幹部となるべき性格、徳操を涵養しながら、飛行機操縦に任ずる少年飛行兵として必要な學術技能を授けられる。

即ちこの一年間は堅實な軍人精神を鍛錬することを第一義とするのは勿論であるが、最初の六ヶ月は一般教練と軍事學の修習をやり、次の六ヶ月は操縦に必要な飛行機の構造、機能、取扱法などを教えられ、又將來發達の素地を與へるために、前の航空學校の教育に連繋して課外に普通學を教育して、中學校三、四年程度の實力をつける。其他操縦資質向上の目的で滑空訓練が行はれる。

以上の一年の地上教育を卒へたなら、初めて「少年飛行兵」を命ぜられ上等兵の階級が與へられて、操縦教育中隊に入るのである。

○この一年間も最初の六ヶ月は初等練習機で操縦術と基本の航法を修め、技倆が向上したところで、後の六ヶ月間を高等練習機によつて操縦と野外空中航法を習ふのである。

此の一年間で基操本操縦を修得し、兵長を命ぜられ、更に各實施學校に入校し、その後四ヶ月夫々爆撃操縦、戦技等の訓練を受けた後、各飛行隊に配屬され、ここで初めて一人前として勤務することになる。

#### (2) 整備生徒

整備と云ふのは飛行機が飛び出すまでの仕事、飛行場にあつてその飛行機の點檢、手入れ修理をする大切な準備の仕事である。

この方面に行く者は前の航空學校から所澤にある陸軍航空整備學校に入校するのであつて、其後は操縦生徒と同様初めの一年は陸軍生徒、後の一年が上等兵で少年飛行兵となるのである。

(3)通信生徒

通信に關する専門の教育をするので前と同じ様な経路であるが唯學校は陸軍航空通信學校に入校せしめられるのである。

以上の他戦技を習得せしめる學校として、水戸陸軍飛行學校がある。

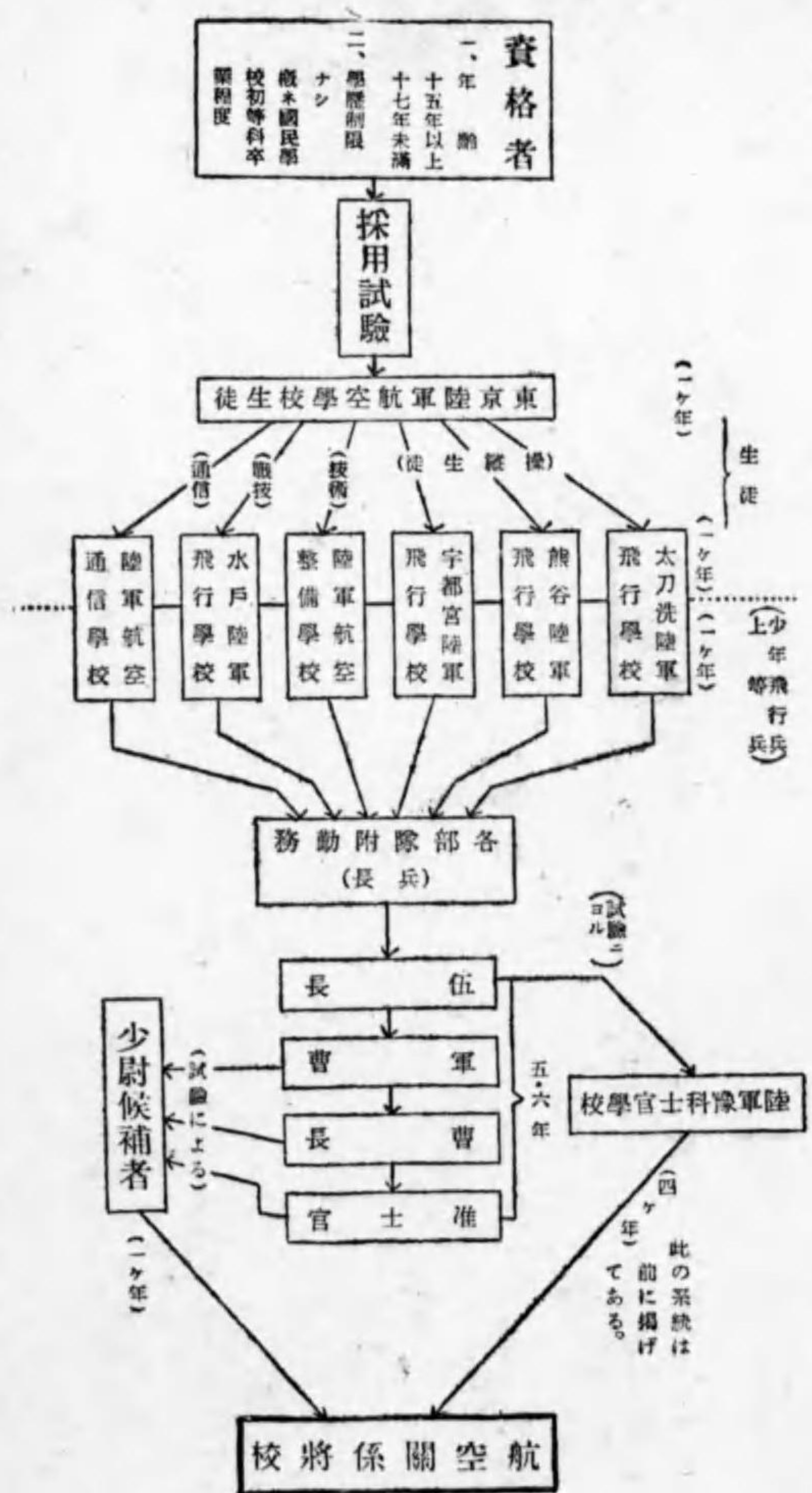
兵長を命ぜられて、六ヶ月の後には、いよく伍長に任官し、後は普通の下士官としての待遇と進級を経るのである。

四、下士官任官後

下士官に任官後四年(操縦生は三年)を経ると、少尉候補者の受験資格が出来、これに合格すれば陸軍航空士官學校の學生となり、一年の課程を経て少尉に任官せしめられ、其後は一般將校生徒の道を経て任官した者と、同様に進級することになる。

尙ほ整備科出身者で成績優秀者は特に官立の高等工業學校に委託生徒として入校せしめられて、卒業後前に述べた、航技將校として進む路もある。

(附圖) 陸軍少年飛行兵の教育経路





昭和十八年七月十日初版印刷  
昭和十八年七月十五日初版發行

(三、〇〇〇部)

世界航空發達史

定價金四圓五十錢  
特別行爲稅相當額十五錢  
計金四圓六十五錢

認承協文出  
號130206



著者

發行者

印刷所

桑名卓男

東京市小石川區駕籠町一八九  
高山菊次

東京市神田區錦町三ノ二十六  
秀好堂印刷所  
代表者 小笠原秀雄

東京市小石川區駕籠町一八九

敬材社

電話大塚(86)二〇三八番  
振替東京五六一〇七〇番  
會員番號一〇七〇一三番

發行所

配給元 日本出版配給株式會社



終